大 谷 川 I

昭和58年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業 埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)

1984

財団法人 駿府博物館付属 静岡埋蔵文化財調査研究所

静岡埋蔵文化財調查研究所調查報告 第5集

大 谷 川 I

昭和58年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業 埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原·元宮川遺跡)

1984

财团法人 駿府博物館付属 静岡埋蔵文化財調査研究所 設立2年目を迎えた本研究所にとって、昭和58年度における大谷川埋蔵文化財発掘調査は、静岡平野における最初の事業となった。

調査対象となった神明原・元宮川遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての低湿地における集落遺跡として知られ、周囲には登呂遺跡、有東遺跡、汐入遺跡などの著名な集落遺跡のほか、宮川古墳群、伊庄谷横穴群、上ノ山遺跡などの古墳群もみられ、この地の中心的な遺跡の一つと考えられていた。ことに、昭和55・56年度には、静岡市教育委員会による大谷川河川改修事業関連の調査が実施されて遺跡の性格の一端が明らかにされたのであった。

今年度の調査は、この静岡市教育委員会の調査を継承するものであって、現地調査は4月から12月にわたり、整理作業は昭和59年度も引きつづき実施する予定である。その調査の成果はめざましく、古代の大谷川の流路から人形・馬形木製品・斎串・ト骨・夥しい数の土器などの祭祀遺物の出土をみ、神明原・元宮川遺跡を流れる大谷川が、古代の大規模な「水辺の祭り」の場であることが解明された。この事実は、今までの静岡平野における歴史認識に大きな変更を迫るほどのものであるとともに、今後、静岡平野の歴史を構成する上で貴重な手がかりとなるであろう。また、「他田里戸主字トマ真酒」と書かれた木簡が出土し「倭名抄」記載の古代行政区画を証する貴重な資料を得たことも特筆すべき成果であった。

本報告書は、大谷川一神明原・元宮川遺跡の調査報告の「I」であり、今後引きつづき 調査刊行される大谷川河川改修事業関連調査の *第一報 として重要な役割を果すであ ろうと確信したい。

なお、この調査に深い理解と協力をいただいた静岡県静岡土木事務所の方々に深い感謝の言葉をささげるものである。あわせて、静岡市教育委員会の配慮に対して心から謝意を表するとともに、静岡県教育委員会の指導助言に感謝するものである。また調査及び報告書の執筆に関係した当所員の辛労に対して謝意を表する。

昭和59年3月

財団法人 駿府博物館付属 静岡埋蔵文化財調査研究所

所長 斎 藤 忠

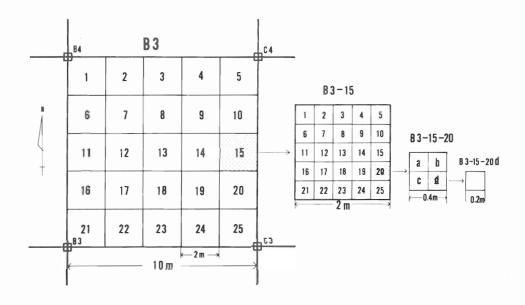
- 1. 本書は静岡市大谷・西大谷・水上・宮川・高松に所在する神明原・元宮川遺跡の調査報告書である。昭和58年度に発掘調査された遺構のすべてを報告するが、出土遺物は整理箱約600箱にも達する膨大な量であるため土器・木製品の一部を報告するにとどめる。残りについては次年度以降に改めて報告する予定である。
- 2. 調査は静岡県静岡土木事務所を委託者とし財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所を受 託者とし、静岡市教育委員会を調整者とする昭和58年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業埋 蔵文化財発掘調査業務である。
- 3. 調査期間は昭和58年4月20日~昭和59年3月31である。現地調査は5月~12月実施、一部資料整理は併行して3月31日まで実施した。
- 4. 調査は静岡埋蔵文化財調査研究所、栗野克己(主任調査研究員)・小嶋日出一(調査研究員)が担当者としてあたった。
- 5. 本書の執筆分担は以下の通りである。

- 6. 発掘地点の土層の検討については静岡県教育研修所の高橋豊氏に、土層中の火山噴出物の同定は静岡大学農学部 加藤芳朗教授に依頼し、その結果は特論として掲載した。
- 7. 本書の編集は静岡埋蔵文化財調査研究所があたった。

本書の記述については以下の基準に従がい、統一をはかった。

1. グリッド分割は次のとおりである。

グリッド分割



- 2. 文中にて発掘区の中の一部分を限定する場合、グリッド杭の並びにより、34列 ~ 37 列あるいはF列 \sim H列のように用いた。
- 3. 土器実測図には、報告書での見出番号、遺物番号、()内に出土グリッドの3つを併記した。宮川2区のものは範囲がせまいためグリッド名は除いた。木製品実測図には遺物番号とグリッド名のみ記した。
- 4. 観察表でグリッド欄に記されているN、MGはそれぞれN一西大谷、MG一宮川を示す。
- 5. 遺構・遺物の標記は次のとおりである。又、遺構番号は1地区での通し番号とした。

遺構遺物の標記

	遺	構(5)		遺	物
A	柵	G	小鍛治遺構	W	木製品	
В	竪穴住居跡	Н	掘立柱建物	Р	土製品	
С	祭祀遺構	P	小穴•土坑	S	石製品	土器は番号の
D	溝	L	護岸遺構	M	金属器	 みで符号なし
E	井 戸	R	河川流路跡	В	玉 類	
F	土壙	X	その他	Е	その他	

6. 図版中等高線に付した数字の単位は〔cm〕である。

目 次

_	
~	
ヴァ	

第 章	調 査 の 経 過
第1節	調 査 前 史
第2節	調査に至る経過
第3節	調 査 の 方 法
第4節	調 査 の 経 過
第5節	土 層
第Ⅱ章	位置と環境
第1節	地 理 的 環 境
第2節	歷 史 的 環 境
第 Ⅲ 章	遺 跡 の 概 要
第1節	西大谷地区
1	A 中世遺構
	34列~39列 1
	46列~50列 1
I	B 古墳時代遺構
第2節	宮川 1 区 • 2 区 ······
第3節	旧 大 谷 川
第Ⅳ章	遺 物 6
第1節	概 要 6
第2節	土 器
第3節	木 製 品
第4節	
	土器観察表
	木製品観察表 10
第 V 章	〔特論〕 土層について
第1節	神明原・元宮川遺跡宮川 2 区の火山灰層について 高橋 豊 … 12
第2節	静岡市神明原・元宮川遺跡の堆積層について 加藤芳朗 … 12
第Ⅵ章	ま と め
	参 考 文 献

挿 図 目 次

第	1	\mathbb{X}	軍需工場建設に伴う大谷川改修図	4
第	2	図	大谷川改修工事計画断面と埋蔵文化財発掘調査状況概念図	
第	3	図	調査地点位置図	Ę
第	4	図	西大谷2区I一J土層断面図	(
第	5	図	大谷川周辺遺跡分布図	12
第	6	図	西大谷地区グリッド配置図	16
第	7	図	西大谷地区断面図	19
第	8	図	西大谷地区全体図	21
第	9	図	西大谷地区34列~39列中世遺構全体図	23
第	10	図	西大谷地区46列~50列中世遺構全体図	25
第	11	図	西大谷地区SL21護岸状遺構図	26
第	12	\boxtimes	西大谷地区46列~50列中世個別遺構図	27
第	13	図	西大谷地区C48・49グリッド粘土採取跡	28
第	14	図	西大谷地区古墳時代遺構全体図	29
第	15	図	西大谷地区 I 34 • J 35 グリッド古墳時代遺物分布図	31
第	16	X	西大谷地区G37・38グリッド古墳時代個別遺構図	33
第	17	図	宮川地区グリッド配置図	36
第	18	図	宮川1区2区位置関係図	37
第	19	図	宮川1区全体図	39
第	20	図	宮川1区個別遺構図1	41
第	21	図	宮川1区個別遺構図2	42
第	22	図	西大谷地区旧大谷川内等高線図	47
第	23	図	西大谷地区旧大谷川内時代別遺物分布図	49
第	24	図	宮川2区断面図	53
第	25	図	宮川 2 区全体図 1	55
第	26	図	宮川 2 区全体図 2	57
第	27	図	宮川 2 区全体図 3	59
第	28	図	宮川 2 区杭列遺構図	61
第	29	図	土器実測図 1. S D15埋土上層出土 土器	71
第	30	図	土器実測図 2. 西大谷地区旧大谷川内出土 須恵器	72
第	31	\boxtimes	土器実測図 3. 西大谷地区旧大谷川内出土 土師器	73

第	32	図	土器実測図	4.	西大谷地区旧大谷川内出土 土師器	
					宮川 2 区出土 項恵器・土師器	74
第	33	図	人形実測図	1.	西大谷地区 F 39、 D 43 ~ D 45 グリッド出土	75
第	34	図	人形実測図	2.	西大谷地区 D46 グリッド出土	76
第	35	义	人形実測図	3.	西大谷地区 D46 グリッド出土	77
第	36	义	人形実測図	4.	宮川 2 区出土人形	78
第	37	义	西大谷地区出	土大	形人形。斎串実測図	79
第	38	义	馬形木製品	1.	西大谷地区出土	81
第	39	\boxtimes	馬形木製品	2.	西大谷地区出土、宮川地区出土	82
第	40	図	斎串実測図	1.	西大谷地区 F 39~ E 43 グリッド出土	83
第	41	図	斎串実測図	2.	西大谷地区E43~D45グリッド出土	84
第	42	図	斎串実測図	3.	西大谷地区 D46 グリッド出土	85
第	43	図	斎串実測図	4.	西大谷地区 D46 グリッド出土	86
第	44	図	斎串実測図	5.	西大谷地区 D 46-22 グリッド出土	87
第	45	図	斎串実測図	6.	西大谷地区 D46-23グリッド出土	88
第	46	図	斎串実測図	7.	西大谷地区 E 46 グリッド出土	89
第	47	図	斎串実測図	8.	宮川 2 区出土	90
第	48	図	静岡市神明原	· 元	宮川遺跡断面の地層柱状図	121

図版目次 1. 神明原・元宮川遺跡航空写真 — 南より 図版 1 2. 神明原・元宮川遺跡航空写真 --- 南より 1. 西大谷地区を上空より望む―― 北より 図版 2 2. 西大谷地区を上空より望む――西より 図版 3 1. 西大谷地区発掘全風景 — 南より 2. 西大谷地区表土除去開始 — 南より 図版 4 1. 34列~39列中世遺構面精査開始—— 北より(西大谷地区) 2. 34列~39列中世遺構面——南より(西大谷地区) 図版 5 1. SD5・SD6・SD12溝状遺構—— 南より (西大谷地区) SD5 溝状遺構―― 南より (西大谷地区) 図版 6 SD9溝状遺構――南より(西大谷地区) 1. SD9溝状遺構とその断面――北より(西大谷地区) 1. SD6 溝状遺構—— 南より(西大谷地区) 図版 7 SD2 溝状遺構――北より(西大谷地区) 図版 8 1. 34列~38列古墳時代遺構面—— 南より(西大谷地区) 2. 34列~38列古墳時代遺構面——北より(西大谷地区) 図版 9 1. SD24溝状遺構──西から(西大谷地区) 2. S D 24 内木製遺物出土状態(西大谷地区) 1. S X 60集石状遺構 — 東から I 35グリッド(西大谷地区) 図版10 2. 古墳時代初頭の土器分布状態 [34グリッド(西大谷地区) 図版11 1. 古墳時代初頭土器及び礫分布状態 [35グリッド(西大谷地区) 2. 古墳時代初頭土器及び礫分布状態 J 35グリッド (西大谷地区) 1. G37・G38グリッド付近古墳時代遺構面—— 北より(西大谷地区) 図版12 2. G37グリッド付近古墳時代遺構面――東より(西大谷地区) 図版13 1. G36・G37グリッド付近古墳時代遺構面—— 北より(西大谷地区) 手前よりSF1・SF4・SF3土坑状遺構――北より(西大谷地区) 図版14 1. S D 15 溝状遺構 — 北より(西大谷地区) 2. S D 15 溝状遺構 — 南より (西大谷地区) 図版15 1. S D 15 溝状遺構埋土上層土器出土状態(西大谷地区) 2. SD15溝状遺構埋土上層土器出土状態(西大谷地区) 1. 39列~44列旧大谷川河床面—— 北より(西大谷地区) 図版16 2. 39列~44列旧大谷川河床面——南より(西大谷地区) 図版17 1. SL21護岸状遺構――西より(西大谷地区) 2. SL21護岸状遺構 — 南より(西大谷地区) 1. 第4トレンチ断面—— 北より(西大谷地区) 図版18 2. 第4トレンチ断面―― 旧大谷川内堆積状態―― 北より(西大谷地区) 3. 発掘区西壁旧大谷川内堆積状態――東より(西大谷地区)

図版19 1. F40・41・42、G40・41グリット付近旧大谷川内河底礫堆積状態—— 南から(西大谷地区)

- 図版19 2. F41グリッド付近旧大谷川奈良時代以降流路―― 南より(西大谷地区)
- 図版20 1. F42・43グリッド付近旧大谷川古墳時代後期流路—— 北より(西大谷地区)
 - 2. F42グリッド付近旧大谷川古墳時代後期流路―― 南より(西大谷地区)
- 図版21 1. E42、F43グリッド付近断面に見られる旧大谷川流路変遷状態—— 南より(西大谷地区)
 - 2. F43グリッド杭付近古墳時代流路堆積土(西大谷地区)
- 図版22 1. H38・39グリッド遺物出土状態―― 東から(西大谷地区)
 - 2. H39グリッド遺物出土状態—— 東から(西大谷地区)
- 図版23 1. 第1トレンチ内牛形土製品出土状態G41グリッド(西大谷地区)
 - 2. 馬形土製品出土状態 E 42-20 グリッド (西大谷地区)
 - 3. 人形土製品出土状態 E 41-9 グリッド (西大谷地区)
 - 4. 木簡出土状態 E 43-14 グリッド (西大谷地区)
- 図版24 1. ト骨と伴出土器出土状態 F 42 グリッド (西大谷地区)
 - 2. ト骨出土状態 F 42 グリッド (西大谷地区)
- 図版25 1. 獣骨出土状態 E41-9 グリッド (西大谷地区)
 - 2. 獣骨出土状態 F41-5 グリッド (西大谷地区)
- 図版26 1. F42グリッド付近遺物出土状態(西大谷地区)
 - 2. 重なって出土した土師器坏と壺F42グリッド(西大谷地区)
- 図版27 1. 鉾形木製品・木製模造刀出土状態 F 42-2、F 43-22グリッド(西大谷地区)
 - 2. 舟形木製品出土状態 E 43グリッド (西大谷地区)
 - 3. 鍬の柄出土状態 F43-9 グリッド (西大谷地区)
- 図版28 1. E43~D43土手付近遺物出土状態(西大谷地区)
 - 2. E43~D43土手付近遺物出土状態(西大谷地区)
 - 3. E43~D43土手付近遺物出土状態(西大谷地区)
- 図版29 1. 土器出土状態 E 43 グリッド (西大谷地区)
 - 2. 須恵器高坏出土状態 E 43グリッド (西大谷地区)
- 図版30 1. 土器出土状態 D 45 グリッド (西大谷地区)
 - 2. 須恵器大形壺出土状態D45-2グリッド(西大谷地区)
- 図版31 1. D46・E46グリッド付近旧大谷川右岸部—— 南東より(西大谷地区)
 - 2. D46グリッド付近旧大谷川右岸部堆積土 E47杭~ E48杭断面(西大谷地区)
 - 3. D46 · E46グリッド付近旧大谷川右岸部 西より(西大谷地区)
- 図版32 1. 旧大谷川右岸部遺物出土状態—— 北より D 46 グリッド (西大谷地区)
 - 2. 旧大谷川右岸部土器出土状態 東より D 46 グリッド (西大谷地区)
- 図版33 1. 斎串出土状態 D46 グリッド (西大谷地区)
 - 2. 人形・斎串出土状態 D 46 グリッド (西大谷地区)
- 図版34 1. 斎串等木製品出土状態 D 46 グリッド (西大谷地区)
 - 2. 横櫛出土状態 D 46 グリッド (西大谷地区)
- 図版35 1. 旧大谷川右岸部遺物出土状態—— 東より D 46 グリッド (西大谷地区)
 - 2. 旧大谷川右岸部遺物出土状態—— 北西より D 46 グリッド (西大谷地区)
- 図版36 1. D46グリッド籠出土状態(西大谷地区)
 - 2. D46グリッド籠出土状態(西大谷地区)
 - 3. D46グリッド籠・削り掛け様木製品出土状態 (西大谷地区)

```
図版37 1. D46グリッド籠出土状態(西大谷地区)
     2. D46グリッド曲物容器出土状態(西大谷地区)
    1. 46列~50列の中世遺構面——南より(西大谷地区)
図版38
     2. 46列~50列の中世遺構面——北より(西大谷地区)
    1. SD28溝状遺構—— 北より(西大谷地区)
図版39
       SD29溝状遺構――南より(西大谷地区)
図版40 1. SH39掘立柱建物柱穴――北より(西大谷地区)
     2. S P 32土坑状遺構 — 南より (西大谷地区)
     3. SP38柱穴状遺構 -- 北より (西大谷地区)
    1. S X 25粘土採取跡(西大谷地区)
図版41
     2. S X 25壁面状態(西大谷地区)
図版42 1. S X 34粘土採取跡(西大谷地区)
     2. S X 36粘土採取跡(西大谷地区)
図版43 1. 宮川1区調査開始 ─ 東より
     2. 宮川2区調査開始 ― 南より
    1. 宮川1区奈良・平安時代遺構面全景 ― 南より
図版44
     2. 宮川1区奈良・平安時代遺構面全景 ― 北より

    SE1井戸状遺構──東より(宮川1区)

図版45
     2. SE2井戸状遺構—— 東より(宮川1区)
     3. SE3井戸状遺構——北より(宮川1区)
     4. S P11土坑状遺構—— 北より(宮川1区)
     5. S P 13土坑状遺構 — 北より (宮川1区)
    1. SD4溝状遺構──西から(宮川1区)
図版46
     2. SD4 溝状遺構断面 — 東から (宮川1区)
    1. SD5溝状遺構── 南より (宮川1区)
図版47
     2. SD5溝状遺構断面――南より(宮川1区)
    1. SE6井戸 — 西より(宮川1区)
図版48
     2. SE6井戸 — 北より (宮川1区)
     3. SE6井戸 — 南より(宮川1区)
     4. SE6井戸 — 内部 (宮川1区)
    1. 宮川2区調査完了状態―― 南より
図版49
     2. 宮川 2 区調査完了状態 — 北より
    1. 中世杭列——南東より(宮川2区)
図版50
     2. 旧大谷川内堆積粘土中遺物出土状態(宮川2区)
図版51 1. 遺物出土状態── 南より(宮川2区)
     2. 木製品出土状態(宮川2区)
     1. S D 15 構状遺構埋土上層一括出土土師器
1. 西大谷地区旧大谷川内出土須恵器。灰釉陶器。山茶埦
図版53
    1. 西大谷地区旧大谷川内出土須恵器·灰釉陶器·土師器
図版54
    1. 西大谷地区旧大谷川内出土土師器
図版55
```

1. 西大谷地区旧大谷川内出土土面器 · 宮川 2 区旧大谷川内出土須恵器 · 土師器

図版56

図版57 1. 西大谷地区·宮川2区旧大谷川内出土人形木製品

図版58 1. 西大谷地区旧大谷川内出土人形木製品·斎串 西大谷地区·宮川2区旧大谷川内出土馬形木製品

図版59 1. 西大谷地区旧大谷川内出土斎串

図版60 1. 西大谷地区•宮川2区旧大谷川内出土斎串

図版61 1. 第1号木簡

第 I 章 調 査 の 経 過

第1節 調 査 前 史

はじめに「神明原・元宮川遺跡」という複合名称について説明しておきたい。従前には「神明原遺跡」・「元宮川遺跡」という別々の名前で登録された遺跡であった。(文献 1)しかも、地点は約 600 m程離れ、それぞれの範囲も狭かったのであるが、遺跡周辺で昭和40年代に実施された農地改良事業後の埋蔵文化財包蔵地分布調査の結果、土器片の散布地域が広がりをみせ、両者の区分ができず合併してしまい静岡市内では最大面積の遺跡となったのである。(文献40) そこで地名を検討しなおして新しい名称をつけるという方法もあるが、両遺跡名ともに学史的にも捨てがたく、複合名称を使うこととした。

元宮川遺跡は、静岡縣史(昭和5年)と静岡市史(昭和6年)に記載のあるのが初見である。その一部を紹介すると次のようである。

- ① 縄文式文化時代の遺物出土地として、大谷区元宮川 ─ 石錘、敲石、打製石斧(縣史1 巻 264 頁)
- ② 弥生式文化時代の遺物出土地として、大谷区元宮川 弥生式土器片、石錘六(縣史1 巻 365 頁)

その後、大澤和夫氏が「有渡山塊の考古学的調査」(昭和10年)にとりまとめたなかに、上記①②に加えて次のことが記されている。

③ 原史時代の古墳として宮川、元宮川 — 圓墳? 宮川部落西方の田中にあり、石槨を地下にもつものらしく草地に下に空洞ある音あり。 (静岡縣郷土研究第5号139頁)

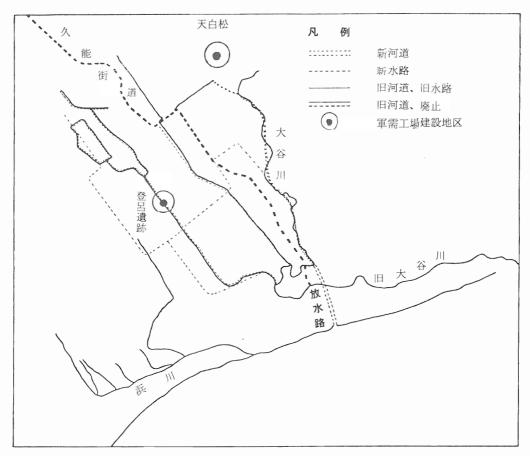
以上のように縄文・弥生・古墳時代の遺跡としてとりあげられている。

一方、神明原遺跡に関しては昭和29年に行なわれた農地改良工事によって、高松神社の南側付近で発見された土師器・須恵器・井戸枠・住居址の出土地として「静岡県遺跡地名表」(昭和36年)に登録されたのである。その時に発見された遺物は登呂考古館および明治大学所蔵品となっているが、そのうち土師器について望月董弘氏が「土師式土器集成」(昭和48年)に発表されている。(文献22)

次に、昭和17年に実施された大谷川改修工事について取り上げておきたい。

静岡市内に民間協力の軍需工場 2 ケ所の建設が計画され、登呂の地に航空機のプロペラを製造する住友金属(扶桑金属)工場を、天白松付近に航空機用エンジンをつくる三菱金属工場を建てることになった。工場予定地周辺部は滞水する低地であり、工場用地造成に先立って排水路として大谷川の改修工事が実施されたのである。それまでは大きく蛇行していた大谷川を直線的にするとともに、海岸付近で東流する河口部の砂丘を切って直接海へ放流させている。当時は戦時中であり建設重機もなく、労働力として朝鮮半島から強制的に連行されてきた人々があてられた。引き続き昭和18年には両工場の造成工事が行なわれたが、扶桑金属工場の建設にあたって南側の水田地帯および片山丘陵を採土地として造成工

事を開始したところ、水田地帯から多量の木片が発見された。木片の多くは工事現場の燃料として燃や



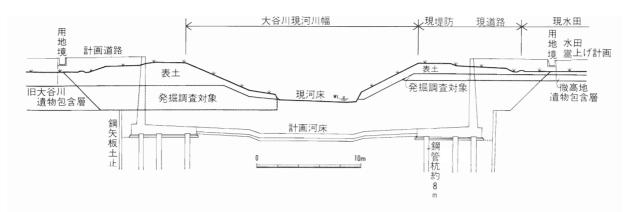
第1図 軍需工場建設に伴う大谷川改修図 --- 文献42

されてしまったが、弥生時代後期の土器とともに杭列=水田跡・各種の建築材料・木製容器・火鑽臼・ 弓・鍬・鋤などの農工具・機織具・ガラス玉・銅環などが発見され、戦後の発掘調査と合わせてわが国 の代表的農耕集落遺跡『登呂遺跡』として脚光をあびたのである。

一方、大谷川の改修工事によって大規模に破壊されたとみられる神明原・元宮川遺跡は、特に注目されることはなかったようであるが、弥生土器・土師器・須恵器・杭列・木製の櫂等が発見され、元宮川では川の中から完形の土器が出土するなど一部では話題にあがった遺跡であった。

第2節 調査に至る経過

静岡市の沖積平野の北東部低地の浅畑沼から、瀬名を経由し清水市の中心部を通り、清水港へ流れる 巴川の流域は水はけが悪く、昔から浸水被害が幾度となく発生するうえ、流域の市街化が進むといった 状況であり、静岡県(静岡土木事務所)では「巴川総合治水対策特定河川事業」として河道の改修・放 水路の建設・遊水地の整備をはじめとする事業をすすめている。その一つとして静岡市の南東部を流れ る大谷川を改修し、巴川へつなぎ、放水路としての機能をもたせる計画があり、下流部において、神明 原・元宮川遺跡が工事にかかることになり大谷川放水路建設工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査が昭 和55年度から実施されることとなった。



第2図 大谷川改修工事計画断面と埋蔵文化財発掘調査状況概念図

神明原・元宮川遺跡の範囲は、海岸より 330 mの地点から1500mの地点まで南北約 $1.2 \, km$ ・東西約 $0.5 \, km$ ・ 500,000 m^2 を越える広範囲なものとなっている。現在の大谷川はちょうど遺跡の中央部を南北に縦貫する位置にあたる。(第 3 図)

昭和55年度は右岸 330 m — 610 m の 1,800 m と、昭和56年度は右岸 610 m — 710 m の 1,300 m と をあわせて、右岸側で延長 380 m 区間を静岡市教育委員会が発掘調査した。これを高松地区とする。(市教委は地区名をつけていないが遺跡全体を取り扱う上で現在の地名にもとづく地区割を実施した。)

この調査では弥生時代後期・古墳時代後期~奈良・平安時代の住居跡・高床倉庫・溝・土坑・井戸等の遺構と各時代の遺物が発見されている。特に注目されるのは土製の人形(ひとがた)・異形土製品・手捏土器が平安時代の溝の中から発見され、祭祀を想定させる出土状況がみられることや、南側の旧大谷川流路から「古墳時代後期の須恵器・土師器が多量にしかも大半が完形品に近い形でまとまって出土している」という点である。集落とそれに伴う祭祀という性格を持つ遺跡として確認されたのであった。昭和57年度は調査は行われなかった。

昭和58年度は静岡埋蔵文化財調査研究所があたることとなり、左岸 660 m — 830 m (西大谷地区 1 区・2区) と 1,400 m 地点の橋脚部分(宮川地区 1 区・2 区)の 2 カ所 3,905 m を発掘することとなった。調査期間は昭和58年 4 月~昭和59年 3 月までとし、現地調査は 5 月から12月まで延 8 カ月間行われた。

第3節 調査の方法 (第6図・17図、凡例)

発掘調査に当たっては、大谷川河川改修用の座標系に合せ $10m \times 10m$ のグリッドを発掘区全体に設定した。各グリッド杭の名称は、南から $1 \cdot 2 \cdot 3 \cdots$ の数字、西から $A \cdot B \cdot C \cdots$ のアルファベットを付し、この組み合せで $A \cdot 1 \cdot B \cdot 2$ のように表記した。グリッドの名称は各グリッドの西南に位置する杭の名称を用いた(西南優位とした)。なお、南北列の数字は遺跡全体を通し一貫して付けられているが、東西列のアルファベットは発掘地区ごとに与えられている。

58年度の調査は西大谷地区で大谷川河口基準点より $665~m\sim830~m$ の左岸部、宮川地区で $1,377~m\sim1,407~m$ の両岸において実施した。そして調査工程上、西大谷地区で $665~m\sim760~m$ を西大谷 1 区、 $760~m\sim830~m$ を西大谷 2 区とした。これはグリッドの上では、34列~43列が 1 区、43列~50列が 2 区

ということになる。宮川地区では右岸部を1区、左岸部を2区とした。

当初、西大谷1区で表土除去を行った時点で大谷川の古い流路(旧大谷川と呼称)が確認されたが、この流路内に堆積した粘土・砂礫は古墳時代~中・近世に至る多量の遺物を包含していた。従って調査は従来予想されていた弥生時代~中・近世の集落ではなく、旧大谷川・平安~中世遺構面・弥生後期~古墳時代初頭の遺構面となった。このような状況は宮川地区でも見られ、宮川1区では奈良・平安時代の遺構面の調査となり、対岸の宮川2区では旧大谷川の調査となった。

資料の取り扱い等については、本調査研究「発掘調査資料の取り扱いについて」によっており、遺構 ・遺物の標記は凡例に示した通りである。

実測図の縮尺は平面図・断面図とも $^{1}/_{20}$ とし、詳細図が必要な場合には、 $^{1}/_{10}$ で作製した。写真撮影は、 6×7 判中型カメラを主に用い、メモ用に $35 \, mm$ カメラを使用した。

第4節 調 査 の 経 過

58年度大谷川の発掘調査は西大谷地区・宮川地区と呼称した2地点で実施された。

西大谷地区では発掘区中央部分より旧大谷川が検出された。その南側から中世と古墳時代初頭の2面の遺構面が検出され、北側からは中世の遺構面が検出された。又、旧大谷川内堆積砂礫・粘土中より古墳時代後期~奈良・平安時代に至る時期の多量の祭祀遺物を検出した。

宮川地区では大谷川右岸側を宮川1区と呼び左岸側を宮川2区と呼んだ。宮川1区では奈良・平安時代の遺構面を検出した。宮川2区では西大谷地区同様旧大谷川の右岸部を確認し、古墳時代後期の祭祀遺物を検出した。以下に発掘作業の経過を記す。なお、一部の整理作業に関しては発掘開始より現在まで継続して行っている。

調査経過

4月

器材運搬等発掘調査準備を行う。

5月9日~5月13日

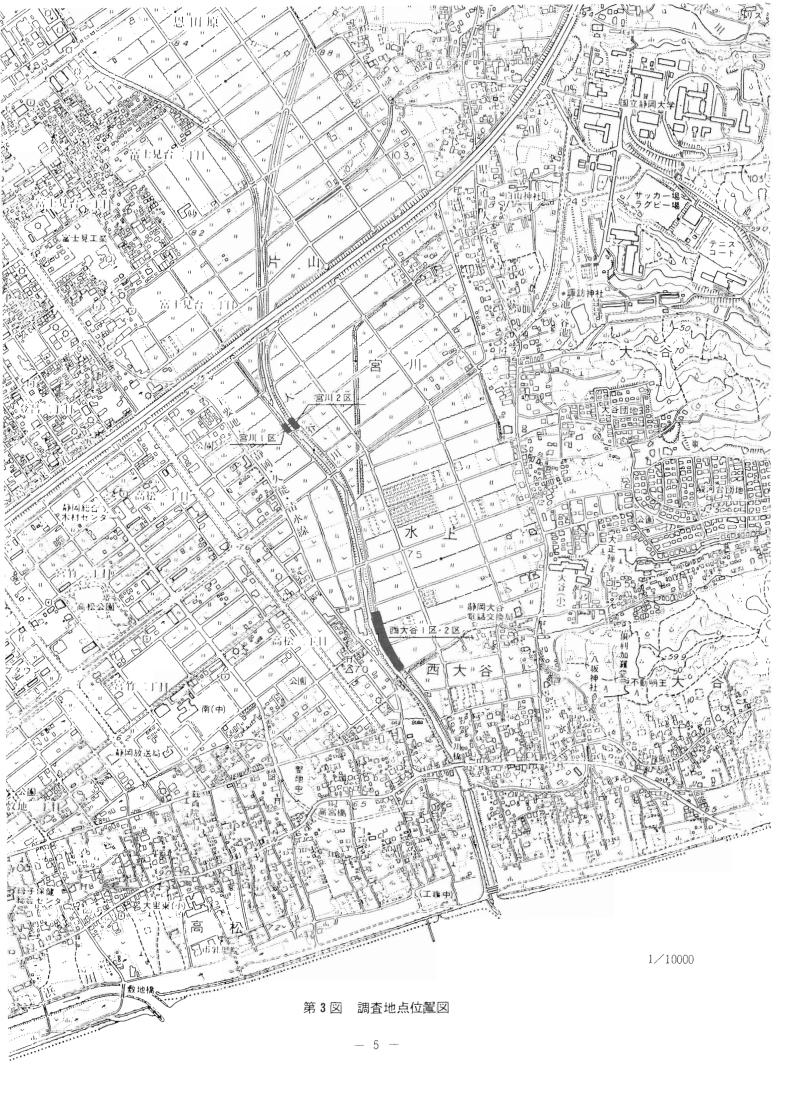
西大谷地区にて表土除去を行い、プレハブ・トイレ等の施設を設置する。宮川地区にて試掘を行い、 遺跡の範囲内であることを確認する。

5月16日~5月20日

西大谷地区にて中世遺構面の精査を開始するとともに、 層序を観察するために第1・第2トレンチを入れる。又、発掘区で旧大谷川の流路跡を確認する。 宮川地区では試掘調査を継続する。

5月23日~5月27日

第1トレンチにて標高4m(地表下1.5m)程度で砂礫層を検出する。この砂礫中より7世紀代の須恵器・土師器・牛形土製品が出土した。砂礫層は古墳時代の大谷川河底堆積物と考えられた。新たに第3・第4・第5トレンチを入れ土層を観察するとともに、古墳時代の大谷川流路の岸の検出作業を行う。前週に引き続き中世遺構面の精査を行う。宮川地区では試掘調査を継続する。



5月30日~6月3日

中世遺構面の精査を継続するとともに、旧大谷川の左岸を確認するために試掘坑をあける。その後、旧 大谷川河底堆積砂礫層(遺物包含層)まで重機による掘り下げを開始する。

6月6日~6月10日

前週に続き旧大谷川河底堆積砂礫層上面までの掘り下げを行う。40列杭以南の中世遺構の精査を終り 実測を開始する。

6月13日~6月17日

前週に続き旧大谷川河底堆積砂礫層上面までの掘り下げを行うとともにF39・40グリッドにて砂礫層の精査を行う。これにより砂礫中より古墳時代~奈良・平安時代の遺物を多量に検出する。

6月20日~6月25日

F40・41グリッドの砂礫層の精査を行う。G38グリッドの古墳時代初頭の遺構の精査を開始する。

6月27日~7月8日

E 41・42、F 41・42・43、G 39・40 グリッドで砂礫層の精査を行う。G 37・38 グリッドで古墳時代初頭の土器集中部分の精査を行う。

7月11日~7月22日

D42・43、E41・42・43、F41・42・43グリッドで砂礫層の精査を行う。G37・38グリッドの古墳時 代初頭の土器集中部分の実測を行う。

7月25日~7月29日

39列杭から43列杭までの旧大谷川内砂礫層の精査を終了する。 I 34・35・36、 J 34・35・36 がリッドで古墳時代初頭の遺構面への掘り下げを開始し併行して精査を行う。

8月1日~8月12日

I 34・35・36、J 34・35グリッドで古墳時代遺構面の精査を行い溝状遺構・土坑・焼土等を検出する。 旧大谷川内砂礫層精査終了部分で基盤層であるシルト層上面を 1 m 方眼で標高測定する。又、グリッド の境に残しておいた土層帯を写真撮影・実測後除去する。

8月16日~8月26日

H37、 I34・35・36・37、 J34・35グリッドで古墳時代遺構面の精査を行う。 D44・E44・F44グリッドで砂礫層の掘り下げを行う。

G38・39、H37・38グリッドの旧大谷川部分で砂礫層上面まで重機により掘り下げを行う。同時に大谷川堤防斜面部分でも旧大谷川内堆積砂礫層まで掘り下げる。

8月29日~9月2日

H37、I34・35・36・37、J34・35グリッドにて古墳時代遺構面の精査を行う。G38・39、H37・38グリッドで旧大谷川河底堆積砂礫層の精査を行う。

9月5日~9月17日

宮川1区で安全対策を行った後、表土除去を行い奈良・平安時代遺構面精査に入る。溝・土坑・井戸 等の遺構を検出する。 西大谷地区では古墳時代遺構面の精査を継続するとともに、G38・39、H37・38グリッドで砂礫層の 精査を行い、その後、写真撮影を行う。

9月19日~9月29日

宮川1区で遺構面の精査を継続する。

西大谷地区ではD45グリッドで砂礫層の精査を行い、併行して古墳時代遺構の写真撮影・実測を行う。 10月3日~10月14日

西大谷 2 区では D 45 ・ E 45 グリッドで旧大谷川内砂礫層の精査を行う。 E 列の土層帯断面を写真撮影・実測する。

宮川2区では全景写真の撮影と実測を行い発掘調査を終了する。

10月17日~10月28日

西大谷地区では $E44 \sim E46$ グリッドにかけての土層帯をはずし全景撮影を行う。その後、標高計測を行う。

宮川2区で表土除去・安全対策を行い発掘を開始する。

10月31日~11月12日

西大谷地区で $C \cdot D \cdot E 46$ グリッドから $C \cdot D \cdot E 49$ グリッドにかけ重機による表土除去を行った後、遺孀検出及び旧大谷川右阜検出作業を行う。

宮川2区では旧大谷川右岸部を検出し、中世杭列と古墳時代の遺物の検出作業を行い、併行して実測を行う。

11月14日~11月30日

西大谷地区では、C・D・E 46~49グリッドの遺構検出作業と、D 46・E 46付近の旧大谷川右岸部の 古墳時代遺物検出作業を行う。

宮川2区では実測と併行して遺物の取り上げを行い、全景撮影後発掘を完了する。

12月1日~12月10日

西大谷地区では $C \cdot D \cdot E$ 46~47 グリッドで遺構精査と実測を併行して行う。D 46 $\cdot E$ 46 \cdot 47 グリッドでは旧大谷川右岸の調査を行う。又、発掘区を北方へ $10\,m$ 拡大する。

59年度以降の調査予定地の試掘調査に入る。

12月12日~12月24日

西大谷地区でC・D・E46~49列の遺構の実測・写真撮影を行う。旧大谷川部分にかかる大谷川堤防斜面を除去し、砂礫層の精査を行う。

試掘調査を継続して行い、24日現地調査を終了する。

第5節 土 層

(1) 西大谷地区の土層は西側より張り出す微高地部分、微高地から旧大谷川への傾斜面の部分、旧大谷川流路内でそれぞれ異なる。(第4図一土層断面概念図)

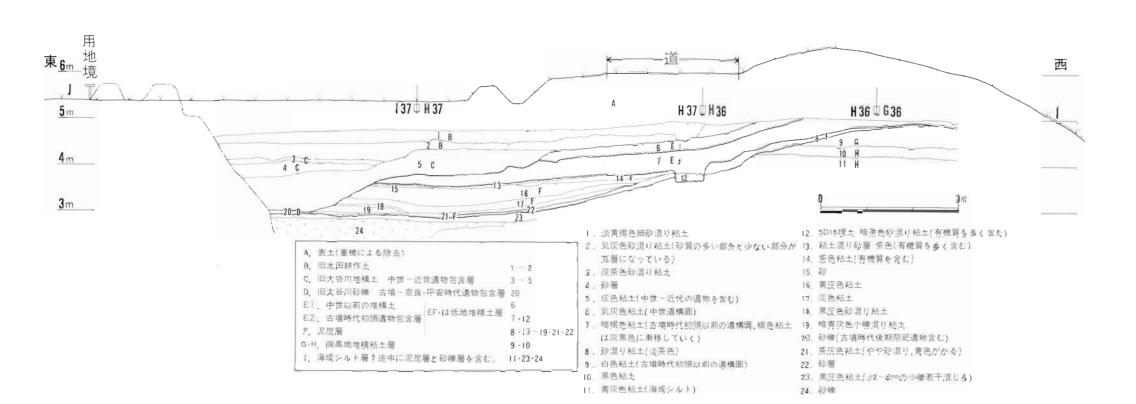
この地域の基本層序がみられるのは微高地部分である。第 $4-1 \cdot 2$ 図の土層で $G \cdot H \cdot I$ の層序が

これである。G層が古墳時代~中世の遺構面となっており、この上にC層の中世の遺物包含層と一部に 古墳時代の遺物包含層 E 2 が検出された。C層の上には水田耕作土や表土・盛土がのっている。

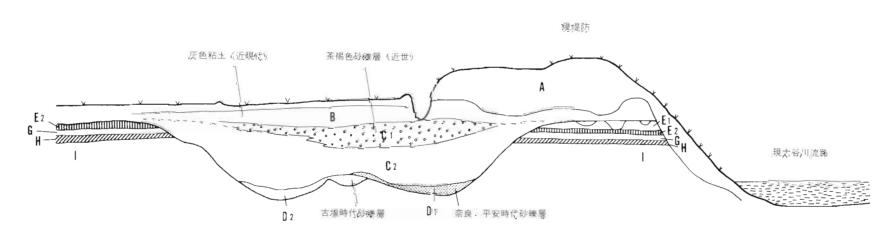
この微高地の末端から旧大谷川流路への斜面に堆積しているのが $E1 \cdot E2$ 層である。E1層は中世の遺構面でありG層に似るが若干砂質が強い。この下のE2層は古墳時代の遺構面となっている。

旧大谷川は、基本的には第4~2回に示すとおり、微高地部分の基本層序を切って流れているが、第4~1回に見られるように中世の流路CがE層を切っている部分もある。流路内の堆積は河床に0.2 m~2.5 m(平均1 m程度)の砂礫が堆積し、この中に古墳時代~奈良・平安時代の遺物を多量に包含(D層)している。この砂礫層を細分することはできないが、一部で古墳時代の堆積と奈良時代以降の堆積を分離することができる。この砂礫層の上には中世の堆積の灰色粘土(C2層)が1 m以上堆積し、さらにその上に、近世以降の堆積の赤褐色砂礫C1層がある。これらの状況から、中世には河口部の閉塞、あるいは、海水面の上昇等により流れが悪くなり急速に堆積したものと推定される。又、近世以降の堆積の赤褐色砂礫は有度山の礫層を形成する礫に類似しており、近世以降、有度山の伐採が進み土砂の流失は激しくなり、これが旧大谷川に堆積した可能性がある。日本平の開析谷から流れる川は流出する砂礫により天井川となっている。

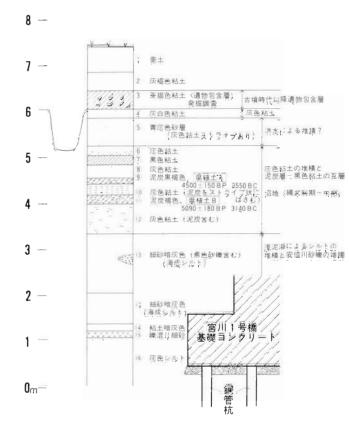
- (2) 宮川1区での層序は西大谷地区の微高地のそれとは若干異なり、第4-3図のように①表土の下に ③茶灰色砂混り粘土の遺物包含層があり、その下が、④の黄灰色又は灰白色の砂質土からなる地山遺 構面となる。この③層の下には西大谷地区で観察されたような黒色粘土の上下に灰色粘土があり、さら に下層には腐植土A・Bとした泥炭層がみられ、その下層の海成シルトに移行する。このように、宮川 1区は西大谷地区より層序が多い傾向がみられる。
- (3) 宮川2区では旧大谷川流路が黒褐色の粘土を切っている状態が観察されたが、この黒褐色の粘土と 宮川1区の土層との関連は明確ではない。



第4-1図 西大谷2区I-J土層断面図



第4-2図 西大谷地区旧大谷川土層断面概念図



第4-3図 宮川1区標準土層柱状図(微高地)

第 II 章 位 置 と 環 境

第1節 地 理 的 環 境

静岡平野は北を竜爪山、南を駿河湾、東を有度山、西を花沢山・高草山の山塊により囲まれた範囲に、主として安倍川・藁科川の堆積作用により形成されたものである。この平野の地形的要素は①安倍川扇状地②有度山麓に形成された扇状地③巴川低地④登呂低地が上げられ、その中に谷津山、八幡山の孤立丘がある。以下にこれらの諸地域の形成過程一静岡平野の形成過程一を概観してみたい。

(1) 古静岡湾の時期(縄文時代早期)

縄文時代早期(BC約6000年)、海水面上昇による相対的地盤沈下により海水が巴川北側の山麓まで浸水し「古静岡湾」とも言うべき湾が形成された。有度山・谷津山・八幡山は湾内の島であった。

(2) 古静岡湾の潟湖化 (縄文時代後期)

縄文時代後期(BC 3000年頃)、安倍川の堆積作用により古静岡湾は潟湖化する。

安倍川は静岡・山梨県境を水源地として南アルプス前衛の山間部を南流する。その流域は第三紀層の瀬戸川層群で構成されているが、これは砂岩・頁岩を主としており、岩石の破砕作用が著しい。そのため山地で破壊現象が諸々に発生し多量の土砂礫が下流に運ばれてきた。又、有度山の存在が、海流によりこの砂礫が運び去られることを防ぎ、安倍川河口右岸から有度山南西麓にかけて浜堤と砂丘が発達した。この浜堤と砂丘が古静岡湾の南側を封鎖し潟湖化させた。

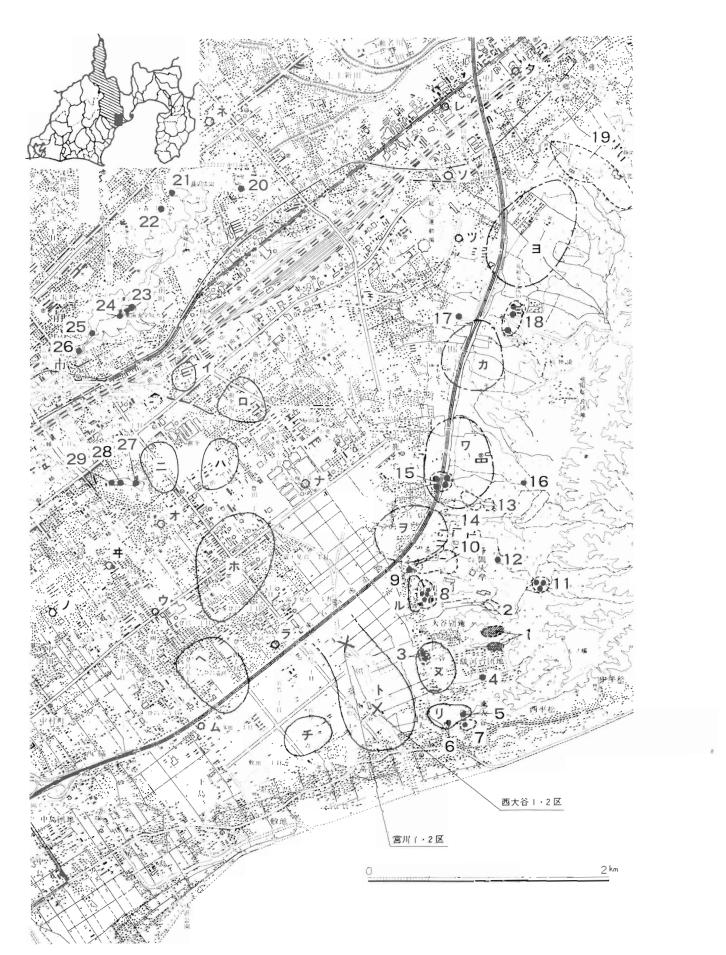
(3) 安倍川扇状地の形成と、巴川低地と登呂低地の分離

(2)で形成された潟湖の中に安倍川の扇状地が発達していく。一般に扇状地は山麓より扇状に形成されるが、ここでは賎機山山塊が南方へ突出していること、海岸に砂州が発達すること、東側に低地が広がること、藁科川が西方より流れ込むこと等から下流方向(南方)へは形成されず、東方へと発達した。更に、この扇状地末端からヒトデ状に自然堤防が延びている。この堆積作用により潟湖は縮小し、東西方向に発達した安倍川扇状地・自然堤防により、北方に麻機沼、南方に富士見沼を残し巴川低地と登呂低地に分離された。

およそ、以上のような過程を経て静岡平野は形成されたと考えられる。それでは次に今回発掘調査された神明原 • 元宮川遺跡が位置する大谷川流域についてさらに詳しくみてみることにする。

大谷川流域は静岡市街地の東南にあり、先述した登呂低地に含まれ、南は駿河湾、東に有度山の斜面を望む位置にある。大谷川はこの有度山麓及び周辺市街地を集水系とする極く短かい河川である。又、河口に至るまでの標高差が極く小さく、以前はもっとも低い部分を縫うように大きく蛇行して流れていたが、現在は1943年の改修により直線的に流れている。この大谷川流域は地形的要素により①大谷川沖積低地②有度山西南麓地域③海浜部地域の3つに分けることができる。

①の大谷川沖積低地は標高 6 m 程度の低湿な沖積地が広がり、局所的に、かつての沼沢地跡と考えら



第5図 大谷川周辺遺跡分布図(伊庄より)

第2表 周辺遺跡地名表

番 号	古 墳(群)名	時	期	墳 丘	内	部	主	体
1	伊庄谷横穴群	後	(4)		横穴			
2	片山横穴群	後	期		横穴			
3	井庄段古墳群	後	期		横穴式石室			
4	日向山古墳	後	期		構穴式石室			
5	不動山古墳			円墳				
6	不動堂古墳	後	期	前方後円墳	横穴式石室			
7	東大谷古墳群	後	期	円墳	横穴式石室			
8	宮川古墳群	後	期	円•方•帆立貝形	横穴式石室、	組合式箱	那石棺。	マ 形石棺
9	山神古墳			円墳				
10	静大構内古墳群	後	期		横穴式石室、	組合式箱	形石棺	
11	奥大谷古墳群	後	期		横穴式石室			
12	さそく段古墳	後	期					
13	掘ノ内山古墳 群	後	期	円 墳	横穴式石室			
14	小鹿古墳群	後	期		横穴式石室、	組合式箱	形石棺	
15	掘ノ内古墳群	後	期	円 墳	横穴式石室			
16	掘ノ内山奥古墳群	後	期	円 墳	横穴式石室			
17	池田丸山古墳			円墳•葺石				
18	池田山古墳群	後	期		横穴式石室			
19	谷田古墳群	後	期	円 墳	横穴式石室			
20	茶 臼 山 古 墳	後	期	円 墳				
21	沓谷古墳(仮称)				横穴式石室			
22	并上邸古墳	後	胡		横穴式石室			
23	柚木山神古墳	前	.UI	前方後円墳	竪穴式石室			
24	八津山古墳			前方後円墳				
25	清水山古墳			円墳				
26	倩水 公 園 古 墳	後	期	円 墳	横穴式石室、	組合式箱	形石棺	
27	八幡山山頂古墳			円墳				
28	八幡山古墳	後	期	円墳	横穴式石室、	組合式箱	形石棺	
29	八幡神社古墳	後	期	円墳	横穴式石室			

記号	遺跡名	時期	遺	跡
1	曲金B遺跡	古墳~奈良	井 戸 跡	
	曲金A遺跡	弥生~古墳		
ハ	豊 田 遺 跡	弥生(後)~古墳(初)	水田跡	
=	小 黒 遺 跡	弥生(後)~古墳(初)	住居跡、水田跡	
ホ	有 東 遺 跡	弥生(中)~古墳	住居跡、水田跡	
_ ^	登 呂 遺 跡	弥生(後)•古墳	集落跡、水田跡など	
ⓑ	神明原•元宮川遺跡	弥生(後)~中・近世	集落跡・祭祀跡	
チ	汐 入 遺 跡	弥生(後)~古墳	集落跡など	
IJ	上 ノ 山 遺 跡	縄文・弥生 後) ~ 古墳	集落跡、墳墓群など	
ヌ	井 庄 段 遺 跡	弥 生		
ル	宮川 遺:跡	縄文・弥生(後)~古墳(初)	集落跡、墳墓など	
ヲ	片山丘陵遺跡群※	先土器・縄文・弥生・奈良~平5	安 片山廃寺跡など	
ワ	小鹿丘陵遺跡群※	先土器•縄文•弥生•古墳		
カ	池田丘陵遺跡群※	縄 文		
3	国吉田丘陵遺跡群※	弥 生		
タ	大和製缶遺跡	弥生•古墳		
. レ	吉 ノ 口 坪 遺 跡	弥 生		
ソ	道下遺跡	弥 生		
ッ	桃原寺前遺跡	弥生		
ネ	千 代 田 遺 跡	弥 生		
ナ	競 輪 場 東 遺 跡	奈良•平安		
ラ	天神 森遺跡	古 墳		
4	水洗遺跡	古 墳		
ゥ	鷹 ノ 道 遺 跡	弥生•古墳		
中	女子 商 高 校 遺 跡	弥 生		
1	ケイセイ遺跡	古墳		
オ	有明 町遺跡	弥生		

※現在のところ遺跡としての範囲、またその実体を把握できかねるが、広くまた数ヶ所にわたる散布地が一つ一つの丘陵を単位として遺跡を形成していると考えられる。仮称である。 (文献37より)

られる標高 5m 程度の地点が分布している。この地域は以前は水田地帯であったが、最近は盛土等により畑地化し、ハウス栽培がさかんに行われ、又、宅地造成が進み、急速に市街地化している。

②の有度山西南麓地域は丘陵性の地形を呈す有度山塊の西南側に標高90m程の台地状緩傾斜面と、そこから大谷川に流れこむ伊庄沢川・大正寺沢川など短小な河川水系によりつくり出された小規模な押出 状扇状地が展開している。このうち台地状緩傾斜面は茶畑、みかん畑として利用されている。又、標高 20m程の山麓沿いにむかしから人口が集中していた。この地域もやはり、最近になり宅地造成が急速に 進み、山麓から中腹にかけての景観は大きく変わりつつある。

③の海浜部地域は、波浪や、季節風の営力により形成された砂堤・砂丘の広がる地域にあたる。畑地として利用されているが、古くからの久能街道が通りそれに沿って村落が営まれている。

以上が大谷川流域の自然的環境のおおよそである。次に歴史的環境について記述する。

第2節 歷 史 的 環 境

有度山麓の台地性丘陵上には、縄文時代の遺跡や数多くの古墳が分布しており、その前方に発展している扇状地では弥生時代以降の遺跡が多くみられる。

縄文時代の遺跡は小鹿丘陵・片山丘陵・池田丘陵等、広い範囲に分布しており、現在までに、神明原・元宮川遺跡のすぐ東側に位置する宮川遺跡と上ノ山遺跡が発掘調査されている。

弥生時代にはいると、国鉄東海道線の南方に広がる低湿地や、台地性丘陵上に、多数の水田・集落遺跡がみられるようになる。低湿地では、国鉄静岡駅より南方約2㎞の地点の弥生時代後期を主とする登呂遺跡をはじめとして、その北方には弥生中期を中心とする有東遺跡や弥生後期の豊田遺跡・小黒遺跡が、南方には弥生後期~古墳時代後期の集落跡である汐入遺跡がみられる。台地性丘陵では前述した宮川遺跡・上ノ山遺跡において弥生後期の住居跡等が検出されている。

古墳時代には、平地上に集落跡がみられる一方、丘陵上に古墳が群在している。先ず古墳時代初頭に宮川遺跡・上ノ山遺跡においては円形周溝墓・方形周溝墓がみられる。前期の古墳としては、静岡駅より北側にある全長110 mの柚木山神古墳が、この地域における最古かつ最大の前方後円墳としてあげられる。有度山麓では北側に、瓢箪塚古墳がみられる。後期になると、有度山麓西側の台地性丘陵上には、多数の古墳が作られている。古墳は南向き、もしくは西向き斜面に、多くは群をなして存在している。北からみていくと、谷田古墳群・池田山古墳群・石棺が5個安置されていた小鹿山ノ神古墳・静大構内古墳群・諏訪神社古墳や大規模な横穴式石室を持つアサオサン古墳や家形石棺と組合式箱形石棺の出土した丸山古墳を含む宮川古墳群・30基以上の横穴のまとまりが南北に2支群みられる伊庄谷横穴群・井庄段古墳群等があげられる。これらの古墳の立地する幾つかの台地性丘陵西側のゆるやかなスロープ上には、比較的規模・内容共に有力な古墳がみられる一方、小河川に面した南側急斜面や各地塊基部には、小規模の古墳が分布している。

歴史時代の遺跡として、駿河国分寺の候補としてあがっている「片山廃寺跡」が、有度山麓の東名高速 道路がかかる地点にあり、墨書土器「客人」を出土した中田ケイセイ遺跡が、登呂遺跡の西方の沖積 平野に存在する。また曲金付近の条理地割についてもその広がりが、南西に及んでいるらしい。

第Ⅲ章 遺跡の概要

58年度の調査は西大谷1・2区、宮川1・2区で実施された。

西大谷 1・2 区では南端の34列より39列にかけ古墳時代初頭の遺構面と中世の遺構面の2面が確認された。38列~47列までは旧大谷川の流路が検出され、護岸状遺構の他、古墳時代後期~中世に至る多量の祭祀関係遺物が堆積砂礫中より出土した。46列~50列にかけては平安末~中世の遺構面1面が確認された。(第8図)

宮川1・2区では現大谷川右岸に当る1区で奈良・平安~中世にかけての遺構を確認し、左岸側の宮川2区は旧大谷川右岸傾斜面が検出され、ここに堆積した粘土・砂礫中より古墳時代後期の祭祀遺物が多量に出土した。(第18図)

第1節 西 大 谷 地 区

A. 中世遺構 (第9·10図)

中世の遺構は旧大谷川流路部分を挟んで34列~39列と46列~50列で確認された。いずれも旧大谷川に対して右岸側となる。

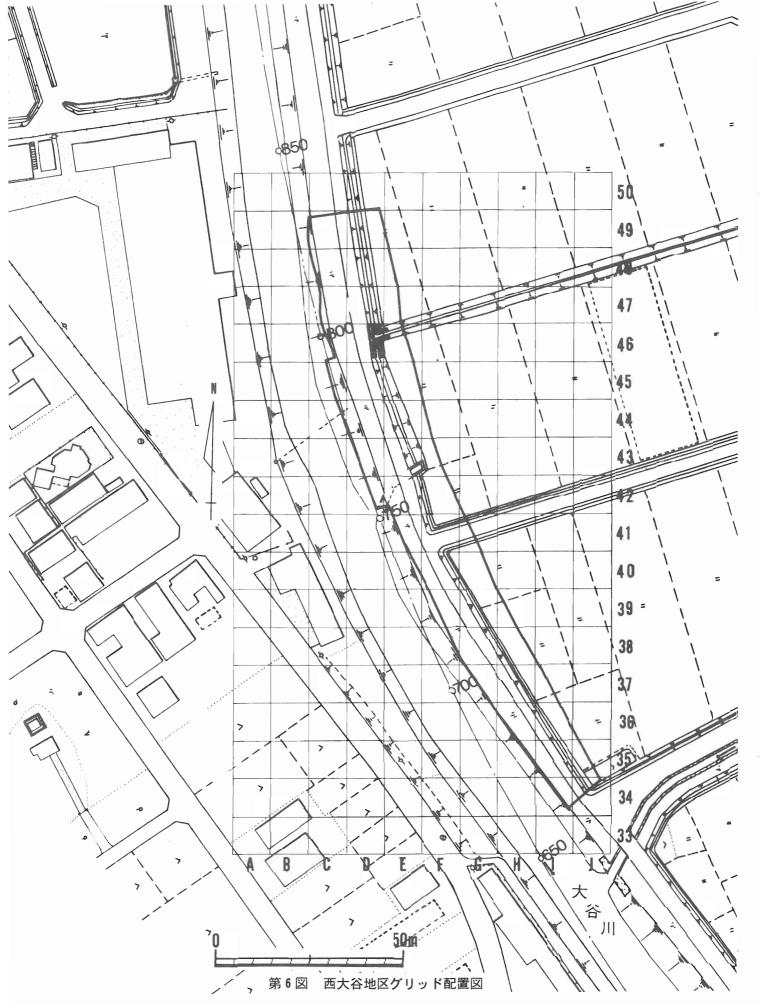
34列~39列で検出された遺構は溝状遺構 8・土坑状遺構 2・護岸状遺構 1 である。これらの遺構は西方より張り出してくる微高地上と、そこから旧大谷川へと漸移する緩斜面部分に営まれている。

46列~50列で検出された遺構は溝状遺構 9・小穴15・掘立柱建物遺構 1・柵状遺構 1・粘土採掘跡 3 であった。これらの遺構のうち S D 29・ S D 44・ S D 37は遺構と言うよりも自然流路的な様相が強く見られた。

34列~39列 (西大谷1区)

溝状遺構 (第9図)

- **S D 2** 長さ15*m*程、確認面で幅 $1.22\sim0.42m$ 、底面で幅 $0.8\sim0.26m$ 、深さ $0.04\sim0.29m$ である。西側より張り出してくる微高地より旧大谷川へと流れ込んで行く。末端部では二又に分かれる。
- **SD5** 長さ 23.3 m、確認面で幅 2.28~ 1.04 m、底面で幅 1.04~ 0.39 m、深さ 0.39~ 0.1 m である。や や西に偏るが南北方向に延び、南端部は発掘区外へと続く。流れの方向は南から北であり旧大谷川へと 流れ込む。覆土上面には若干の礫が混入しており、この溝が機能を失ってから一定期間経過後、礫が投入されたかと考えられる。
- **SD6** 長さ $20.8 \, m$ 、確認面の幅 $0.8 \sim 0.36 \, m$ 、底面で幅 $0.68 \sim 0.21 \, m$ 、深さ $0.04 \sim 0.29 \, m$ である。 SD 5 とほぼ平行して南北方向へ延び、流れの方向は南から北である。南端部は SD13により切られており北端部は旧大谷川へと流れ込む。
- **S D 9** 長さ 8.6 m、確認面での幅 $1.3\sim0.8\,m$ 、底面の幅 $0.88\sim0.49\,m$ 、深さ $0.3\sim0.1$ である。 S D 5 とほぼ平行に南北方向に延び流れの方向は南から北である。南端部は発掘区外へ続き、北端部は深さを



減じてSD12へと流れ込む。

- **S D11** 長さ 4.2m、確認面での幅 $0.38 \sim 0.24m$ 、底面で幅 0.3m程度、深さ $0.04 \sim 0.29m$ である。くの字形に屈曲しており両端はどこにもつながらずに途絶えてしまう。
- **S D12** 長さ9.3 m、確認面での幅 $3.35\sim2.6$ m、底面で幅 $2.4\sim1.91$ m、深さ $0.28\sim0.15$ m であり、幅に比較して深さが著しく浅い。やや北に偏り東西方向へ延び、西端は発掘区内で完結しているが、東側は発掘区外へと続いている。
- **S D13** 確認面で幅 $2.3 \sim 2.1 \, m$ 、底面で幅 $1.8 \, m$ 、深さ $0.33 \sim 0.15 \, m$ である。発掘区の南西端で検出されたため、確認された部分はごく一部にすぎないが、確認部分が屈曲地点となり、これより北東方向及び南東方向へと続いていくものと考えられる。
- **S D22** 確認面で幅 $1.0 \sim 0.6 m$ 、底面は幅 $0.7 \sim 0.3 m$ 、深さ $0.2 \sim 0.07 m$ 、また確認できた長さは10 mとなっている。南東から北西方向に旧大谷川に沿って伸び、北西部で旧大谷川に開口している。流れの方向は不明である。

土坑状遺構 (第9図)

土坑状遺構はSP8、SP10の2基が確認された。

- **SP8** 確認面で長径 2.3m、短径 1.38m、底面で長径 1.4m、短径 0.92m、深さ $0.36\sim0.11m$ の楕円形の掘り方を持つ土坑である。
- **SP10** 確認面で長径 1.04m、短径 0.86m、底面の径 0.75m、深さ $0.34 \sim 0.38m$ である。

46列~50列 (西大谷2区)

溝状遺構 (第10図)

- **S D26** 長さ 12.3m、確認面で幅 $1.0\sim0.3m$ 、底面で幅 $0.82\sim0.15m$ 、深さ $0.6\sim0.17m$ である。やや北に偏るが東西方向へと延び、西端は発掘区外へと続く。東端は現代の水路により破壊されているが S D 28へと流れ込むと考えられる。
- **S D28** 西側の岸を現代の水路により完全に破壊されているが、確認した長さは29.0m、上端の幅は推定3.5m程であり底面で幅2.7~2.3m、深さは0.55~0.18mである。やや西に偏るがほぼ南北方向へのび、流れの方向は北から南へである。北端部は発掘区外へと続き、南端部は旧大谷川へと注ぐ。掘り方はしっかりしており、断面は逆台形を呈し、壁面は底面に対して110°程の角度で立ち上る。底面の比高差は大きく、49列と交わるあたりで段差が付く。

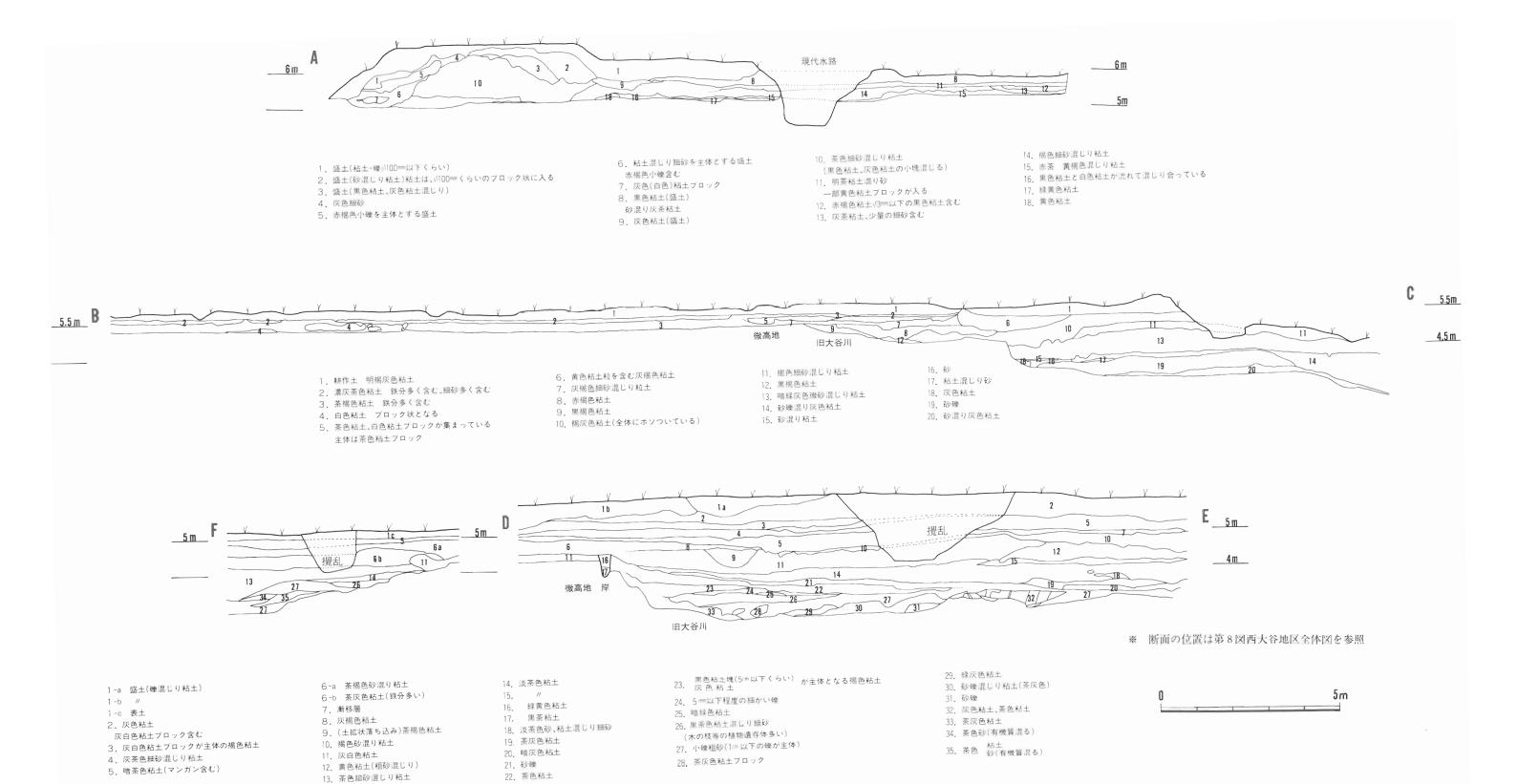
なお、この溝の覆土中より、ほぼ底面に接した状態で12世紀頃の山茶埦が出土していることから、溝が機能したのは12世紀頃と考えられる。(第12図中)

S D29 長さ20m、確認面で幅 $4\sim3.5\,m$ 、底面で幅 $3\,m$ 程度、深さ $0.35\sim0.1\,m$ 程である。北より 30° 程西に振れた方向にのびるが、北端部の一部は S D45により切られ、一部は現在の大谷川により破壊されている。流れの方向は北から南であり、旧大谷川に注ぐ。この溝を観察すると、①底面の凹凸が著しい、②岸の屈曲が著しい、③旧大谷川へ流れ込む部分で著しく扇形に広がる、④人為により掘り込まれたと考えられる部分は③の西側の部分にのみ残存している、ということが確認できる。上記の観察からもこの溝は自然流路である可能性が強い。 (第12図左)

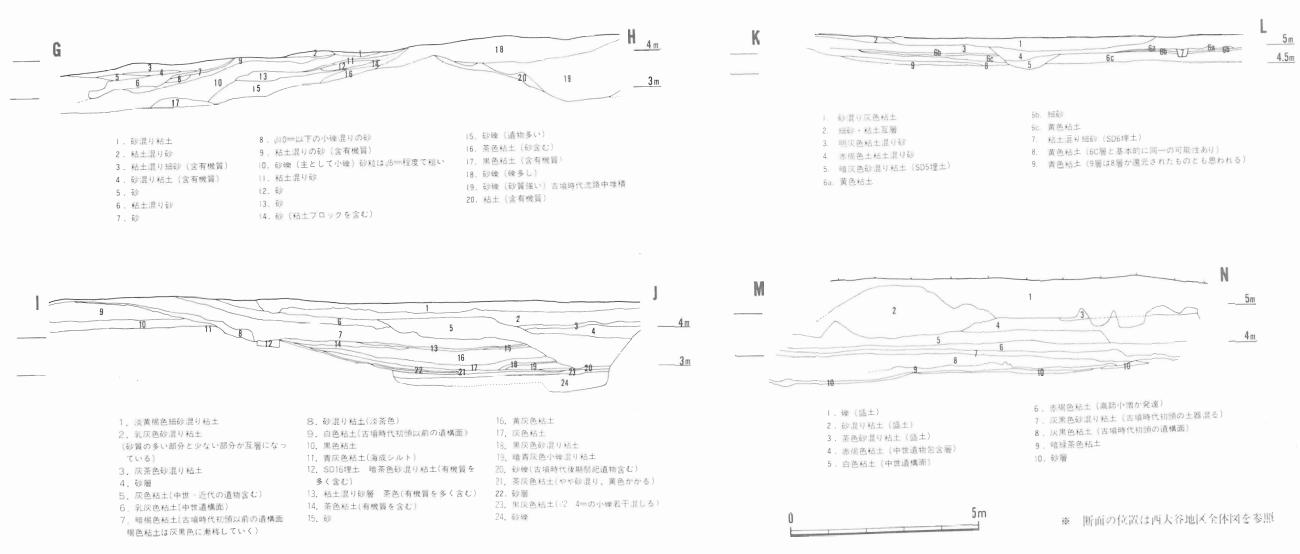
- **S D30** 長さ 8.9 m、確認面で幅 $0.86 \sim 0.3 m$ 、底面で幅 $0.57 \sim 0.1 m$ 、深さ $0.34 \sim 0.16 m$ であり、断面形は逆台形となる。この溝は S D28の底に 0.15 m 程、土が堆積した時点で掘り込まれている。従って時期は S D28と併行すると考えられるが、掘り込んだ目的等は不明である。 (第12図中)
- **S D33** 発掘区北端部にごく一部を検出したにすぎないが、確認した長さ 4.0 m、確認面で幅 $1.7 \sim 0.7$ m、底面で幅 $1.4 \sim 0.26 m$ 、深さ $0.19 \sim 0.12 m$ である。
- **SD37** 迷路のような溝であり 3 ケ所で S D29に開口している。確認面で幅 0.5 m 程、底面で幅 0.3 m 程、深さは 0.3 m 程である。この溝の覆土はトンネルのような部分に上の土が陥没したような状態となっている。あるいは小形動物の巣穴かとも考えられる。(第12図左)
- **SD44** 長さ6.1 m、確認面で幅0.88~0.3⋅m、底面で幅0.65~0.1 m、深さ0.11 m程である。
- **SD45** 発掘区の西側にごく一部を確認したにすぎなく、大部分は現大谷川により破壊されてしまっている。確認した長さ 4.6m、上端幅 0.5m、底面で幅 $0.4\sim0.3m$ である。
- **S D47** 長さ 5.7 m、確認面で幅 $0.9 \sim 0.2 m$ 、底面で幅 $0.74 \sim 0.1 m$ 、深さ $0.17 \sim 0.04 m$ である。ごく 短かく、浅い溝で S D29へと流れ込む自然の流路と考えられる。

土坑状遺構 (小穴・柱穴含む) (第10図)

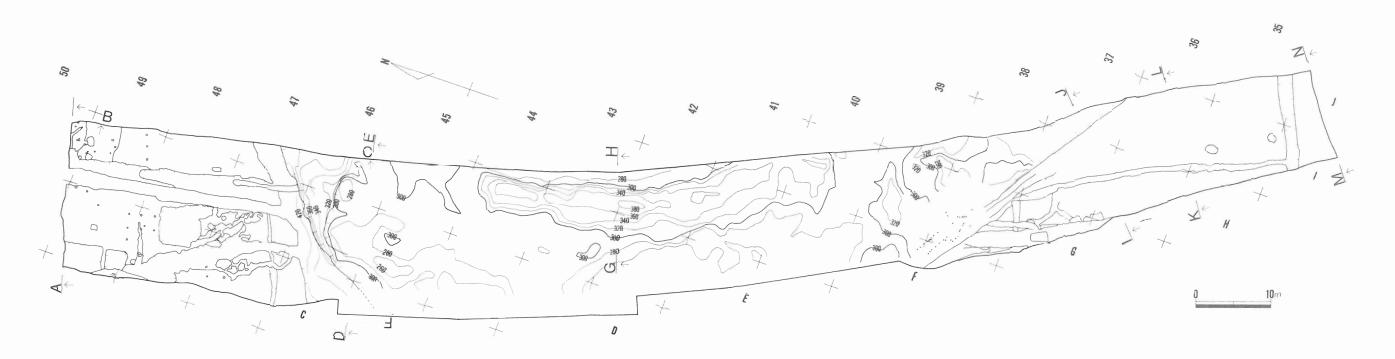
- SP27 確認面で長径 0.62 m、短径 0.54 m、底面で長径 0.39 m、短径 0.29 m、深さ 0.19 m の小穴である。
- **S P31** 段状の掘り方を持つ土坑である。確認面で $1.3\,m \times 0.8\,m$ の方形であり、 $0.5\,m$ 程下った高さで段がつけられ、そこから上面で径 $0.6 \sim 0.5\,m$ 、底面で長径 $0.4\,m$ 、短径 $0.3\,m$ 、深さ $0.4\,m$ 程度の掘り込みがなされている。
- **SP32** 西側一部分をSD28により破壊されている。確認面で $0.9\,m\times0.8\,m$ 、底面で $0.8\,m\times0.7\,m$ 程度、深さ $0.27\,m$ である。
- **S P38** 段状の掘り方を持つ土坑である。確認面で $0.84\,m \times 0.68\,m$ 、底面 $0.6\,m \times 0.58\,m$ 、深さ $0.26\,m$ の土坑のほぼ中央に上面長径 $0.63\,m$ 、短径 $0.4\,m$ 、深さ $0.25\,m$ の小穴が掘り込まれている。掘り方より見れば柱穴と考えられる。
- SP40 確認面で長径 0.25 m、短径 0.2 m、底面で長径 18 m、短径 0.14 m、深さ0.04 mの小穴である。
- **S P41** 確認面で長径 0.4m、短径 0.28m、底面で長径 0.18m、短径 0.14m の楕円形をしたごく浅い小穴である。
- **SP42** 確認面で径 0.2 m、深さ 0.14 m の放物線状の断面を持つ小穴である。
- **S P43** 確認面で $1.16m \times 0.54m$ 、底面で $0.8m \times 0.44m$ 、深さ 0.04mの浅い方形の窪みの中に上面で長径 0.52m、短径 0.45m、底面で径 0.2m程、深さ 0.16mの小穴が掘られている。
- **SP46** 確認面で径 0.3 m 程、底面で長径 0.2 m、短径 0.13 m、深さ 0.08 m の上面円形、底面楕円形の小穴である。
- **S P48** 確認面で長径 0.25 m、短径 0.2 m、底面で径 0.14 m、深さ 0.22 m の小穴である。
- S P49 確認面で径 0.2 m、底面で径 0.14 m、深さ 0.12 m の小穴である。
- S P50 確認面で長径 0.27m、短径 0.22m、底面で長径 0.17m、短径 0.12m、深さ 0.06mの小穴である。
- S P51 確認面で径 0.3 m、底面で径 0.25 m、深さ 0.2 m の小穴である。



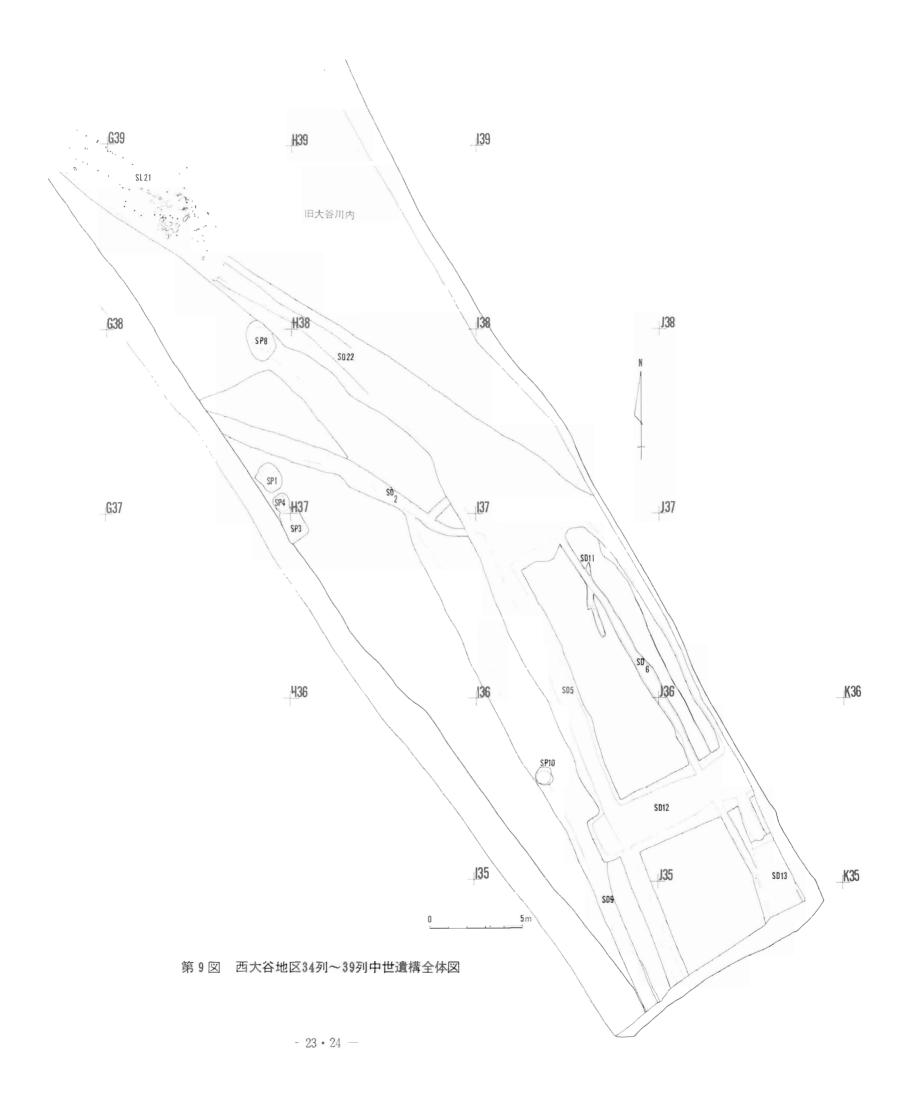
第7-1図 西大谷地区断面図

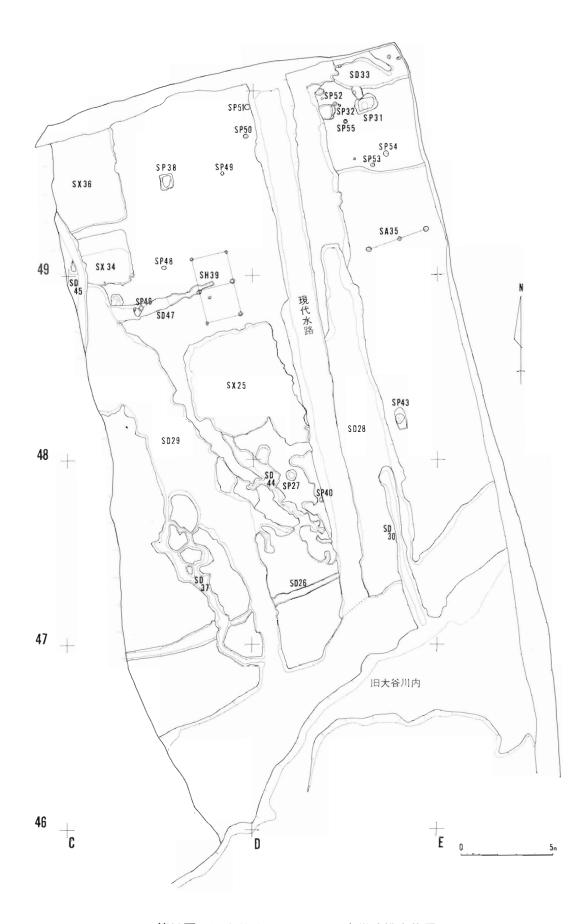


第7一2図 西大谷地区断面図

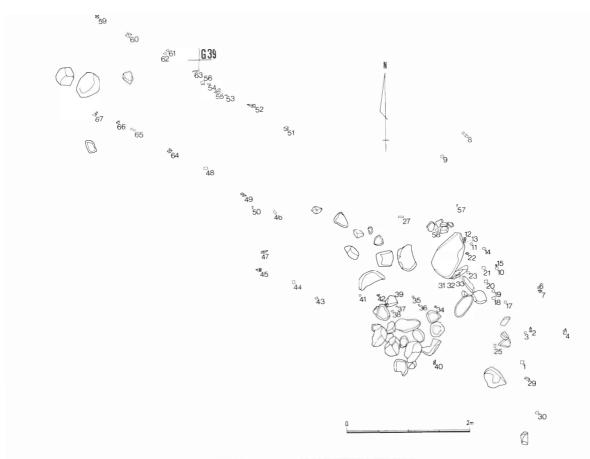


第8図 西大谷地区全体図





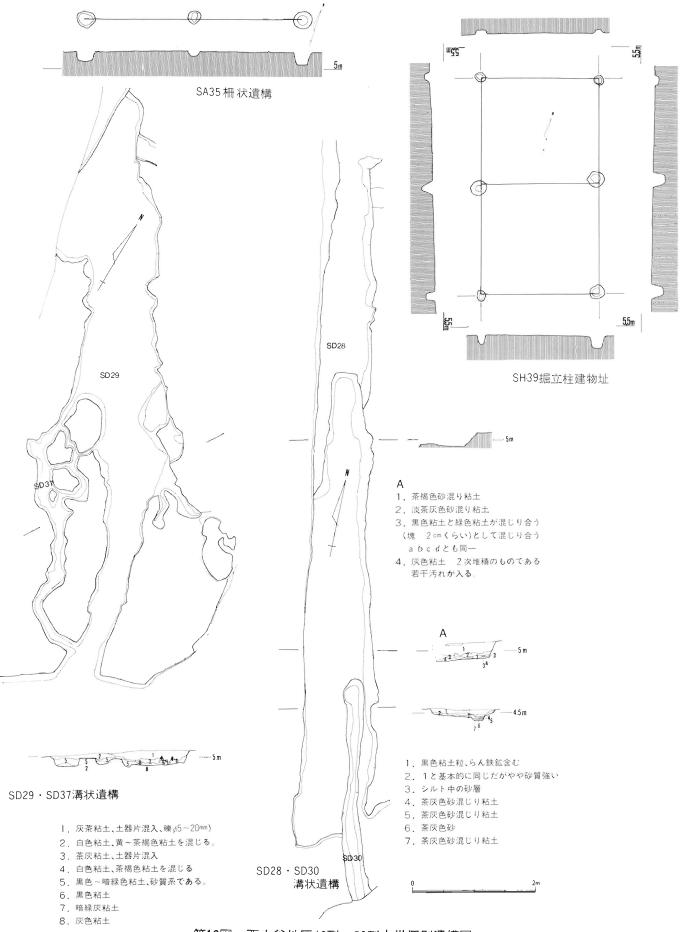
第10回 西大谷地区46列~50列中世遺構全体図



第11図 西大谷地区護岸状遺構図

S L 21 護岸状杭列計測一覧表

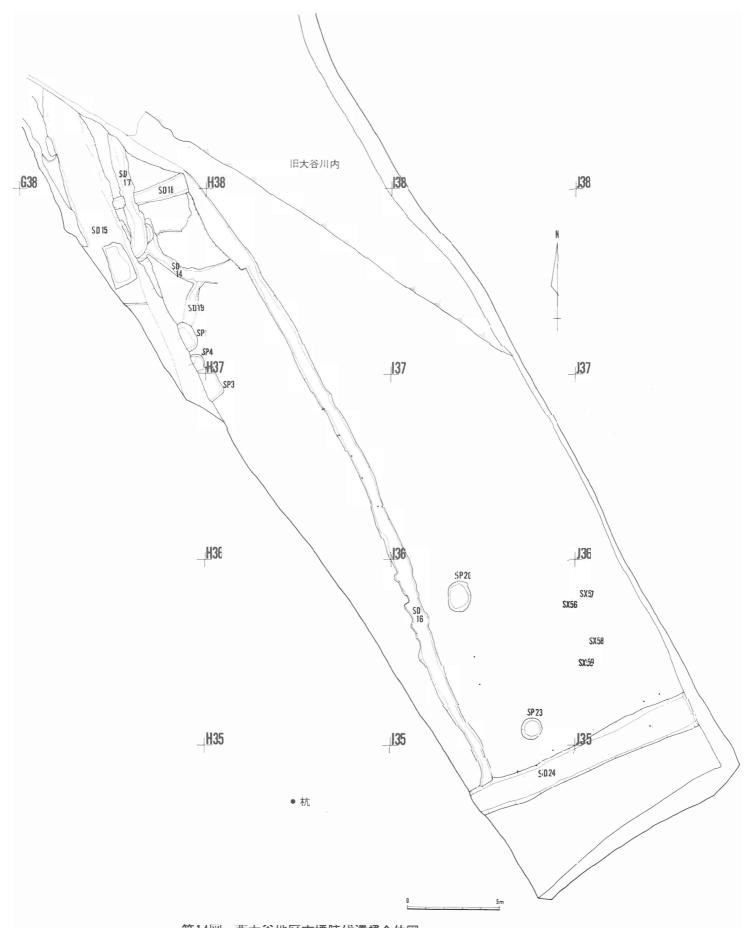
No.	杭高 (標高)	杭全長	No.	杭高(標高)	杭全長	No.	杭高(標高)	杭全長	No.	杭高 (標高)	杭全長
1	3.92 m	34 cm	18	3.860 ^m	40 cm	35	4.030 ^m	43 ^{cm}	52	3.888 ^m	64 ^{cm}
2	3.96	54	19	3.830	34	36	4.055	31	53	3.843	42
3	3.915	16	20	3.840	66	37	4.080	36	54	3.800	32
4	3.845	63	2.1	3.850	52.5	38	4.070	30	55	3.820	38
5	木 材		22			39		44	56	3.85	58
6	3.725	15	23	3.876	45	40	4.042	42	57	3.75	30
7	3.775	29	24	3.850	28	41	4.120	49	58	3.810	35
8	3.670	40	25	4.000	65.5	42	4.160	69	59	3.490	45
9	3.670	33.5	26			43	4.170	46	60	3.50	65
10	3.75	30	27	3.880	38	44	4.137	29	61	3.468	49
11	3.79	35	28			45	4.115	37	62	3.486	23
12	3.855	46	29	4.015	64	46	4.038	44.5	63	3.508	34
13	3.800	16	30	3.835	35	47	3.858	48.5	64	3.698	80
14	3.795	42	31		45	48	3.858	35	65	3.660	82
15	3.830	20	32		47	49	4.027	45	66	3.678	58
16			33		44	50	4.011	84.5	67	3.667	96
17	3.900	20	34	4.040	36	51	3.885	37			



第12図 西大谷地区46列~50列中世個別遺構図



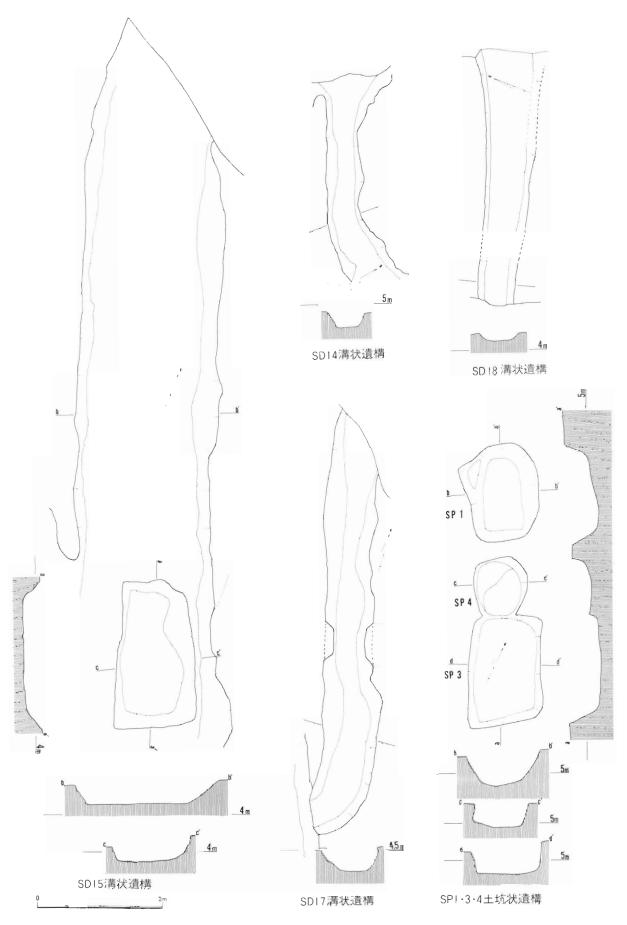
-28 -



第14図 西大谷地区古墳時代遺標全体図



第15図 西大谷地区 I 34・ J 35グリッド古墳時代遺物分布図



第16図 西大谷地区 G 37・38グリッド古墳時代個別遺構図

- **S P52** 確認面で長径 0.5m、短径 0.37m、底面で長径 0.27m、短径 0.23m、深さ 0.365m の小穴である。
- SP53 確認面で径 0.24 m、底面で径 0.14~ 0.1 m、深さ 0.05 mの小穴である。
- SP54 確認面で径 0.31m、底面で径 $0.12 \sim 0.06m$ 、深さ 0.19m の小穴である。
- S P55 確認面で径 0.2 m、底面で径 0.15 m、深さ 0.09 m の小穴である。

掘立柱建物遺構

西大谷地区で確認された掘立柱建物遺構はSH39 1棟のみであった。

S H39 1間2間の掘立柱建物遺構で、桁行3.5m、梁行1.95mであり、長軸方位はN-14 $^\circ$ -Wである。 柵状遺構 (第12図)

柵と考えられるのはSA35のみである。

SA35 確認された部分で長さ 3.5mであり、その方位はN-70°-Eである。

粘土採堀跡 (第10·13図)

46列~50列までの遺構面は、白色の粒子の細かい、均質な粘土である。この粘土を採掘した跡と考えられる遺構が3ケ所出ている。粘土を採掘した跡とした理由には、①白色粘土層下の黒色粘土上面で握り下げを停止している、②壁面が横からえぐられたような状態となっている、③覆土中にほとんど何も遺物を包含していない、といったことが上げられる。時期に関しては遺物を含まないので不明であるが少なくも中世以降のものと考えられる。

- **S X 25** 南北 5.2 m、東西 5.5 m のほぼ正方形をしているが、南東端から南へ幅 1.9 m、長さ 2.1 m程 の張り出しがある。深さは 0.3 m 程度である。
- S X 34 2.9 $m \times 2.5 m$ の方形をしており、深さ0.25 m 程である。
- $\mathbf{S} \mathbf{X36}$ 一部は発掘区外へと続くが、確認した部分で $5.0m \times 3.0m$ の方形となる。

護岸状遺構 (第11図)

SL21 F38・G38グリッドでは旧大谷川右岸部に護岸状遺構が検出された。この護岸は旧河岸に平行した2列の杭と不規則に打ち込まれた杭、それに礫により形成されている。

B. 古墳時代遺構 (第14図)

古墳時代初頭の土器を伴う遺構が34列~39列(西大谷 1 区)で確認されている。検出された遺構は溝状遺構 7、土坑状遺構 5、集石遺構 1、炉址 4 である。これらの遺構のなかで、 $SP1 \cdot 3 \cdot 4$ は掘削の状態等からほぼ同時につくられたと考えられる。又、SD15 は覆土の上層より非常に多量の土器を出土した。 $SX56 \cdot 57 \cdot 58 \cdot 59$ の焼土面は炉址と考えられ周囲に熱破砕した焼け礫の分布も見られた。おそらく住居跡内と考えられる。竪穴等の明確な住居跡は確認できなかった。

溝状遺構 (第14·16図)

S D14 長さ 4.6m、確認面で幅 $0.97 \sim 0.48m$ 、底面で幅 $0.87 \sim 0.25m$ 、深さ $0.22 \sim 0.13m$ である。流れの方向は、S D 17と接している部分より南東方向へむかった後、中間点付近で東へ向きをかえる。東端部は次第に深さを減じて終る。

- **S D15** 確認面で幅 2.2m 程度、底面で幅 1.7m 程度、深さ $0.5\sim0.3m$ である。現在の大谷川に破壊されているためその全長は不明だが、確認された部分は17m程である。ほぼ南北に延び、流れは北から南へ流れたと考えられる。この溝の埋土上層中より弥生時代後期~古墳時代初頭にかけての土器が多量に検出されている。(第29図) 従って、この溝は少なくも古墳時代初頭以前につくられたと考えられる。
- **S D16** 長さ $37.0 \, m$ 、確認面で幅 $1.2 \sim 0.52 \, m$ (平均 $0.6 \, m$ 程度)、底面で幅 $1.1 \sim 0.3 \, m$ (平均 $0.5 \, m$ 程度)、深さ $0.4 \sim 0.06 \, m$ である。 C の溝は西より張り出してくる微高地の末端部に沿ってのび、その方位は北から約20 西へ振れており、北端部は旧大谷川へ開口し、南端部は S D24へ合流する。流れの方向は底面の比高差が僅かであるため確実には分らないが、北から南であると考えられる。
- **S D17** 長さ 6.4m、確認面で幅 $0.95\sim0.68m$ 、底面で幅 $0.58\sim0.22m$ 、深さ $0.34\sim0.24m$ である。ほぼ南北方向にのび南端部付近で西へ曲り S D15に切られる。流れの方向は北から南へであると考えられる。
- **S D18** 長さ 4.14m、確認面で幅 $1.5 \sim 0.57m$ 、底面で幅 $0.83 \sim 0.35m$ である。ほぼ東西方向にのび西端は S D15に切られ、東端は旧大谷川へ続く。流れの方向は西から東であると考えられる。
- **S D19** 長さ 2.44 m、確認面で幅 $0.67 \sim 0.38 m$ 、底面で幅 $0.38 \sim 0.2 m$ 、深さ $0.22 \sim 0.13 m$ である。その延長の方位は北から約20°東へ振れる。北端部は S D14と合流し、南端部は S P 1 により切られている。
- **S D24** 長さ 12.7m、確認面で幅 $2.0 \sim 1.54m$ 、底面で幅 $1.56 \sim 1.08m$ であり、深さ $0.39 \sim 0.19m$ である。西から約25°北へ振れて東西方向へ延びるが、西端は現在の大谷川により破壊され、東端は発掘区外へと続く。北側の側面には杭列が見られ、溝の中より岸の土止めに用いられたと考えられる板材と杭がくっついた状態で検出されている。このことから、この溝には土止めが杭列と板材により施されていたと考えられる。

土坑状遺構 (第14·16図)

土坑状遺構は5 基検出された。このうち $SP1 \cdot 3 \cdot 4$ は南北方向に隣接して一列に並んで存在していた。時期的には大きく異なるとは考えられないが、切り合い関係より見ればSP4 とSP3 とではSP4 が先行する。

- **SP1** 確認面で楕円形、底面で長方形の平面形をもつ。上端長径 1.55m、短径 1.1m、下端長辺 1.1m、短辺 0.6mであり、深さは $0.45\sim0.48m$ である。壁はややオーバーハングしている部分がある。
- **SP3** 長方形の平面形を持つ土坑である。確認面で長辺 1.7m、短辺 1.16m、底面で長辺 1.64m、短辺 0.98mであり深さ $0.33\sim0.46m$ である。これも SP1 同様壁面がオーバーハングしている部分がある。
- **SP4** 確認面で長径 1.02 m、短径 0.84 m、底面で長径 0.9 m、短径 0.7 m、深さ 0.2 ~0.33 mである。
- **S P20** 確認面で長径 1.62m、短径 1.22m、底面で長径 1.28m、短径 0.96mの楕円形の土坑である。深 さは 0.1m以下であり下端も明瞭でないごく浅い皿状をしている。
- **S P23** 確認面で径 1.1 m、底面で径 0.8 m、深さ 0.39 mのほぼ円形をした土坑である。

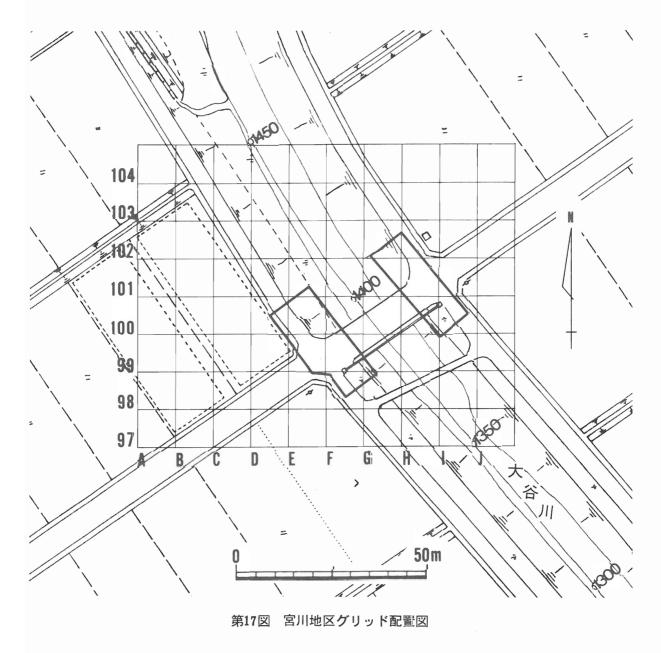
炉 跡 (第14・15図)

I35、J35グリッドで集中してSX56・57・58・59の4ケ所の焼土面が確認された。この焼土面の付近に分布していた礫の中には火熱を受け赤化しているものや、熱破砕しているものも見られたが、これ

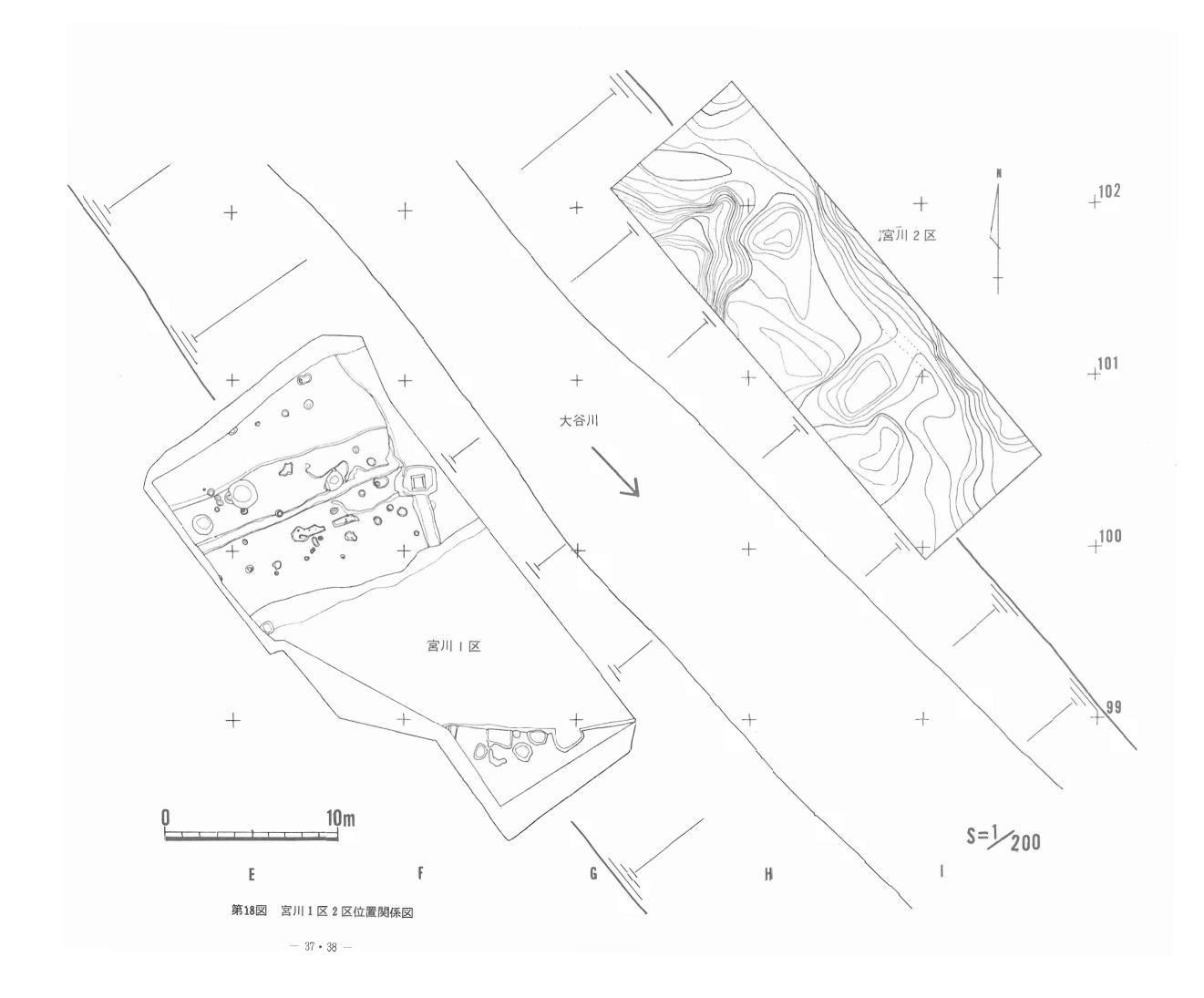
らの礫が炉を形成するような状態や、焼土面が掘り込みの中であるような状態は見られなかった。しかし、住居跡こそ確認できなかったが、この焼土面を中心とした部分が生活の中心であった可能性は強く、前述した礫も過去においては炉を形成していたと考えられる。ここでは、この4ケ所の焼土を炉と理解しておくことにする。

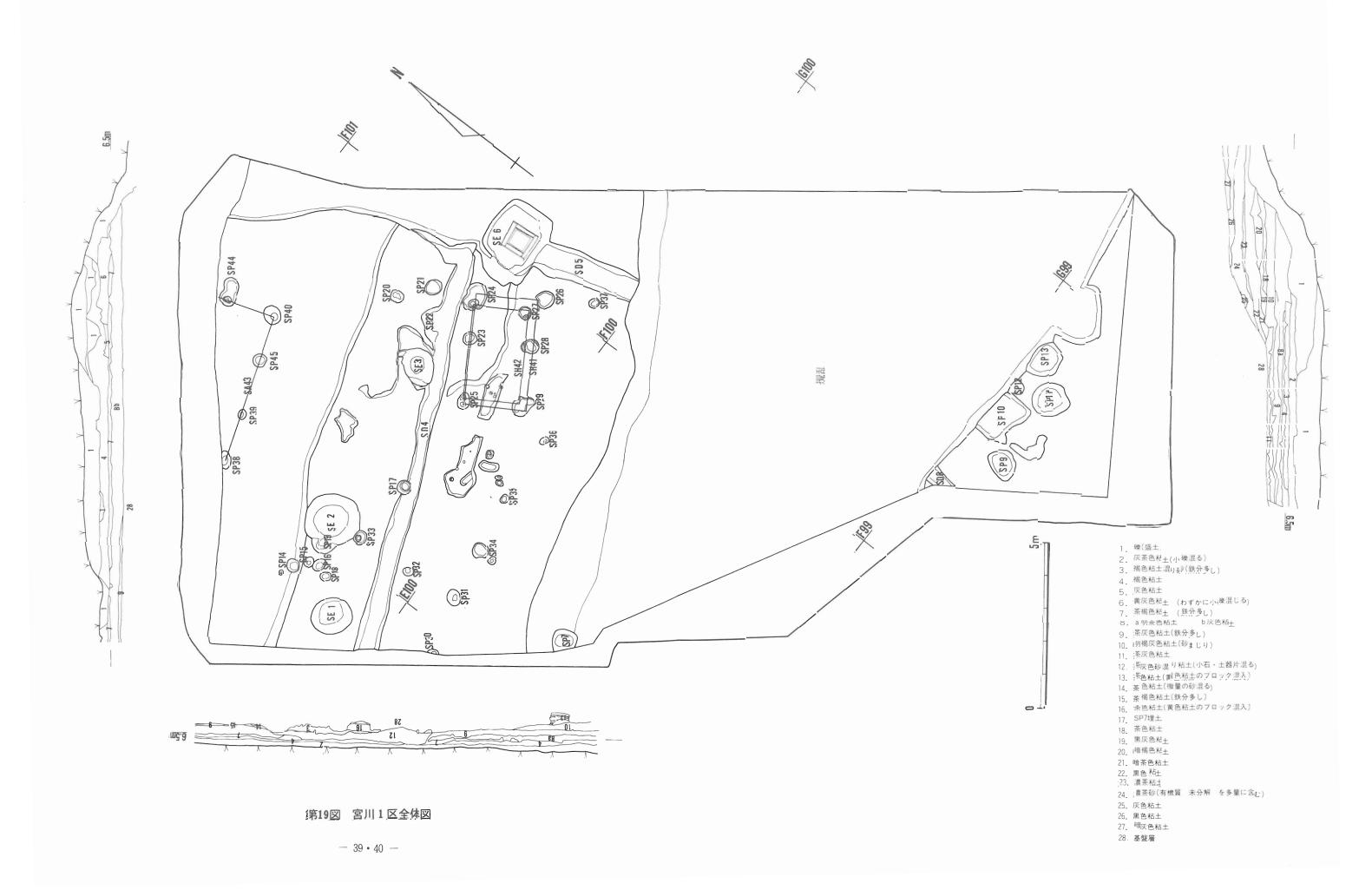
集石遺構

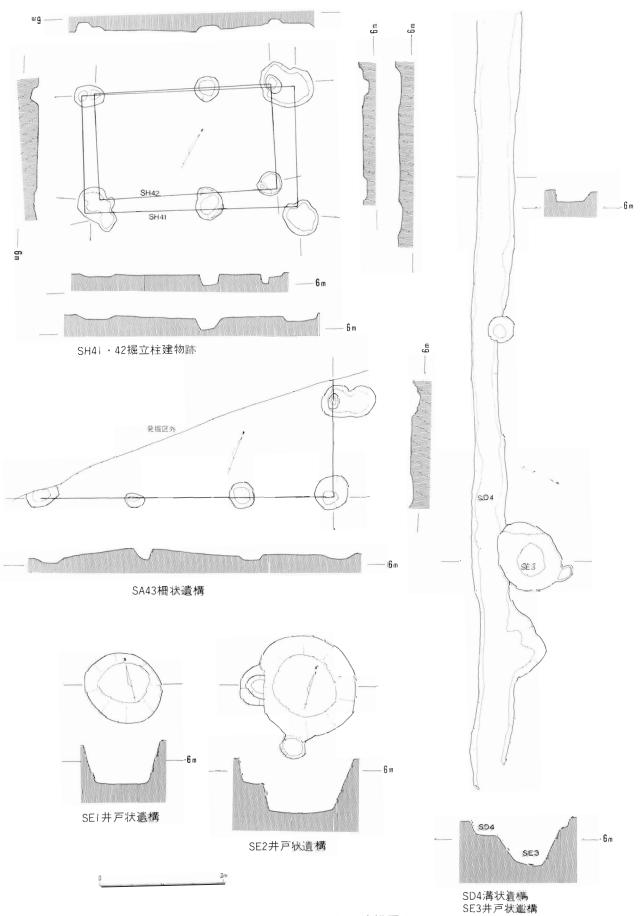
I 35 グリッドでS X 60 集石遺構が検出された (第15図)。約 $0.5 m \times 0.8 m$ の範囲に $10 cm \sim 20 cm$ 程度の 磔が積み重って集中していた。これらの磔は特に熱を受けているわけでもなく、その性格は不明である。



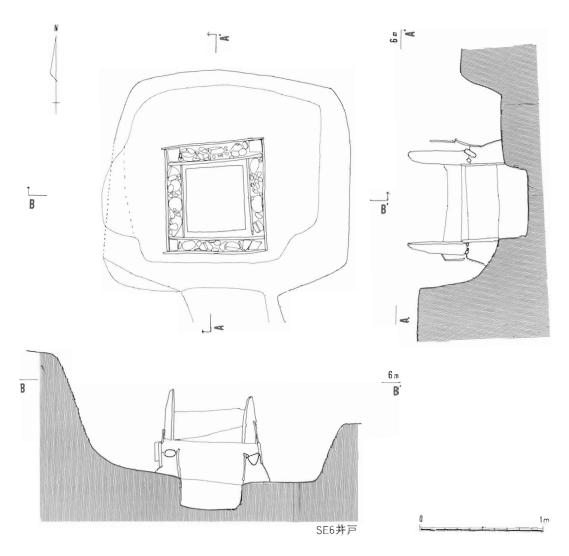
— 36 —







第20図 宮川1区個別遺構図1



第21図 宮川1区個別遺構図2

第2節 宮川1区・2区

宮川1区(第17~21図)

宮川1区での遺構面は奈良時代以降の遺構面1面のみであった。この遺構面は第19図宮川1区全体図の断面図で28層とした基盤層である。この基盤層は厚さ0.2m程の淡黄褐色粘土層であり、この下は青灰色の砂層となっている。遺物包含層は11・12・13層であり、うち11層と12層は、11層の方が粘土質であり12層が砂混り粘土であるという差があるが、基本的には同一の層と考えられる。遺物包含層は、E100グリッド付近の東西方向幅約5m程の所とF98グリッドで残存していただけであり、残存状態は良好とはいえなかった。F99グリッドでは撹乱によって遺構面が失われており、E100グリッドも北側で遺構面上面まで撹乱を受けている。これらの撹乱は耕作によるものと橋脚工事によるものである。E100グリッドで包含層が残存していたのは、この部分が耕作地でなく古くは道路であったためと考えられる。検出された遺構は掘立柱建物遺構2・柵状遺構1・溝状遺構3・井戸状遺構4・小穴23である。これらは全てが同一時期の所産であるとはいえず、切り合っているものやSH41・42のように建てかえにより重複しているものもある。しかし、出土遺物が僅少であり、且つ、重複関係も多くないため個々の遺構の新日関係・同時性を適確につかむことはできなかった。

溝状遺構 (第19図)

溝状遺構は $SD4 \cdot SD5 \cdot SD803$ 本が検出された。このうちSD5、SD8はごく一部が調査できたにすぎない。

- **SD4** 幅 $0.7m \sim 0.4m$ 、深さ 0.2m、長さ 12.75m である。断面形は逆台形となる。東端は現大谷川により失われ、西端は発掘区外へと続く。流れの方向はどんな理由から東から西と考えられる。遺物としては、土師器坏・甕・堝、須恵器坏・蓋等の破片が出土している。(第20図)
- **SD5** 幅 $1 \, m \sim 0.8 \, m$ 、深さ $0.35 \, m$ 、長さ $3.2 \, m$ である。断面形は逆台形となる。北端は SE6 により切られており、その続きは現大谷川により失われ南端は撹乱により破壊されている。流れの方向は底面の比高差から考えれば南より北になるがその延長が短く比高差も僅かなため確定し得ない。遺物としては、土師器の坏・甕、須恵器の壺等の破片が検出されている。
- **SD8** 北側は撹乱により失われ、南側は発掘範囲外に続くため調査により確認されたのはごく一部にすぎない。幅 $0.47\,m$ 、深さ $0.03\,m$ 、検出された延長は $0.8\,m$ である。流れの方向等は不明である。遺物は検出されなかった。

土坑状遺構 (小穴・柱穴を含む)(第19図)

小穴は全部で35基確認された。うち掘立柱建物遺構、橅状遺構を構成するものを除くと23である。

- **SP7** 確認面で直径 0.7m、底面で 0.55m である。遺物は検出されなかった。
- **SP9** 確認面長径 1m、短径 0.7m、深さ 0.02m程のごく浅い皿状の小穴である。遺物は検出されなかった。

- **SP11** 確認面で直径 1.1 m、底面で直径 0.7 m、深さ 0.25 m の小穴である。
- SP12 確認面で直径 0.4 m、深さ 0.03 m程の皿状小穴である。
- **SP13** 北側は撹乱により失われている。確認面で直径 1.2m、深さ 0.4mである。下端は明確でなく放物線状の断面形となる。
- **SP14** 確認面で直径 0.4 m、底面で直径 0.25 m、深さ 0.1 m 程の小穴である。
- **SP15** 確認面で長径 0.4 m、短径 0.3 m、底面で長径 0.2 m、短径 0.15 m、深さ 0.15 m の楕円形の小穴である。
- **SP16** 確認面で長径 0.4m、短径 0.35m、底面で長径 0.2m、短径 0.15m、深さ 0.35mの楕円形の小穴である。遺物は土器の小破片のみで、いずれも器形を判明できる様なものではなかった。
- **SP17** 段状の掘り方を持つ小穴である。確認面で直径 0.44m、底部で直径 0.3m、深さ 0.08mの浅い掘り込みの中に南東側に偏って、上面で直径 0.27m、底面で 0.22mの小穴を掘り込んでいる。遺物としては、土師器の坏や甕の破片が検出されている。
- **SP18** 確認面で長径 0.3 m、短径 0.25 m、底面で直径 0.2 m、深さ 0.35 mの楕円形の小穴である。
- **SP19** SE2により切られているが、確認面で推定直径 0.7 mであり底面直径 0.36 m、深さ 0.48 mの 土坑である。
- **S P 20** 確認面で直径 0.4 *m*、底部長径 0.3 *m*、短径 0.16 *m*、深さ 0.15 *m*の小穴である。遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏の破片等が検出されている。
- **S P21** 確認面で長径 0.56m、短径 0.46mの楕円形、底面で径 0.42mのやや三角形に歪んだ円形となる。深さは 0.06mである。遺物は土器の小破片のみで、器形を判明できるようなものはない。
- S P22 S D 4 により切られている。確認面での推定直径は 0.9 mであり、深さ0.18 mである。平面形は方形となると考えられる。遺物としては、土師器の坏や堝等の破片が出土している。
- **S P30** 確認面で直径 0.35 m、底面で 0.12 m程の小穴である。
- **S P31** 確認面で長径 0.5 m、短径 0.4 m、底面で長径 0.2 m、短径 0.15 m、深さ 0.2 mの楕円形の小穴である。
- **S P32** 確認面で長径 $0.32\,m$ 、短径 $0.27\,m$ 、底面で長径 $0.17\,m$ 、短径 $0.12\,m$ 、深さ $0.07\,m$ の楕円形の小穴である。
- **S P33** 段状の掘り方を持つ小穴である。確認面で直径 0.4m、底面 0.33m、深さ 0.06m 残い掘り込みの中に、西側に偏在して上面の直径 0.2m、底面直径 0.12m、深さ 0.06mの小穴が掘り込まれている。
- **SP34** 確認面で直径 0.5m であり、底面は長径 0.4m、短径 0.28m の楕円形となる。深さは 0.11m である。
- **S P35** 確認面で長径 0.28m、短径 0.23m、底面で長径 0.2m、短径 0.16m、深さ 0.06mの卵形の小穴である。遺物はみられなかった。
- **S P36** 確認面で長径 $0.28\,m$ 、短径 $0.2\,m$ の台形状の平面形を持ち、底面は長径 $0.1\,m$ 、短径 $0.06\,m$ の 楕円形となる。深さは $0.05\,m$ である。
- SP37 確認面で長径 $0.33 \, m$ 、短径 $0.28 \, m$ 、底面で長径 $0.25 \, m$ 、短径 $0.18 \, m$ 、深さ $0.08 \, m$ の楕円形をし

た小穴である。

掘立柱建物遺構 (第20図)

掘立柱建物遺構はSH41、SH42の2棟が重複した形で確認された。

S H41 1間×2間の掘立柱建物遺構であり、桁行3.4 m、梁行1.6 mである。S P 23・24・25・26・28・29がその柱穴となる。長軸方位はN-59°-Eである。遺物は検出されなかった。

SH42 1間×2間の掘立柱建物遺構であり桁行 2.8m、梁行 1.7m である。SP23・24・25・27・28・29が柱穴となる。長軸方向はN-59°-Eである。柱穴の間隔を見ると桁方向でSP27-SP28間とSP28-SP29間(SP24-SP23間とSP24-SP25間)とで大きく異なる。これには、①SP24・27は庇のような施設の柱穴、②SP23・28は柱穴として使用されなかった、③SP24・27は柱穴として使用されなかった、という 3.5m つの考え方ができるが、どれかは確定できない。

并戸状遺構 (第19·20図)

井戸状遺構にはSE1・SE2・SE3・SE6の4つがある。

- **SE1** 平面形は楕円である。上面の長径 1.3m、短径 1.1m、底面の長径 0.8m、短径 0.6mで、深 0.7mである。底面は砂層に達し、調査時点で常に滞水していたため井戸と考えた。埋土上面、及 び底面より 0.3m程上位に多量の炭化物と土器の細片を含んでいることから使用中止後一定期間を経た後、炉として用いられた時期が二度あったと考えられる。しかし、周辺の土が焼土化していない点から 考えると、単にゴミ棄て穴として使われただけとも考えられる。遺物として、土師器の坏・甕・堝の破片が出土している。
- **SE2** 平面形はほぼ円形である。上面直径 1.7m、底面直径 0.9m、深さ 0.85mである。 SE 1 同様 滞水していたため井戸と考えた。

遺物は、土師器の坏や須恵器の蓋が検出されている。

SE3 平面形は楕円形である。上面で長径 1.2m、短径 0.95m、底面で長径 0.5m、短径 0.35mを計り、深さ 0.67mである。

底部より 0.3m 程上位の埋土中に多少炭化物を含み、さらにその一層上には炭化物が集中して見られる。SE1 同様に使用中止後に炉あるいはゴミ葉で穴として使用されたと考えられる。

遺物としては、土師器坏・甕、須恵器の坏・蓋等が検出されている。

SE6 SE6 は宮川地区で検出された井戸状遺構の中で、唯一内部に井戸枠を持ち確実に井戸と言えるものである。

以下に構造を説明する。掘り方は 2 段階になっており、初めに一辺が 1.8m、深さ 1m程のほぼ正方形の穴を掘り、その中央部に一辺 0.55m、深さ 0.25m程のほぼ正方形の穴を掘っている。この中央に掘られた穴の四隅に、現存で断面 $0.1m \times 0.1m$ 長さ 0.7m程の支柱を立てその内側に幅 0.3m、厚さ 0.03m、長さ 0.75m程の板材をホゾ組みして作った枠をはめ込んでいる。

遺物としては、土師器の坏・甕、須恵器の坏・蓋・甕の破片が検出されている。

柵状遺構 (第20図)

SA43 一部は発掘区外へと続くが確認された範囲はほぼ東西方向 $(N-71^{\circ}-E)$ に 4.7 mであり東端で直角に曲り南北方向で 1.7 mである。

宮川2区(第24~28図)

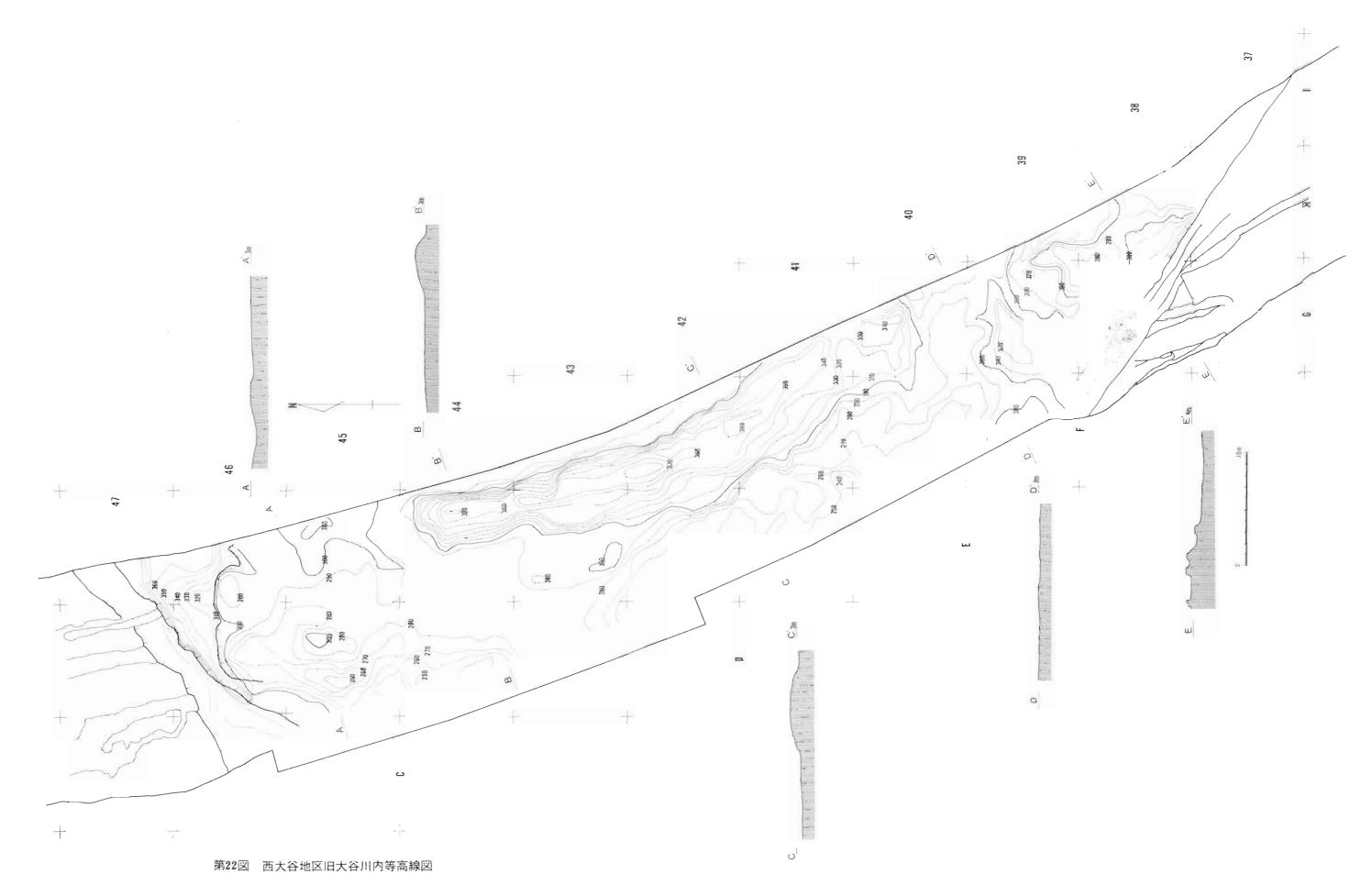
宮川2区は旧大谷川流路部分にあたり検出された遺構はSL46護岸状遺構のみであった。

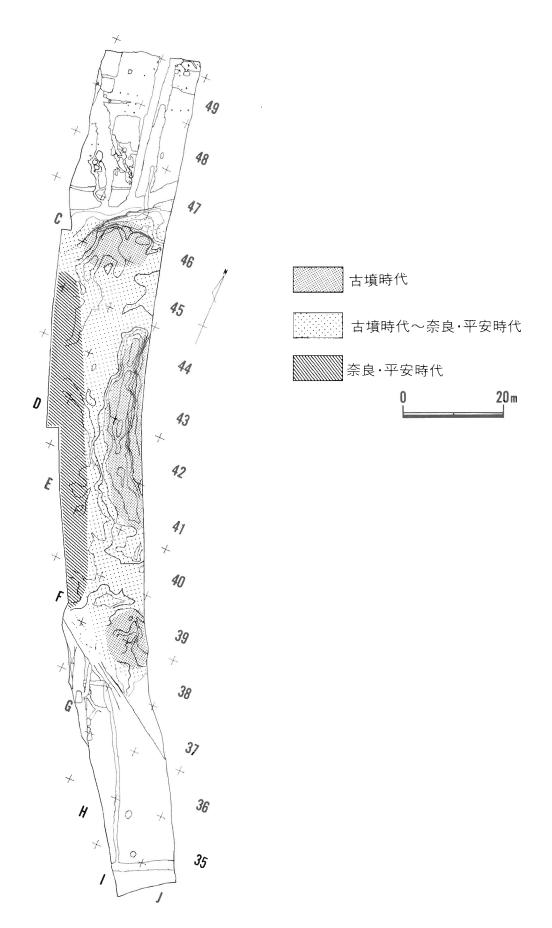
SL46 I 100 グリッドの北西部に位置する。第28図に表されるように旧大谷川流路が屈曲する地点に沿った形で杭を打ち込み護岸としている。時期は中世と考えられる。

第3節 旧 大 谷 川

西大谷1区で表土除去を行ったところ、南半部では地表下1mで中世の遺物包含層を確認することができたが、北半部では赤褐色の砂礫の広がりが確認された。現在の大谷川は昭和17年に三菱の軍需工場建設の折に周辺の排水の為に直線的に改修されたものであるため、この砂礫の広がりは、それ以前の流路であると考えられた。そこで明治時代の地図と現地形を照合してみたところ、改修前の大谷川はかなり蛇行しており、この地点で流路が大きく東へ屈曲することがわかった。この昭和17年以前の大谷川流路に堆積したと考えられる赤褐色の砂礫には、近世・現代の陶磁器類が含まれていたが、若干の摩滅した古墳時代後期の土器や、奈良・平安時代や中世の土器類等も見られた。さらに赤褐色砂礫を掘り下げたところ、やはり摩滅した土器を若干含む灰色粘土層が出たため、トレンチにより部分的に掘り下げたところ、約2~3.5mの深さ(標高3~4m程)で灰色の砂礫層にあたり、この砂礫層より古墳時代後期の土師器・須恵器の完形品とともに、動物形(牛)の土製品が出土した。従って、この砂礫層は古墳時代の大谷川の流路中の堆積物であり、かつ、その中にはさらに多くの遺物が包含されていることが予想された。そこで、この砂礫層上面を出していったところ、最終的に西大谷1・2区では、37列~47列までは古い大谷川一田大谷川の流路に当ることがわかった。又、上流の調査区である宮川2区でも旧大谷川流路(川岸)が検出された。

両大谷1・2区(第22・23・30図)





第23図 西大谷地区旧大谷川内時代別遺物分布図

流路中の推積状況は第7図-西大谷地区断面のB-C断面、F-D断面、D-E断面、G-H断面、I-J断面に示される。このうちB-C、F-D、D-E断面には北側の岸の傾斜が表わされている。G-H断面は先述した細長い高まりを横断した断面である(図版21)。この断面では高まりの頂点から1 m程西で18層を切って10~16層が堆積し、さらに10層を切って1~9層が堆積しているのがわかる。つまり、旧大谷川の流れは東から西へと振れてきていることがこの堆積状態より理解される。それでは、この堆積の年代観はどのようになるであろうか、次に旧大谷川内の遺物の時代別の分布状態についてふれる。

旧大谷川内に堆積した砂礫・粘土中からは古墳時代~平安時代にかけての祭祀関係遺物を主体とする 遺物が大量に出土している。しかし、これらの遺物は、厚さ平均1m程度の砂礫・粘土層の中に均等に 分布しているわけではなく、地点により分布密度の濃淡、時期差等が見られた。

西大谷地区での旧大谷川内の時代別遺物分布状況を見ると、第23図時代別遺物分布図に示されるように、ほぼ純粋に古墳時代後期の遺物のみ分布する地点が、①H39グリッド杭を中心とする範囲、②F41~E44にかけての範囲、③D46グリッドを中心とする範囲の3ケ所見られる。このうち、①の地点はH39グリッド杭付近の3.1 mの等高線で囲まれる範囲であり、②の地点は、細長い高まりの部分とその東側の落ち込んでいる部分に当り③は北側の岸の部分にあたる。以上が純粋に古墳時代後期の遺物のみ分布する地点である。一方、第23図の斜線部分では古墳時代の遺物も混じるものの、主体となるのは奈良・平安時代の遺物である。これは高まりの西側の2.8 mの等高線で囲まれる範囲に相当する。

古墳時代の遺物の集中する範囲と奈良・平安時代の遺物の集中する範囲以外の部分では両時代の遺物が混じり合うが、古墳時代の遺物の方が多く、又、当然の事であるが地山に近い部分では古墳時代の遺物が圧倒的になる。特に、41列から44列の高まりの西側の緩い傾斜面では、上層でこそ奈良・平安時代の遺物があるが下層では純粋に古墳時代後期の遺物のみが出土した。

このような時代別の遺物分布状態と、河床の起伏、流路内の堆積状態を総合してみれば、古墳時代後期の旧大谷川流路は41列~44列にかけての高まりの東側にあり、そこにG-H断面の18・19層が堆積し、この堆積とその他の作用により、やはり、古墳時代後期に高まりの西側へと流路が変ったと考えられる。そして、10層~16層が堆積し、さらに時代が下って奈良時代以後1~9層が堆積していったと考えられる。その過程で古い堆積物は流されていったが岸に近い部分や窪地状になった部分では古い堆積物が流されず、古墳時代後期の遺物包含層が残ったと考えられる。

以上が、河床の状態、堆積、時代別の遺物分布から旧大谷川の流路の変遷についての理解である。次 に各地点での遺物の出土状態についてふれる。

先に純粋に古墳時代後期の遺物が出土した地点として①、②、③の地点を上げた。このうち①の地点では河床に堆積した砂礫層の上に粘土層が堆積していたがこの粘土層と砂礫層の境界より図版22に見ら

れるように、土師器の坏を主体として斎串等の木製品や柄のついた状態の刀子を含む多量の遺物が出土 した。これらの遺物相互に有意の配置性等は看取できなかったが、ほとんど全く摩滅もせず、遺存状態 も極めて良いことから原位置を大きく移動していないか、廃棄されたそのままの状態を示している可能 性もある。

②の地点では図版20・21,第7図-2、G-H断面に見られるように古墳時代の流路とその中に堆積した砂礫が完全に残っていた。この砂礫に包含されて、図版24・25・26に見られるような状態で土師器坏・須恵器坏を主体とし、図版23-1の牛形土製品、図版24-2のト骨、図版27-1の鉾形木製品、木製模造刀、第38図-5100の腹部に串状の棒を刺した状態で出土した馬形木製品や、人形土製品等の祭祀関係遺物が出土した。これらの遺物も図版26-2のような重なって出土した土器があることや、図版27-1の鉾形木製品と木製模造刀がセットで出土していることなどから大きく原位置を動いていない可能性があるが、やはり配置性は看取できなかった。

③の地点は他と比較してもその遺物分布密度は高く、又、種類も多様であった。この地点では岸の部分にあたることもあり砂礫でなく砂礫混じり粘土や粘土が推積し、その中に多量の木製品・竹製品・動物遺存体が包含され、これに伴って多量の古墳時代後期の土器が出土した。遺物の出土状態は図版32~37に示されるとおりだが、図版32の土器群のように配置性をうかがわせ、ある程度、原位置を保っている可能性があるものもあった。人形・斎串等の木製品の出土状態は図版32・34に見られるが、同一地点からかさなりあって同一形態の人形が出土しており、流されたにしてもそれ程大きな動きではなかったと考えられる。その他竹製品等として図版36・37に示される籠類が出土している。中でも、図版37~2の曲物容器としたものは長方形の曲物にゴザのような藺草の編んだものを張ってあり注目される。又、特筆されるべき遺物として図版34~2の基部に透し彫りが施されている構櫛が出土している。

これら、古墳時代の遺物の分布する地点に対して、斜線部分の奈良・平安時代の遺物が分布する地点 は遺物の分布密度は希薄である。しかし、古墳時代と同様、供献土器類・形代類・獣骨類が出土し、さ らに木簡や縁釉陶器の皿も出土している。

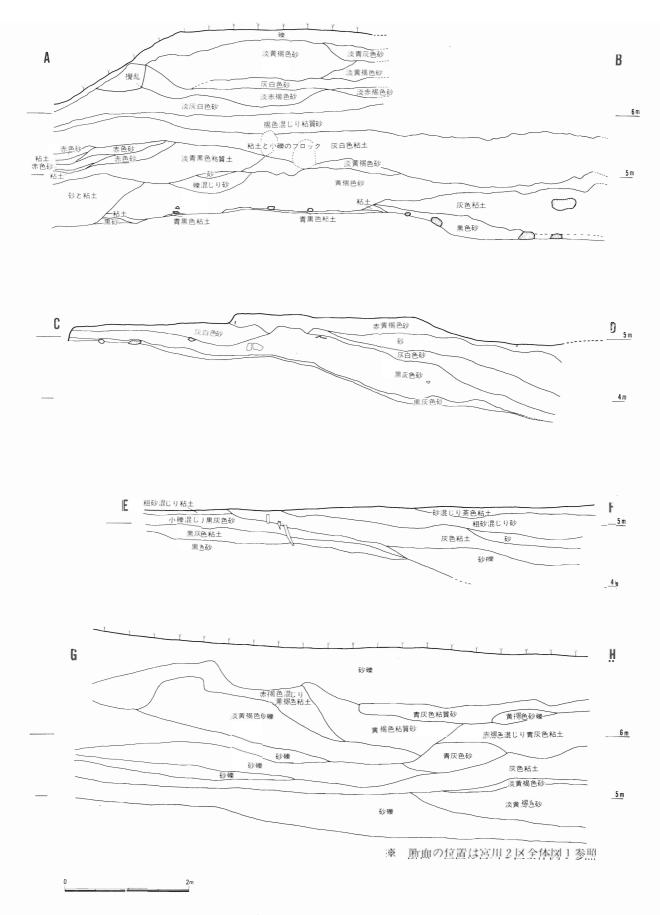
西大谷地区では以上の古墳時代~平安時代の遺物を含む砂礫・粘土層の上に中世の堆積粘土がのっているが、この層からも若干の土器類・木製品・漆器類の遺物が出土している。

宮川2区

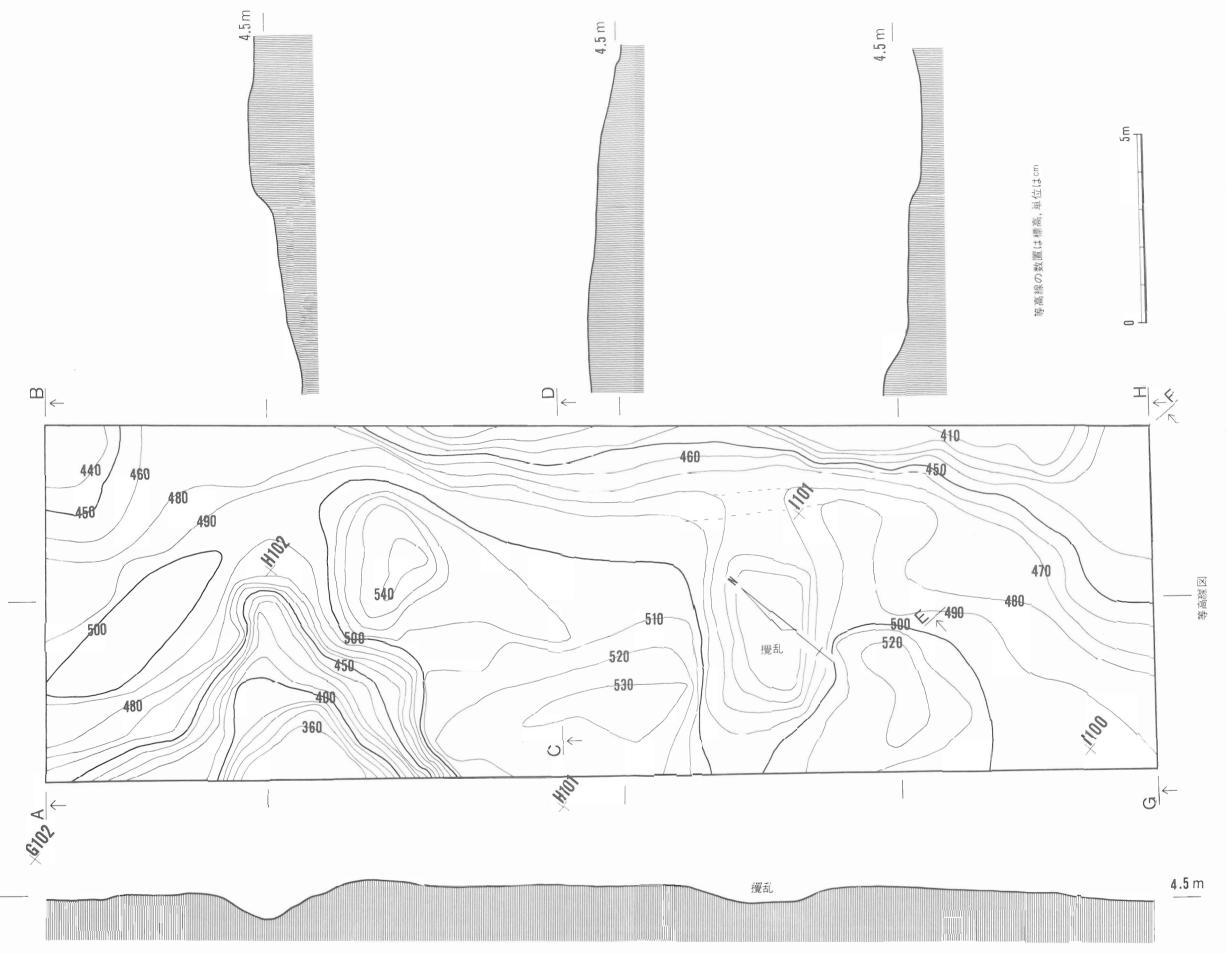
宮川2区では旧大谷川の右岸傾斜面を検出した。第25図-宮川2区全体図1に示されるのがそれである。旧大谷川流路の部分は発掘区の東側 4程度であるが、北端部と南端部では流路は西へ廻り込んでいる。又、発掘区の西側、北端部に近い位置に1.5 m程の深さの窪地(中世)が検出されたが性格不明であった。

この旧大谷川流路部分より西大谷地区同様古墳時代後期の祭祀関係遺物が大量に出土した。(第32図) 遺物の出土した層は第24図のA—B断面の最下層の馬色砂とその上層の灰色粘土であり、G—H断面では 下から4層目の灰色粘土層以下砂礫層までが包含層に相当する。分布状況は第26図、第27図に示すとお りであるが、第26図の全遺物分布図には木製品・土器類・礫のすべてを入れ、以下、土器・木製品・礫

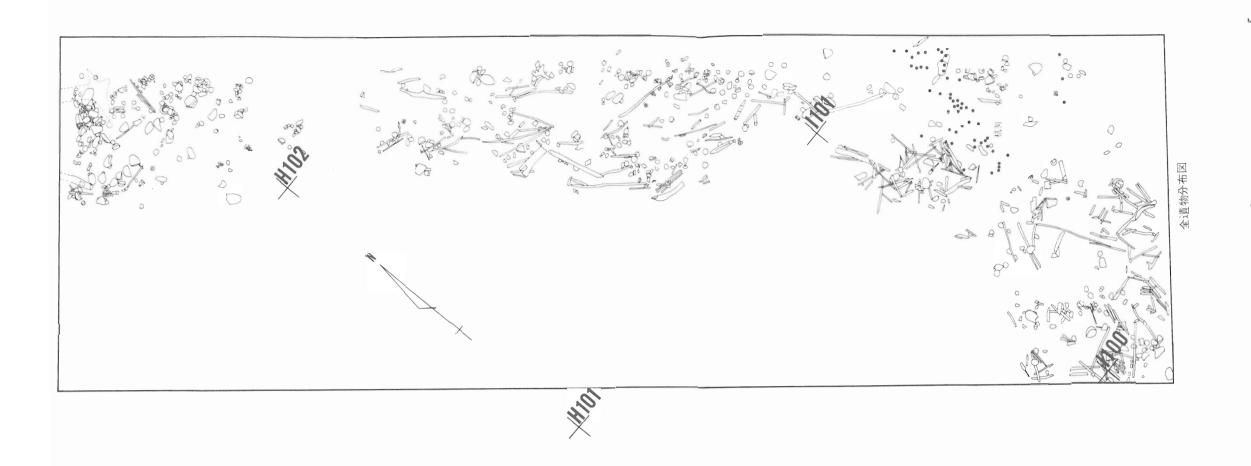
それぞれの分布状態を図化してある。これを見ると三者の分布状態に違いは見られず、川の流れにより
このような分布状態が生じたと考えられる。
- 52 $-$

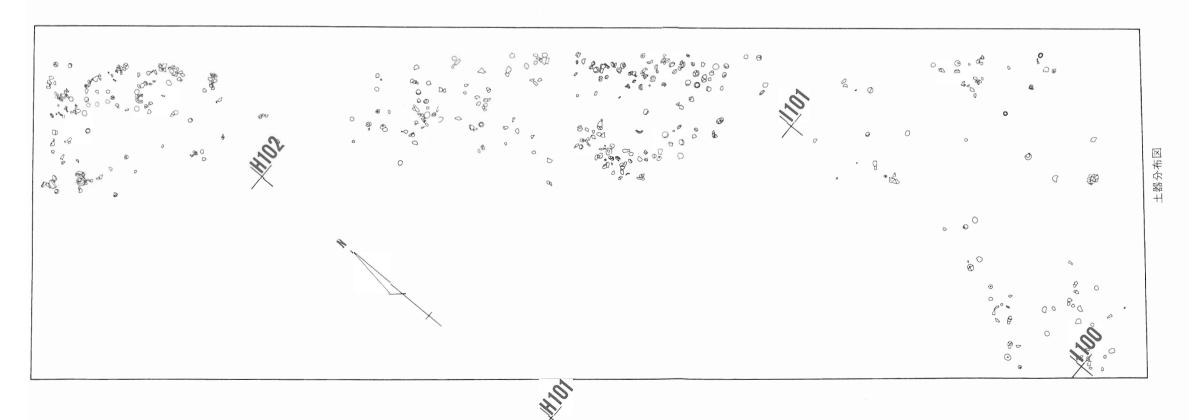


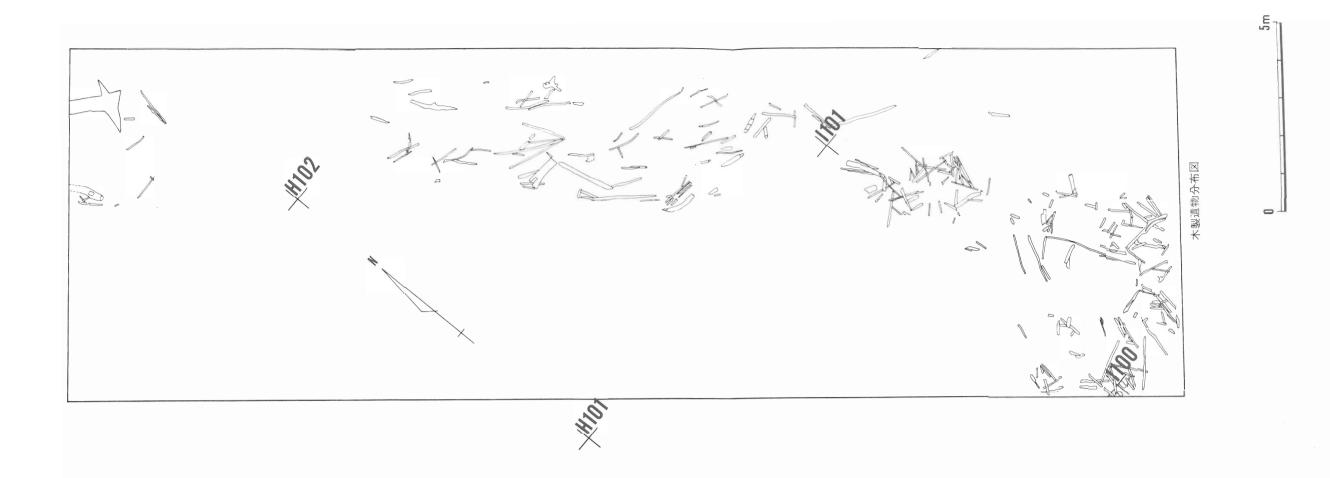
第24図 宮川2区断面図

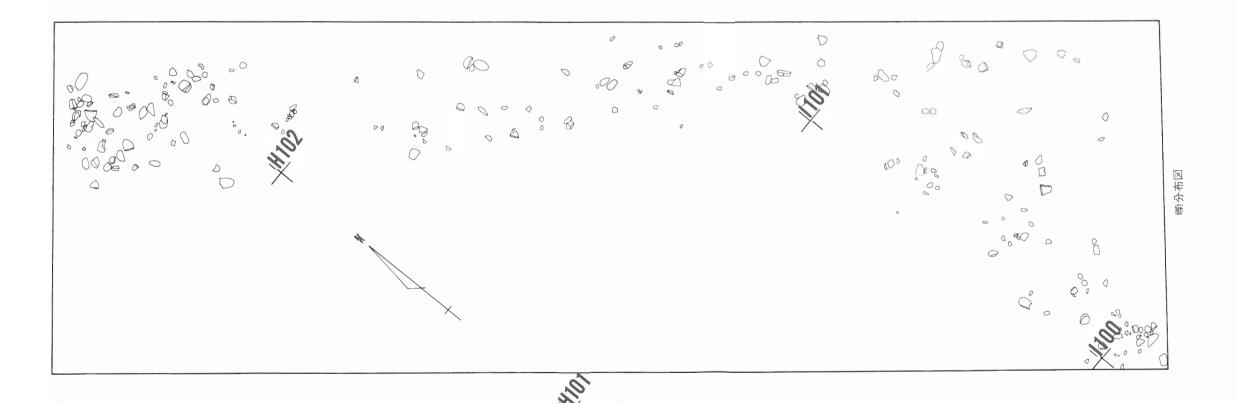


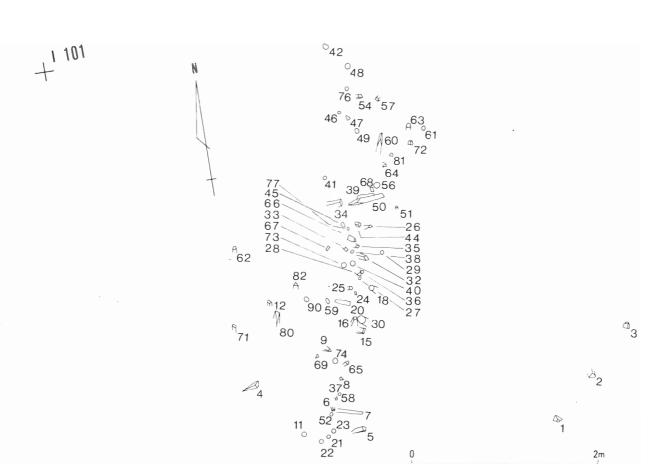
第25図 宮川2区全体図1











第28図 宮川 2 区杭列遺構図

0

2m

2 区 杭 列 計 測 表 ///

No.	杭高(標高)	杭全長	No.	杭高 (標高)	杭全長	No.	杭高 (標高)	杭全長	No.	杭高(標高)	杭全長
1	5.300 m	63 ^{cm}	24	5.250 ^m	52 <i>cm</i>	47	5.070 ^m	33 ^{cm}	70	m	ст
2	5.250	45	25	190	31	48	5.070	62	71	5.210	36
3	5. 270	46	26	170	35	49	5.050	59.5	72	5.240	30
4	5.210	21	27	230	41	50	5.140	40	73	5.130	19
5	5.210	27	28	140	16	51	5.070	74	74	5.210	22.5
6	5.290	33	29	190	55	52	5.260	74	75		
7	4.980	53	30	220	66	53			76	5.160	81
8	5.200	42	31			54	5.230	39	77	5.20	20
9	5.240	13	32	5.190	34	55			78		
10			33	5.270		56	5.190	31	79		
11		17	34	5.160	26	57	5.110	70	80	5.340	91
12	5.250	28	35	5.210	33	58		19	81	5.040	42
13			36	5.240	42	59	5.130	19	82	5.290	61
14			37	5.040	21	60	5.190	54	83		
15	5.140	25	38	5.160	59	61	5.100	47	84		
16	5.200	40	39	5.100	25	62	5.180	27	85		
17			40	5.190	48	63		60	86		
18	5.18	46	41	5.12	29	64	5.140	33	87		
19			42	5.100	35.5	65	5. 130	30	88		
20	5.150	20	43	5.31	65	66	5.230	56.5	89		
21	5.250	19	44		45	67	5.340	24	90	5.250	28
22	5.280	30	45	5.240	50	68	5.210	37			
23	5.260	35	46	5.090	43	69	5.130	61			

本年度調査における出土遺物の総量は整理用コンテナで約600箱もの膨大な数にのぼり、現在もまだ整理中であるため、今回の報告ではその概要を記すのにとどめ、土器類では代表的なもの、木製品では人形・馬形木製品・斎串および木簡を図化して取り上げた。残りについては整理の進行を待って報告の予定である。

第1節 概 要

神明原・元宮川遺跡の出土遺物は、①旧大谷川内より出土した遺物 ②西大谷地区34列~38列間の弥生後期~古墳時代初頭の遺構に伴う遺物 ③西大谷地区34列~38列間の中世の遺構に伴う遺物 ④西大谷地区46列~50列の平安~中世の遺構に伴う遺物 ⑤宮川1区奈良~中世の遺構に伴う遺物の5群に大別することができる。これらのうちでは、①が圧倒的多数を占め、②は面積当りに考えれば比較的多く ③・④・⑤はごく少ない。以下に①より記述する。

① 旧大谷川内出土遺物

旧大谷川内出土遺物を時期別に分類すると、a縄文時代晩期、b弥生時代、c 古暗時代後期、d 奈良 ・平安時代、e 中世、f 近世以降に分けることができる。

a、縄文時代晩期の遺物

この時期の遺物は天王山式と考えられる土器片1点と磨石・石皿・黒曜石片が数点出土している。付近には清泉寺遺跡・大正寺山遺跡・不動山下遺跡等の縄文時代の遺跡が分布していることから周辺遺跡より混入したものと考えられる。

b、弥生時代の遺物

弥生時代後期の壺の口縁部の破片1点と有孔石錘1点が出土している。他に石錘数点が出土している が時期は不明である。縄文時代の遺物と同じく混入品であろう。

c、古墳時代後期

旧大谷川内出土の遺物の主体はこの時期の祭祀関係遺物である。その内容は斎串・人形・馬形・鉾形・太刀形等の木製品、人形土製品・馬形土製品・牛形土製品・手捏土器等の形代類、土師器の坏が主体となるおびただしい数の供献土器類、馬・牛・犬などの獣骨類が上げられる。その他、若干の銅鏃・耳環・勾玉・横櫛・火鑽臼・四ツ手網の雲手(十文字)・編錘・曲物・籠類・砥石・刀子(柄付)等が出土している。

d、奈良·平安時代

古墳時代後期の遺物と同じように、斎串・人形・馬形・大刀・丸木弓等の木製品、人形主製品・馬形土製品・手捏土器等の形代類、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器等の供献土器類の他、獣骨・鉄鏃(雁股式)などが祭祀遺物として出土している。その他、瓦・木簡・墨書土器・土器転用硯・鎌・砥石・横櫛・曲物・大形土錘・銭貨も少数出土した。

e·f 中世~近代

山茶埦や青磁等の陶磁器類、漆器椀等や、寛永通宝などの古銭が出土している。

②西大谷1区微高地上~緩斜面の古墳時代遺構に伴う土器

西大谷1区の古墳時代遺構に伴っては比較的多くの土器と若干の木製品が出土した。

土器は古墳時代初頭-五領期のものと考えられ(第29図)、 $I35 \cdot 36$ グリッド及びSD15満状遺構中より多量に出土している。 $I34 \cdot 35$ グリッドでの出土状態は、いくつかのまとまりをもっている状態が観察されたが、集中部分の周囲に土坑等の掘り込みは検出できなかった。又、 $SX56 \cdot 57 \cdot 58 \cdot 59$ の焼土面や、SX60集石状遺構が確認されたが、これらの遺構の周囲に特に集中して分布しているということもなかった。

木製の遺物としてはSD16溝状遺構中より細長い杓子状の木製品が出土し、SD24溝状遺構では壁面の土止に用いられたと考えられる板材が流された状態で出土した。(図版9)

③ 西大谷地区34列~38列間の中世遺構に伴う遺物

遺物はほとんど出土せず、出土したものも細かな土器片ばかりであった。

④西大谷地区46列~50列平安~中世遺構に伴う遺物

この地区の遺構に伴って出土した遺物は量も極く少なく、細かい破片ばかりであり、その多くも古墳時代の遺物が混入したものであった。このような中に若干の平安末~中世にかけての山茶塊、陶磁器が見られたにすぎない。これは、この地区の遺構が粘土採掘跡といった生活にそれ程密着しないものであったためと考えられる。ただ、SD28からは底面に接した形で12世紀中葉~後半のものと考えられる山茶塊がほぼ完形で出土した。

⑤宮川1区の奈良~中世遺構に伴う遺物

宮川1区の遺構からは、若干の奈良・平安時代の須恵器・土師器の破片が出土している。須恵器には、 坏・蓋・甕等の器種があり、土師器には、坏・甕・堝等の器種がみられる。これらの土器片はいずれも 小破片のため、全体の器形をうかがうことができるようなものは無かった。

次に、実測図をのせた土器・木製品について記述する。個々の遺物に関しては観察表にゆずり、ここでは概観のみを記す。

第2節 土 器

縄文土器から近世、近代の陶磁器に至るまで出土しているが、その主体は古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良・平安時代の土師器・須恵器である。このうち古墳時代初頭のものは微高地上の遺構に伴うものであり、古墳時代後期~平安時代のものは旧大谷川内の堆積土中より出土したものである。又、量的には前者に比して後者が圧倒的に多い。

古墳時代初頭の土器

第29図の土器がこれに当たる。これらの土器はSD15溝状遺構の覆土中から一括出土したものであり、壺・甕・高坏・坩・土錘等の器種を持つ。このうち壺1~6は複合口縁のものと、折り返し口縁を持つものがあり、口縁部に2条あるいは4条の沈線文、凸帯文が施されているものや口縁部内面に斜行縄文、擬縄文、竹管による刺突文が施されているものがある。又、4の壺は頸部で破損しているが、割れた部

位にそって2ヶ所焼成後穿孔されており、破損した後、修理したと考えられる。 \mathfrak{Z} ($7 \sim 10$ 、14、15) はS字状の口縁を持つ台付甕が主体となっている。

高坏(12、13)は、脚部のみ残存しているものだが、小型で、脚部がなだらかに開いている。また透かしのみられるものもある。

小型壺16)は頸部より上が欠損しているが、平底で、その胴部は丸くなっている。

坩(17)は、体部と口縁部の境がくの字状にくびれ、口縁部が外向しており、最大径が口縁部にあるものである。

土錘(18)は、幅4cm、長さ4cmの太くて短いものである。

西大谷地区旧大谷川出土の須恵器・灰釉陶器・山茶埦

第30図の土器がこれに当たる。

須恵器は、その器種として坏・蓋・高坏・鉢・ 腺があげられる。

19~22は須恵器の坏身であるが、蓋受けを持つものと持たないものがある。蓋受けを有するものの中にも、その立ち上りが高く、更に口縁端部が段を有し内傾するものから、蓋受けの立ち上りが低くさらに内向しているものもみられる。24の坏蓋は体部に稜を有し口縁端部は丸くなる。25は壺の蓋である。

高坏は、長脚二段透かしのもの(26・30)と無蓋のもの(第27図)である。26は上段に切り込み状の透かしを二方向に、下段に長方形の透かしを三方向に持つ。30は坏部と脚部の極く一部が残存するのみである。坏部は蓋受けの立ち上がりが内傾し口縁端部が丸く仕上げられている。また、脚部は上段に長方形の透かしを二方向に持ち、長脚二段透かしとなる。27は体部に明確な稜を持ち、口縁部は極くゆるく内湾する。

碌(28)は、胴部が球形を呈しており、やや胴上部に穿孔がみられる。口頸部には櫛描波状文が施されている。

灰釉陶器はその器種として、焼・皿・手付小瓶があげられる。焼(32)は、角高台を有し、体部にや や丸味を持っており、皿(31)は、角高台であり、わずかに屈曲する体部を持つ。両者とも、内面に釉 がみられる。手付小瓶(33)は、底部に糸切り痕がみられる。

山茶 埦(23) は、高台が比較的高くその断面は三角形を呈しており、体部には若干丸味を持っている。 西大谷地区旧大谷川出土の古墳時代後期、奈良・平安時代の土師器

第31図・第32図39~61がこれにあたる。器種としては、坏・鉢・高坏・壺・器台・甕・甑があげられる。 坏は、その内容として、器高が低く口縁部は内湾し、内外面にヘラみがきを施してあるものや (39) 深めで口縁部が内湾もしくは直立するもの (42~44)、また、口縁部と体部の境に稜をもつもの (40・ 41) 体部が外向してそのまま口縁部に至るもの(46)等があげられる。底部に木葉痕を残すものが多い。 45・60は小形壺であるが、体部は丸味をおび、そして、口縁部と体部の境に稜をなしている。 鉢(47・48) は、双方とも平底で、口縁部は内湾する。

器台 (52) は、坏部、脚部とも直線的に開く器形であり、坏部内面および坏部下部から脚部上部にかけてヘラみがきがみられる。

 $49\sim51$ 、 $53\sim58$ が壺であるが、その形態は多様である。49は丸底で胴部が球形をなし頸部がくびれ、口頸部が直線的に開く器形のものである。50、51は平底で、胴部はやや丸味をおび、頸部がゆるくくびれている。50の胴部外面にはハケ目が残り、作りは粗雑である。51の胴下部にはヘラけずりがみられる。 $53\sim57$ は小型の壺である。 $53\sim56$ は、胴部が丸味をおび、頸部がゆるやかにくびれる器形である。器壁は厚く、胴部外面にヘラ削りが施されている。 $53\cdot54\cdot55$ には頸部に2ケ所の穿孔がある。57は平底で、体部がほぼ直立して口縁部に至る器形である。58は大型壺で、平底であり、胴部は球形を呈している。

墾(59)は、頸部がくの字状にくびれ、胴部が丸味をおびている。甑は把手を有するもので、その体部は直線的に開き、口縁部に至る。

ここにあげた土師器は、ほとんどが古墳時代の鬼高式土器の系統のもので、須恵器の年代観に対応する。

宮川 2 区出土の土器

第32図62~71がこれにあたる。62~66が土師器で、67~71が須恵器である。

土師器の坏(62~66)は、口縁部が内湾しているものと、口縁部と体部の境にゆるやかな稜を持つものがある。前者は内面にヘラみがきが施してある。また、両者とも器高の低いものから高いものまでみられる。

須恵器には、坏・蓋・短頸壺、平瓶がみられる。

蓋(67)は、体部に稜を有する深いもので、口唇部内面をヘラ切りしている。

坏(68・69)には蓋受けが付いているが、その立ち上りは低く、内向している。

短頸壺(70)は丸味のある胴部に、直立する口頸部が付くものである。

平瓶 (71) は、胴部がやや丸くて肩部が張り、口頸部は直線的に立ちあがるものである。 宮川 2 区からはこのように、6 世紀前半から7 世紀前半に限定される土器が出土している。

実測土器年代観一覧表

		須 恵 器 • 灰	釉 陶 器	土 師 器
	4世紀			1 • 2 • 3 • 4 • 5 • 6 • 7 • 8 • 9 • 10 • 11 • 12 • 13 • 14 • 15 • 16 • 17 • 18
古墳時代	5世紀末	19		
	6世紀前半	28		39 • 40 • 41 • 42 • 43 • 44 • 45 • 46 • 47 • 48 • 49 • 50 • 51 • 52 • 53 • 54 •
	6世紀後半	67 • 69		55 • 56 • 57 • 58 • 59 • 60 • 61 • 62 • 63 • 64 • 65 • 66
	7世紀前半	20 • 24 • 26 • 30 • 35	68 • 70 • 71	
	7世紀後半	27 • 36		
奈良時代		21 • 22		
平安時代	9 世紀	37	2 • 9	
丁 夕 时 八	10世紀	31 • 32 • 33	2 - 5	
鎌倉時代		23		

第3節 木 製 品

木製品に関しては西大谷地区・宮川 2 区の旧大谷川内より出土した遺物の中から典型的な祭祀遺物である人形・馬形・斎串のみ取り上げた。又、これも現在整理中であるので58年度の調査で出土したもののすべてではない。

人形 薄板を切り欠いて人間の形を表現したものが人形である。神明原・元宮川遺跡ではこの人形が 6世紀~平安時代の遺物に伴って23個体以上出土している。これらの人形はいくつかに類型化できる。

- ① 薄板の一端を切り欠いて圭頭状の頭頂部を作り、両側辺を上下よりほぼ同角度で切り欠いて頭部・ 頸部・肩部を作り出す。足は下端部より三角形に切り欠いて作り出す。 (第33図 - 5001)
- ② ①とほぼ同様の作りだが、肩部が水平な切り込みにより作り出されており怒り肩となることと、腕が深い切り込みにより表現されている。 (第36図 602)
- ③ ②とほぼ同様であるが腕が浅い切り欠きにより表現されている点が異なる。足は破損しており不明 (第34図-5011)
- ④ 頭部以下は②とほぼ同様であるが頭部は丸みをおびている。(第33図 5005)
- ⑤ 頭部~頸部にかけては①と同様の作りであるが腰部が両側辺上下よりほぼ同角度で切り欠いて表現されている。(第33図 5003)

- ⑥ ⑤に類似するが頸部、腰部の切り欠きが上からはほぼ水平、下からは鋭角に切り欠かれている。 (第34図 - 5008)
- ⑦ 極く小型 (10cm以下) の人形である。頭頂部はほぼ平坦となり頸部は両側辺より上からは鋭角・下からはほぼ水平に切り欠き、腰部は上からはほぼ水平に下からは鋭角に切り欠いている。この腰部の切り欠きは下端からの切り欠きとともに足の形成も兼ねていると考えられる。
- ⑧ 全体の作りは①にほぼ類似するが頭頂部は平坦である点、顔の表現が浅い彫り込みによりなされている。 (第33 \boxtimes 5006)
- ⑨ やや幅広の薄板を加工し、①と同様の頭部を作り出すが、腰部・脚部は表現されず、下端は串状となる。手は浅い切り込みにより表現される。(第35図-5013・5014)
- ⑩ ⑨と類似するが幅が⑨ほど広くなく、又肩が怒り肩となる。(第36図─603)

馬形

西大谷1・2区、宮川2区双方から馬形が出土している。

馬形木製品は人形同様、薄板を切り欠いて馬の形を作り出したものであり、裸馬と、鞍を作り出した 飾り馬があるという。又、墨書により目などが描かれているものもある。今年度調査で出土したものに は明確に鞍を作り出したものや、墨書のあるものは無かったが、多様な形態のものが含まれていた。出 土した馬形の形態を分類すると以下のようになる。

- ①細長い板の両端を上辺より切り落し台形状にし、上辺に浅い台形状の切り欠きを行い背部を作り、下辺より2ヶ所切り欠いて頭部、腹部、尾部を作り出したもの(第38図-5100)
- ②細長い板の一端を上へ広がるように切り落し、他端を端部が一部残るように下へ広がるように切り落す。そして、後者の端部に近い下辺に近接して2ヶ所の切り欠きを行い、もう一端に近い下辺にさらに一ケ所、計3ヶ所の切り欠きを行っている。他遺跡での出土例では、近接した2ヶ所の切り欠きのうち端部に近い方の上へ目を墨書しているものがあるので、この切り欠きは口を表現していると考えて良いであろう。(第38図-5102)
- ③半月形の板の弧の中央部に切り欠きを入れたもの(第39図-5107)
- ④半月形の板の弧と弦の両方に浅く切り欠きを行ったもの (第39図 5109)
- ⑤平行四辺形の板の上辺に浅い切り欠きをしたもの。
- ⑥⑤の加工に加え、下辺に2ケ所切り欠きを入れたもの。

これら、馬形木製品の多くには下辺の腹部に当る部分に切り込みがあり、この部分に棒を刺してこれを地面に突き立てたと考えられていたが、第38図の5100の馬形木製品は串状の棒が刺った状態のまま出土し、従来の説をうらづけた。又、5106の馬形木製品に密着して5106の串が出土しており、セット関係を形成する可能性がある。

斎 串

祭祀に用いられたと考えられる『細長い薄板の両端を削って尖らした串状の木製品』が斎串と呼ばれるものである。その初現は現在のところ6世紀中頃と考えられているが、用途などはまだ十分解明されていない。今回の調査では6世紀後半~7世紀にかけての土器を伴って90個体以上が出土している。

一般的な斎串は上端を圭頭状に作り、下端を両側から鋭く尖らせ、上部両側辺に切り掛けを施している。 大谷川ではこの形の斎串も多数出土しているが、その他多くの形態のものが出土している。 これらはい くつかの類型に分類できる。

- ①両端が圭頭状となるもの
- ②両端が-側辺から切り落され平行四辺形を呈するもの
- ③両端が-側辺から切り落され台形状を呈するもの
- ④ はし状の形態を持つもの
- ⑤一端が一側辺から切り落され、他端は両側辺から切り落されたもの
- ⑥小形の斎串で舟形を呈するもの

これらの形態状の類型の中でさらに切り掛けの有無・数・部位等により細分が可能である。

第4節 木 簡

木簡は一点だけ出土している。他に文字資料としては、墨書土器が五点出土しているので、今後の調 〔於〕 査による資料の増加が期待される。墨書土器には「+」「+」という数字を表わしたものの他、「有□ 之」「田人」という文字が書かれたものがある。詳しいことは機会をあらためて招介したい。

第1号木簡(図版61)

〔部〕 「他田里戸主宇刀マ真酒」 830719、N1240 長 11.05×巾 1.7×厚 0.45 cm

西大谷 2 区 E 43 - 14 グリットの、旧大谷川流路内砂礫層から出土した。この地点での、土層と遺物の 堆積状態は、古墳時代後期~奈良・平安時代のものが混在する場所であり、伴出遺物から木簡の年代を特 定できる状態ではなかった。

本簡の形態は、長さ 11.05~cm、巾 1.7~cm、厚さ 0.45~cmと長方形の薄板である。上端は角形、下端を串状にしているが、尖端を切り落している。側面から裏面にかけて、長軸と直角方向の刃痕による線が三本みられる。側面にはさらに、上から 2~a 本目と 3~a 本目の中間にもう一本線があり、合計 4~a となっている。裏面におけるそれぞれの間隔は、上から 2~a 22.1 2~a 22.1 2~a 25.6 2~a 26.6 2~a 27.1 2~a 28.6 2~a 29.5 2~a 20.1 2~a 29.5 2~a 20.1 2~a 20.1 2~a 20.1 2~a 20.2 a 20.2

側縁では、裏面と対応する3本の線以外に©の中間にもう一本線があり、上から15.8 mm下から15.5 mmと、ほぼ均等に割りつけてある。

以上のようにこの線は、物指の目盛のようにもみえるが間隔が不定であるため速断できない。いずれ にしても、この木簡の材料は、他の用途に使用したものを、木簡として再利用したものとみられる。材 質はおそらく檜で板目板の木表に墨書されている。表面は丁寧に削り面調整している。

完形品であるが、上端から五文字目まで割れ目が走り、下端部で文字に影響の無い部分の一部が剥離 している。 暴痕は一部不鮮明なところもあるが、比較的はっきり残っており判読に不安はない。

文字については、「他」の字の人偏の部分が割れ目段差の高い方にあたりやや不明瞭である。しかし

人偏を省略し縦1本にして次の旁へ連続させた書き方をしていると解釈することもできる。これは酒の字の「i」でも同様であろう。さらに田や里・主の字の土の部分のくずし方などいずれにしても草書風といえるだろう。また田・宇・刀・マ・酒の文字のように「肩の丸い柔軟な筆使いがみられ、特に田は撫肩の□構えに近い書き方であり、六朝風の影響そのものとはいえないまでも流れをうけているといえる。藤原宮木簡の書風(文献41)との関連が考えられる。

文字は全部で10文字あるが、字間=配字に次のような特徴がみられる。

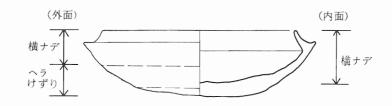
- ① 「他田里」の3文字は、センターやや右寄りに縦につながるように揃っており、字間は少し離れ、独立した文字として書かれている。しかし一文字ずつの書き方は丁寧ではなく小さく団塊となっている。
 - ② 「戸主」は戸の構えの中に主が入ってしまい、あたかも一文字のように書かれている。
 - ③ 「宇刀マ」の文字は、全部接しており、連続した文字で読みづらい文字である。
 - ④ 「真酒」の文字は、この中で一番大きくしかもはっきりと読みとれる文字である。

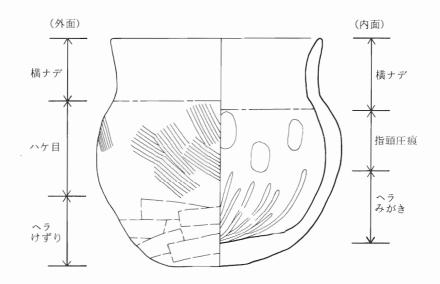
以上4つのグループに分類されるが、さらにグループ毎の字間は離れており、書き方の特徴などから、この一つずつのグループが『単位』として意識されて書かれていることがうかがえる。また他田、戸主、字刀マの文字は字体も団塊状となりくずした字で小さく書かれているのに対し、「真酒」の文字だけが大きく鮮明に書かれている。このことから、前者はおたがいに判っていることであるという感覚で手軽に書かれた文字といえる。そこでこの木簡は真酒という名前の項目をはっきりと識別する必要のある段階で書かれたのではないかと推定される。

次にこの木簡の用途・性格について考えてみる。下端部が尖り、空白部分があることから何かに差し込んで使ったものともみられる。用例としては品名が書かれていれば貢進物付札となるのだが行政末端では品名のない付札をつけることが一般的であるかどうか例を知らないので何とも言えない。今後の検討に待つ。

本簡の年代については、前記のように伴出遺物からは確定できないが、書かれた内容から検討すると「他田郷」ではなく「他田里」とあることから715年の郷里制施行以前とされる。「戸主」という書き方がでてくるのは701年の大宝律令施行以後とされるので701年から714年の間に限定されるだろう。10世紀前半に成立した「倭名類聚抄」によれば、当時の駿河国有度郡に内屋(ウツノヤ)、間壁(マカベ)、他田(ヲサダ)、新居(ニヒイ)、託美(タクミ)、嘗見(ナメミ)、會星(アフホシ)、七郷がありその一つの他田に該当する。「戸主」である「宇刀マ真酒」という人名が書かれているが、「宇刀マ」は「宇刀部」であり、「日本書記」大化二年三月幸巳条(646年)には「蒐礦人」とみえ、天平十年(738年)「駿河国正税帳」にみられる「有度部黒背」(駿河国安部軍団少毅)や、「万葉集」巻廿4337にみえる「有度部牛麿呂」(駿河国上丁・防人)、また平城宮出土の木簡には「駿河国有度郡嘗見□□□君□□忍万呂有刀部古万呂調堅魚十一斥十両」とあり(寧楽遺文下巻・『平城宮木簡』 ——解説昭和44年)、有度の用字の例がふえた。

器 土





木 製 品

樹種 S=針葉樹

K=広葉樹

木取 A=征目板 B=板目板 $C_1=$ 丸材 $C_2=$ 角材 $C_3=$ 三角











備考 古=古墳時代

奈=奈良時代

平=平安時代 (混在するものは併せて記入)

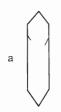
斎 串 切り込み

切り欠き

a = 側辺に切り掛けをもつもの

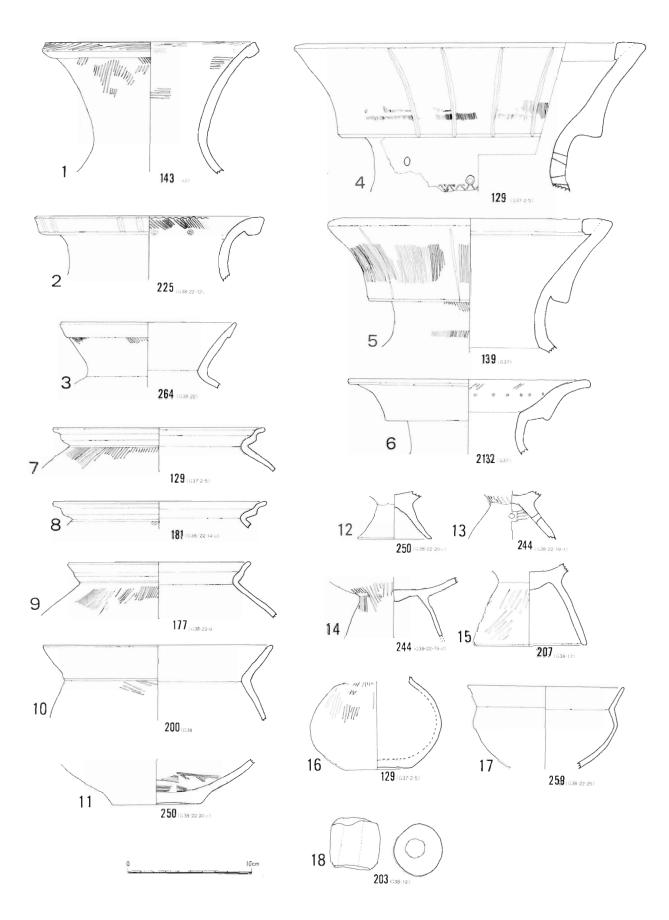
(今回の報告にはみられない)

b=上端に切り掛けをもつもの

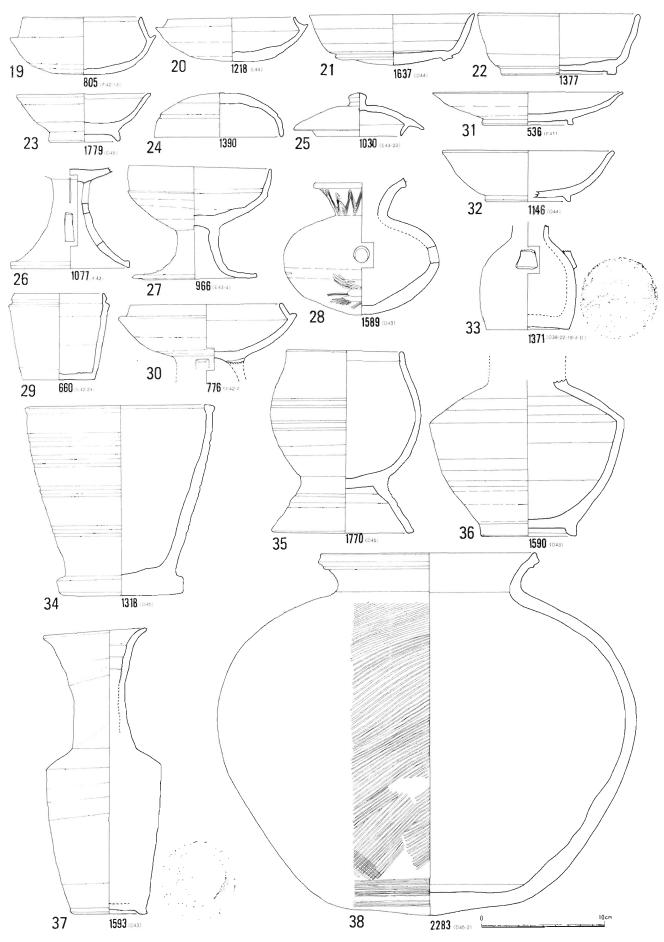




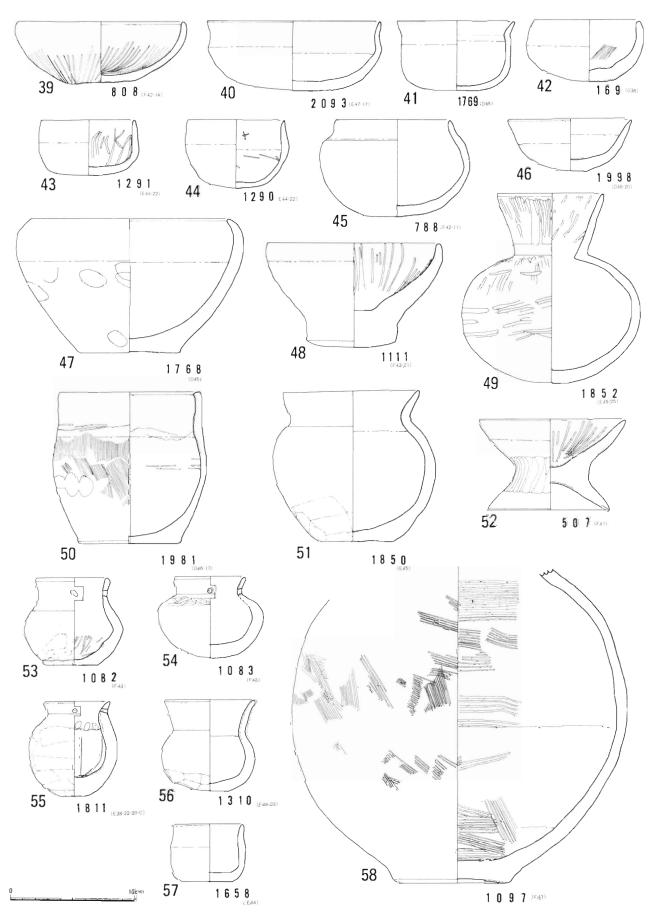




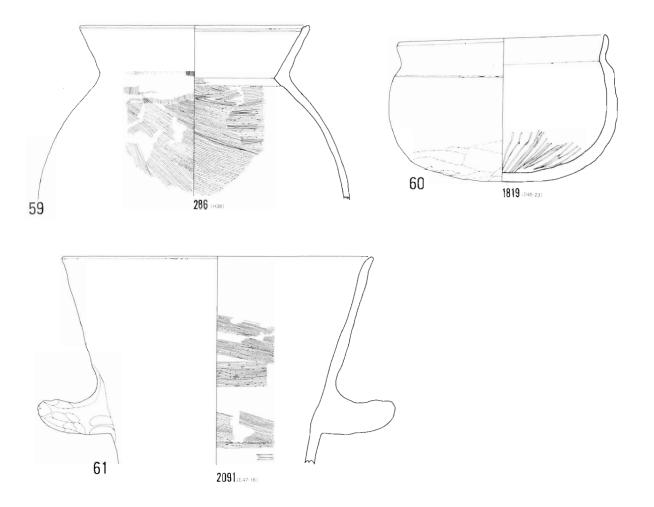
第29図 土器実測図1 S D15埋土上層一括出土土器



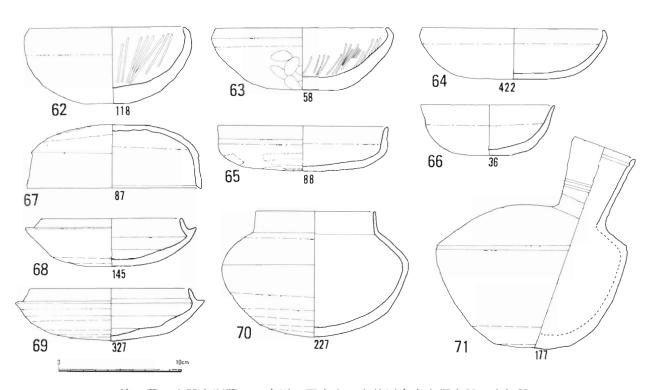
第30図 土器実測図 2 西大谷地区旧大谷川内出土須恵器



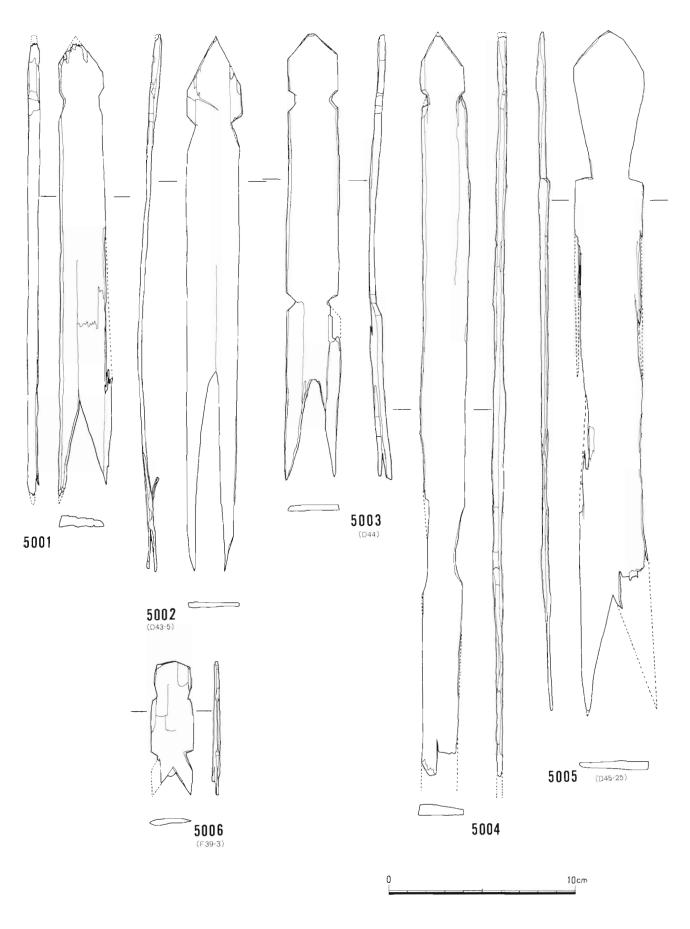
第31図 土器実測図3 西大谷地区旧大谷川内出土土師器



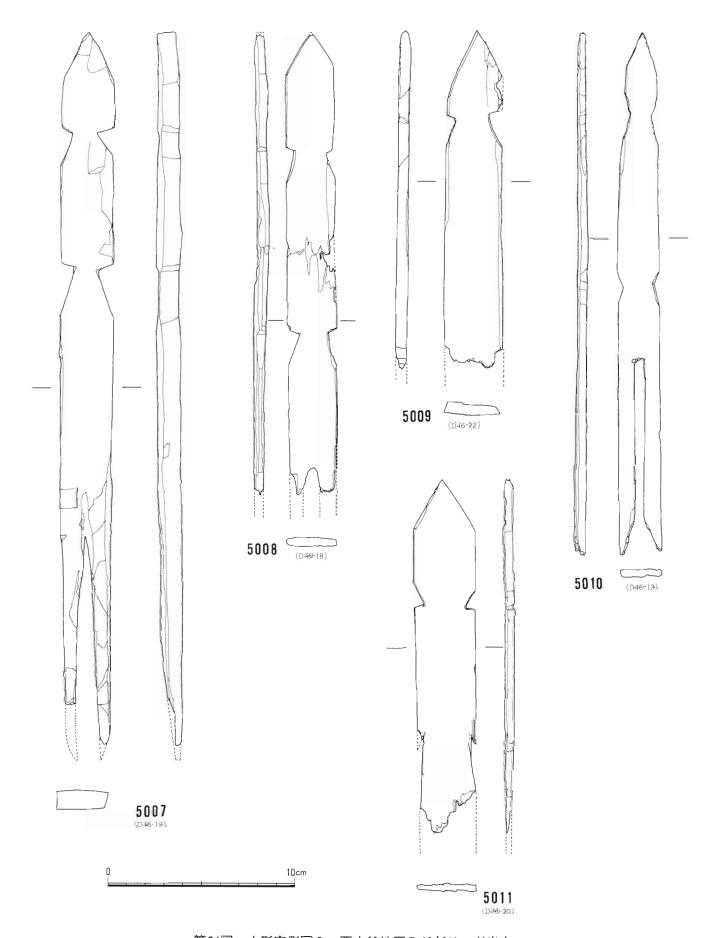
西大谷地区旧大谷川内出土土師器



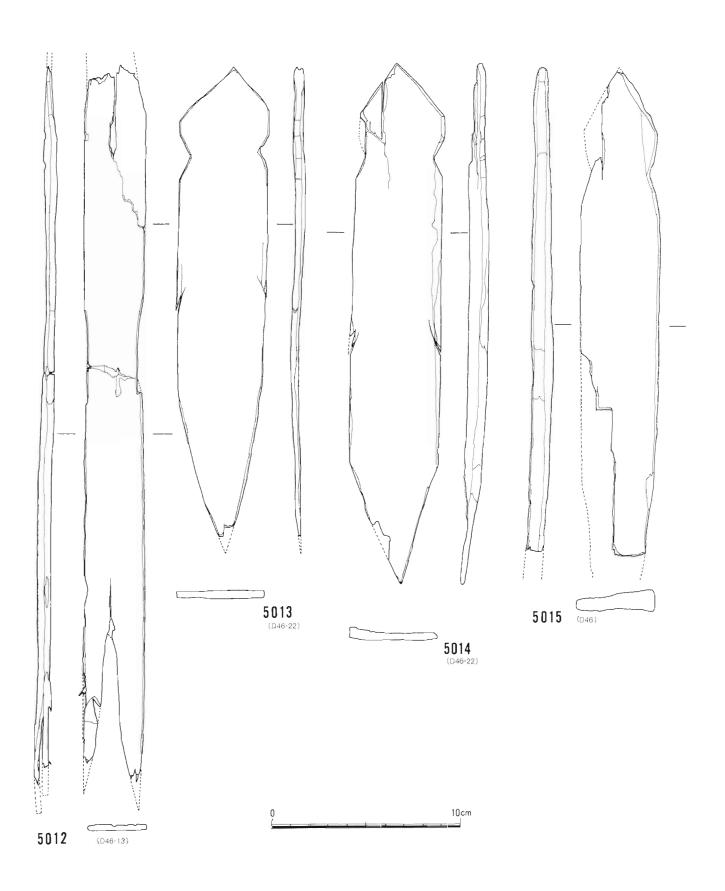
第32図 土器実測図 4 宮川 2 区出土旧大谷川内出土須恵器・土師器



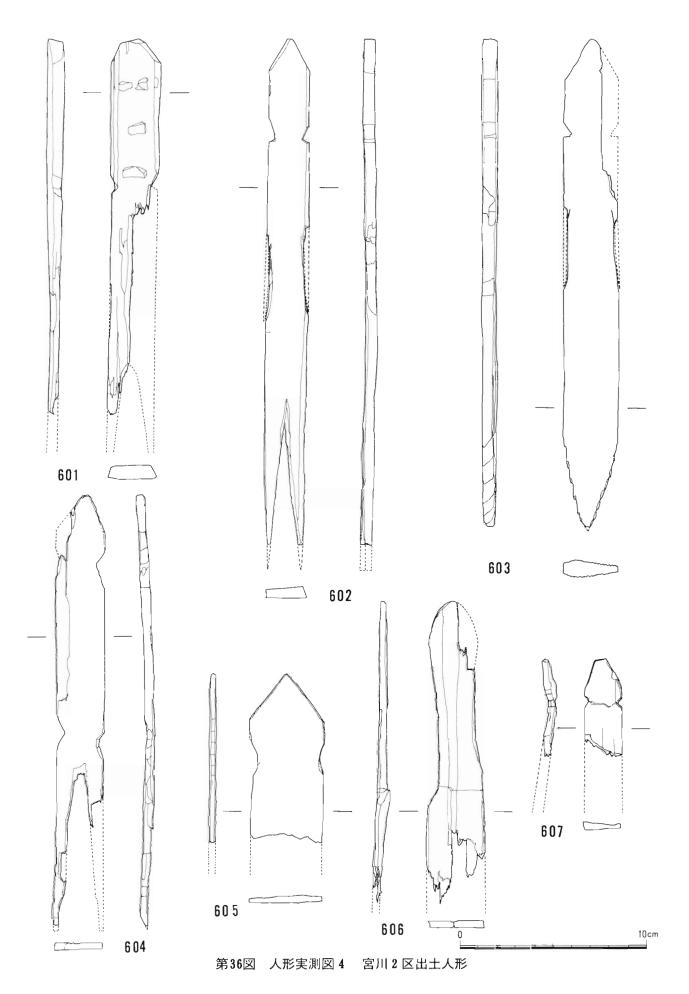
第33図 人形実測図1 西大谷地区 F39・D43~D45グリッド出土

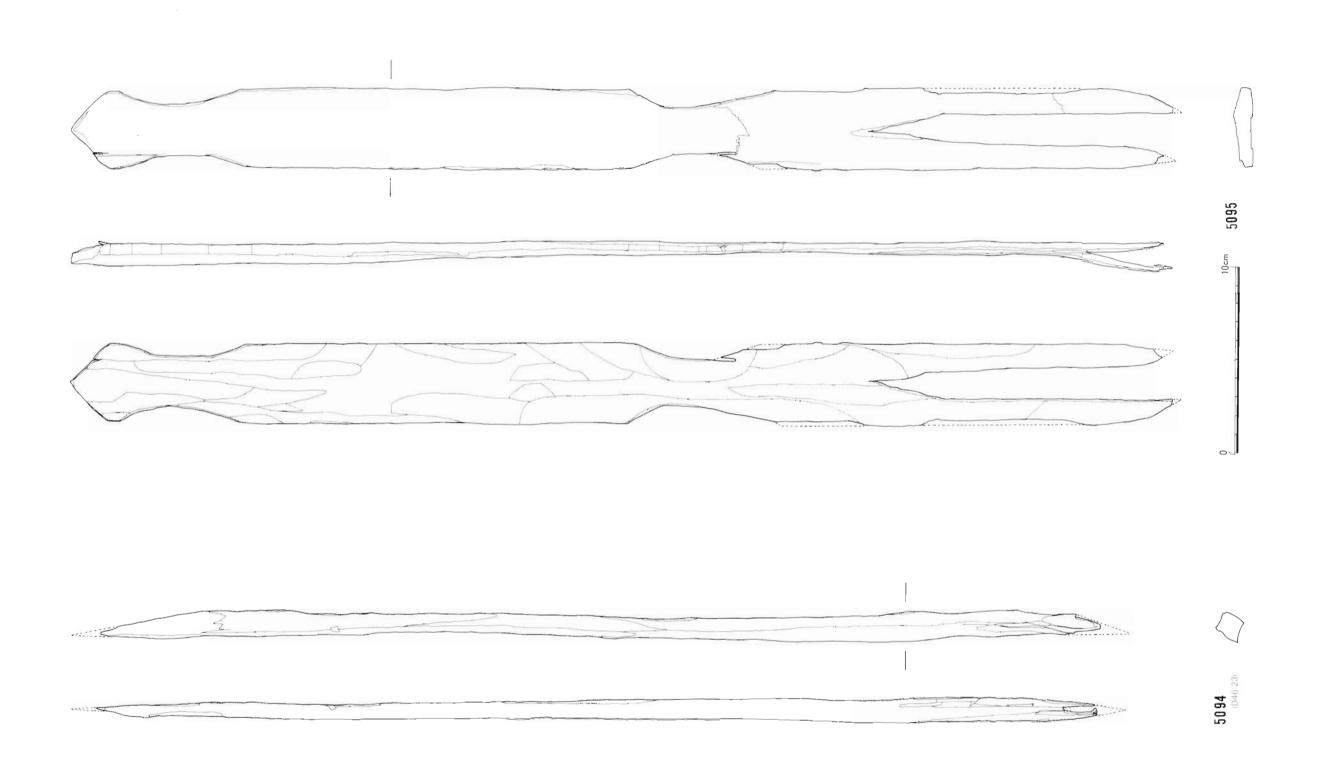


第34図 人形実測図2 西大谷地区 D46グリッド出土

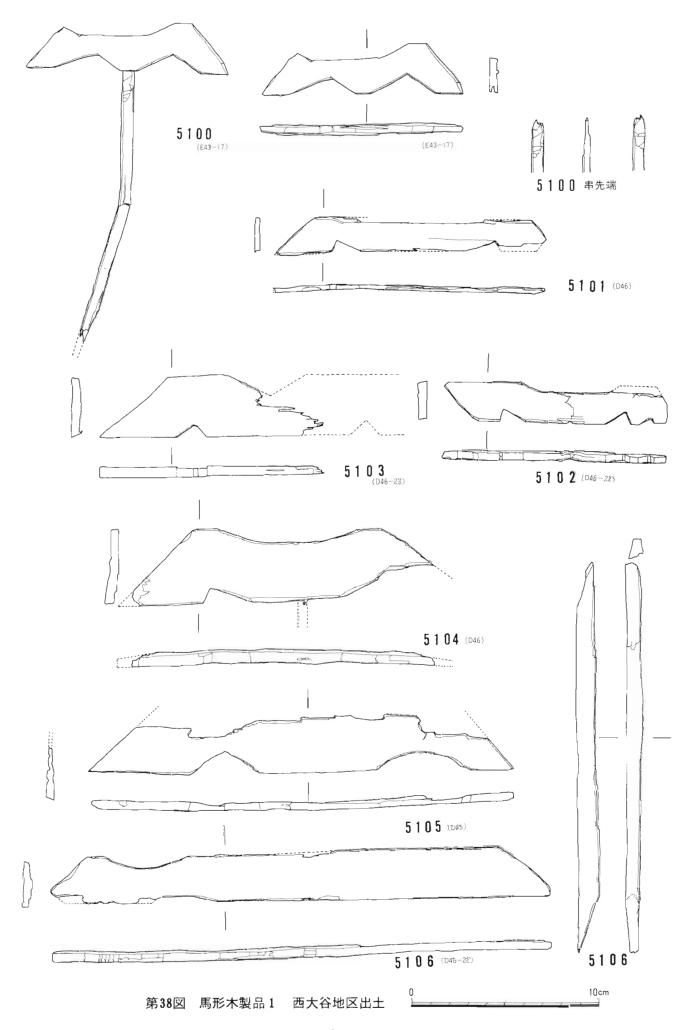


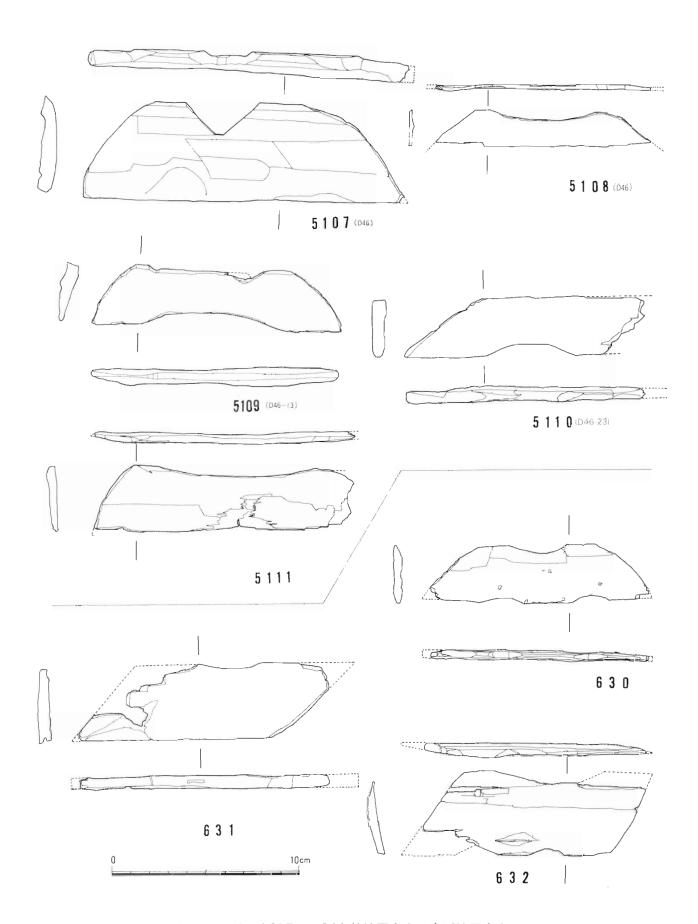
第35図 人形実測図3 西大谷地区D46グリッド出土



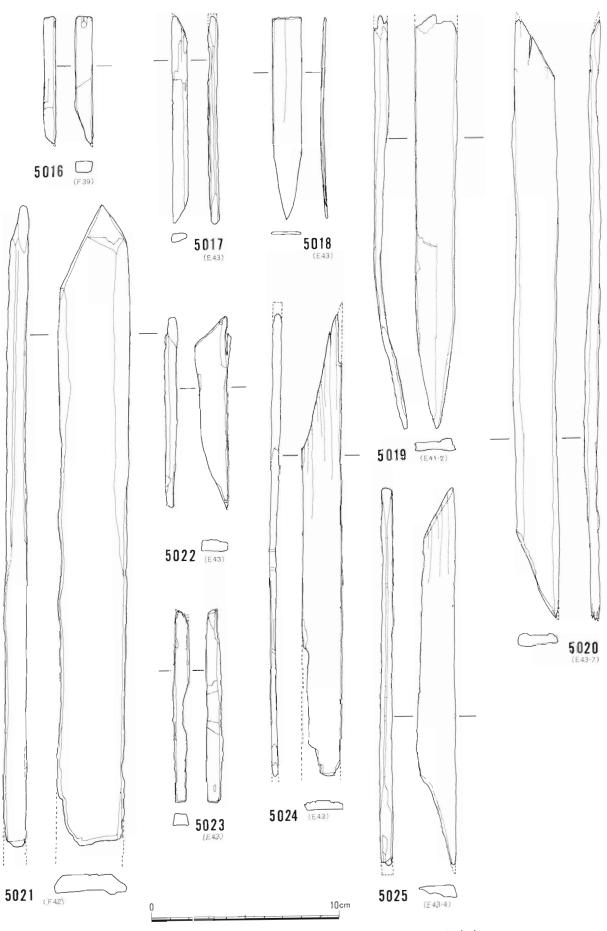


第37図 西大谷地区出土大形人形 • 斎串実測図

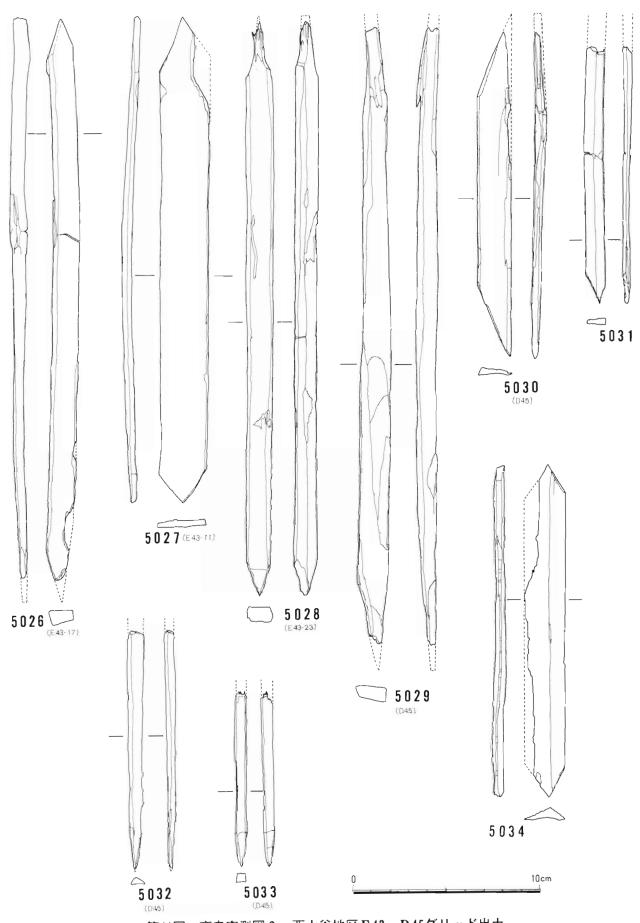




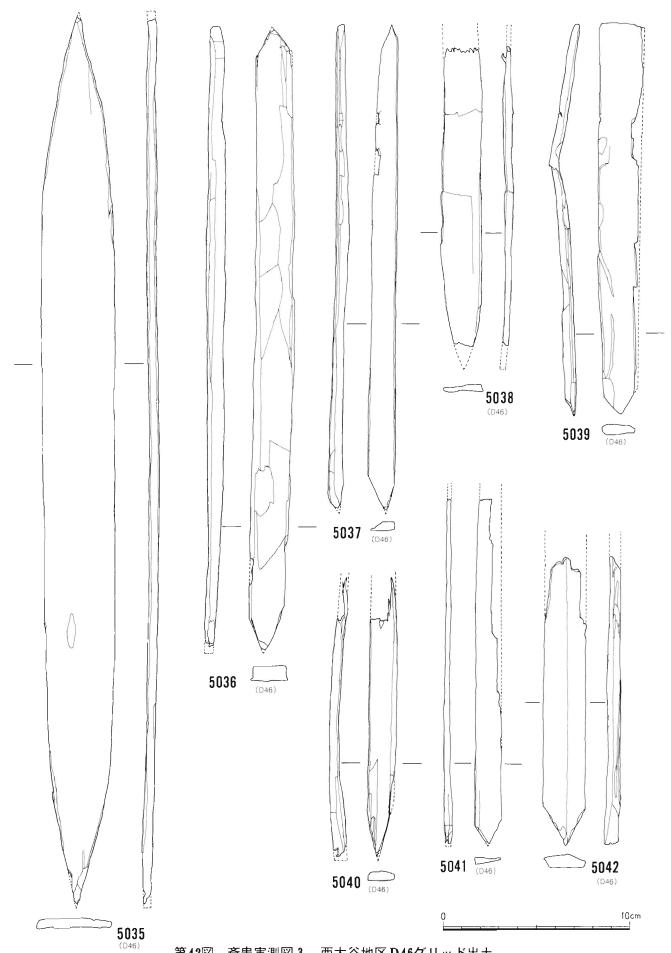
第39図 馬形木製品 2 西大谷地区出土、宮川地区出土



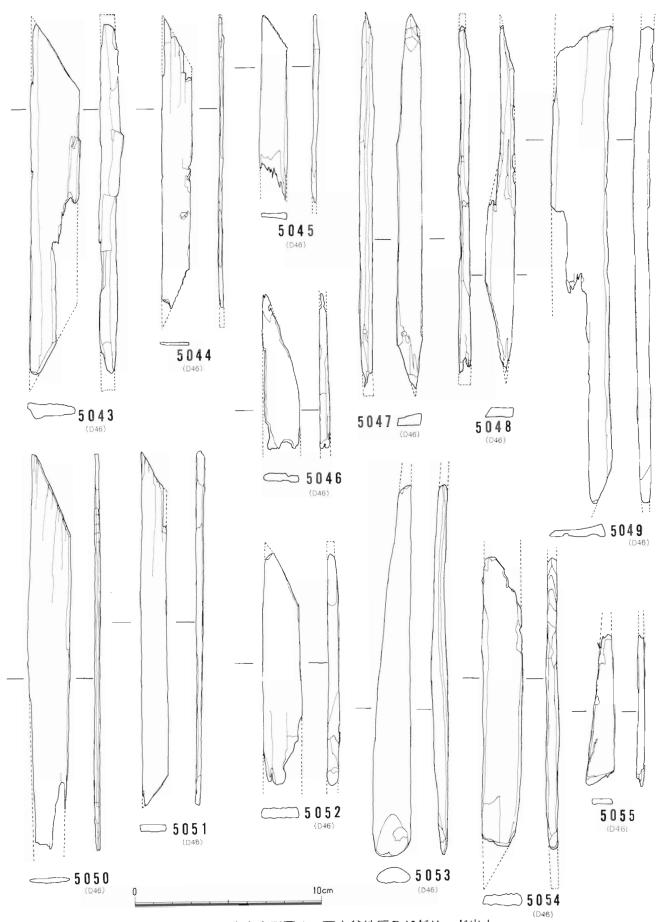
第40図 斎串実測図1 西大谷地区F39~E43グリッド出土



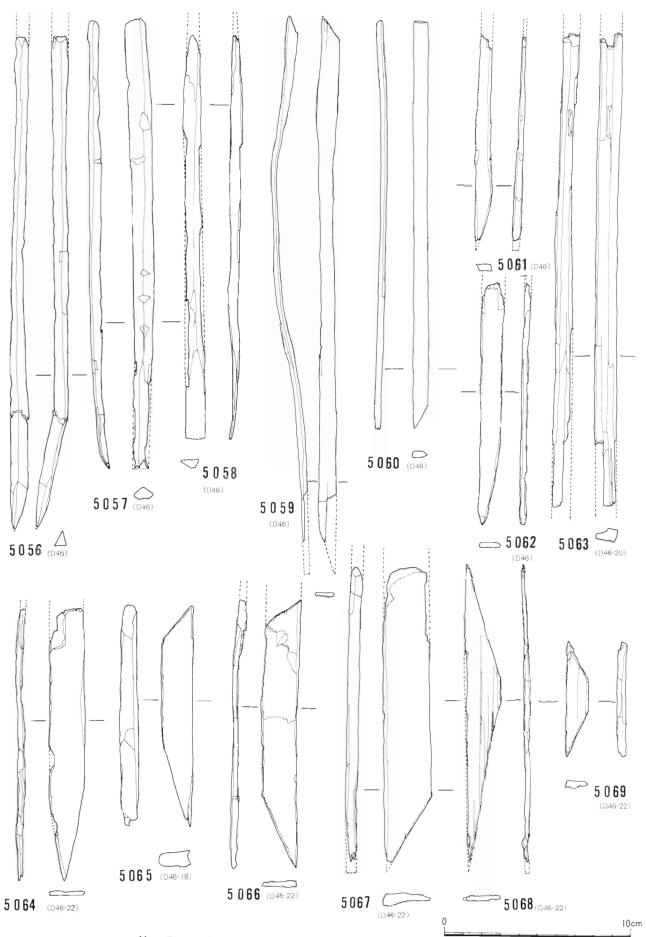
第41図 斎串実測図 2 西大谷地区 E43~ D45グリッド出土



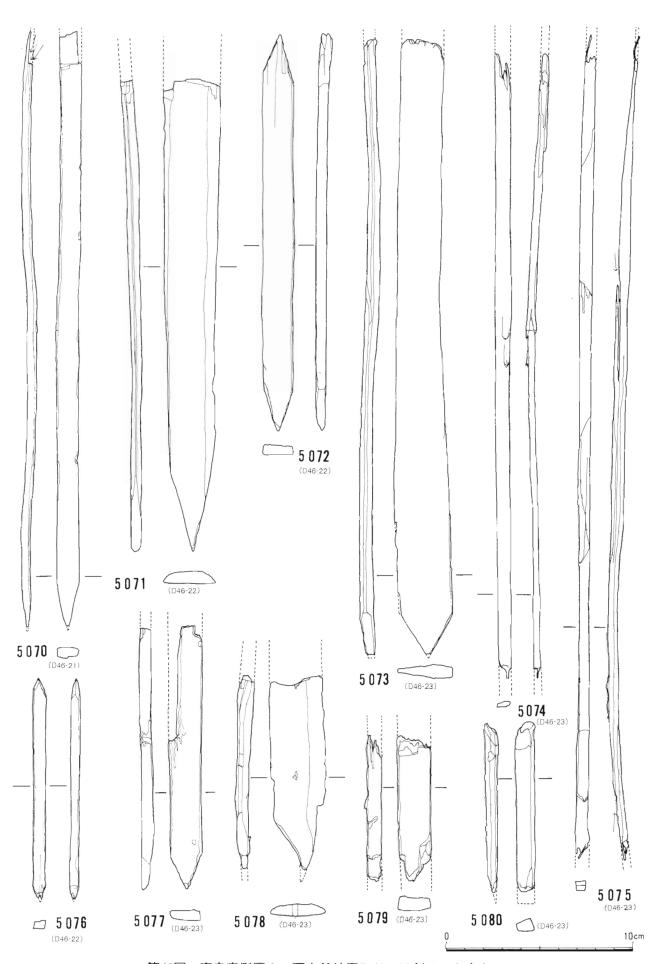
西大谷地区 D46グリッド出土 第42図 斎串実測図3



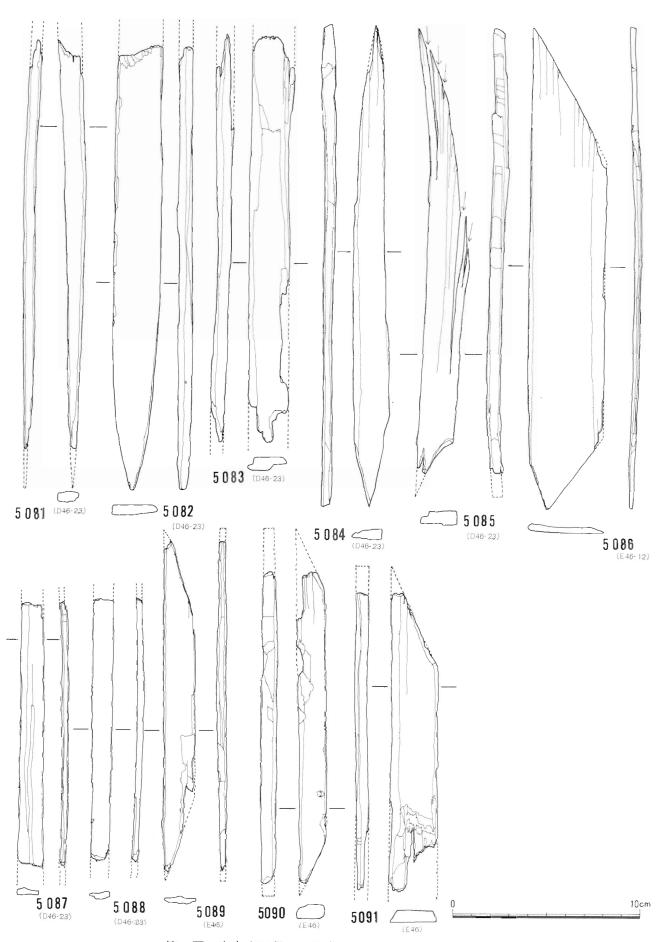
第43図 斎串実測図4 西大谷地区D46グリッド出土



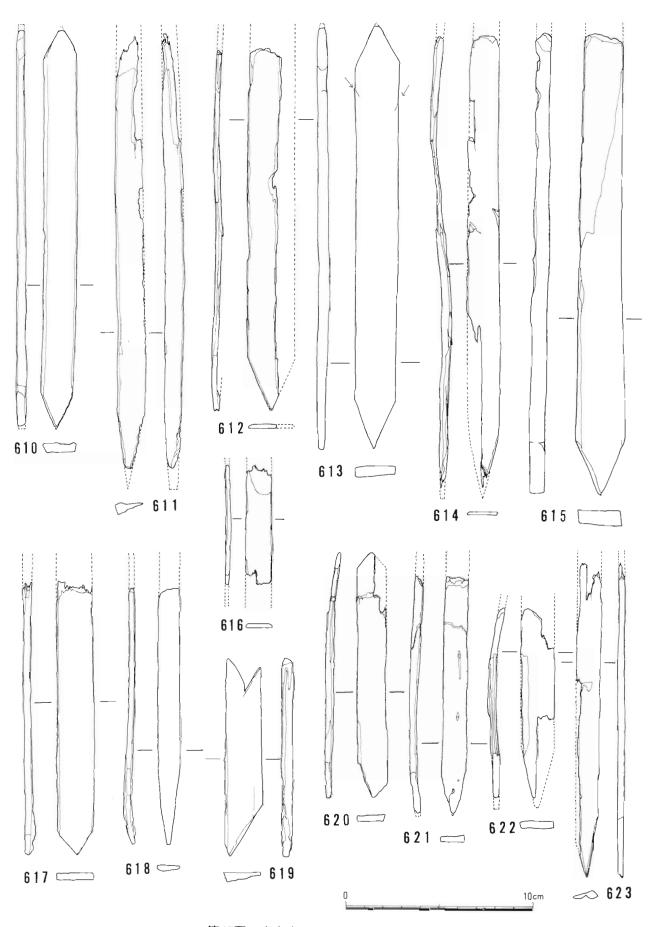
第44図 斎串実測図 5 西大谷地区 D46-22グリッド出土



第45図 斎串実測図 6 西大谷地区 D 46-23グリッド出土



第46図 斎串実測図7 西大谷地区 E 46グリッド出土



第47図 斎串実測図8 宮川2区出土

土器観察表

No.	遺物番号器 種	グリッド	計測値(cm) () は 推 定 値	形態の特徴	手 法 の 特 黴	色 胎 土	調	備考
1	143 土 師 器 壺	G 37	口 径 (17.6)	口径部%を欠く。胴部より下は欠損している。 頸部はゆるやかにくびれ口頸部は外反しながら開く。口縁部は外面に折り返され肥厚している。	内面の口頸部上半部にハ	胎土	明径4 礫 1.5 福への含好 を 1.5 を 1.5 e 1.5	
2	225 土 師 器 壺	G 38—22 —12	口 径 (18.6)		口縁部内面には結節縄文が施され、その下部に竹管による刺突がみられる。	胎土	淡褐色 径 1 mm程 の砂粒。 雲母・長 石を含む。 良好	
3	264 土 師 器 壺	G 38—22 —19、20、 24、25	口 径 (21.4)		口縁部外面の折り返し部 分の下にハケ目が残存し ている。他は表面摩耗の ため不明瞭。		淡径程をむれる。 茶1.5砂く赤を の多。子。 がなき色含	
4	129 土 師 器 壺	G37—2 —5	口 径 (28.3)	幅の広い複合口縁である。 口唇部が内面に折り返さ	頸部には結節縄文が施さ れる。		淡径程がら雲か良 掲1の多れ母。 好の多れ母。 好	
5	139 土 師 器 壺	G 37	口 径 (23)	口縁部%欠損。 複合口縁であり、広い。 そこに縦位の沈線がみら れる。口端は内側に肥厚 しており、上面、内面は 平らになっている。	縄文が頸部の下位にみら		暗赤褐色 径1 mmを 多く含む。 多雲母 む。 良好	
6	2132 土 師 器 壺	G 37	口 径 (19.5)	□頸部のみ残存。 複合□縁である。□縁は 大きく外反する。	口縁部内面には擬似縄文 が施文され、その下に連 続する竹管が施されてい る。	l	淡径下をむをい良る畑砂く雲ん。 含る好)

図	遺物番号		計測值(cm)	TV 45 O Ht 46	手 法 の 特 徴	色	語	備考
No.	器種	グリッド	() は 推 定 値	形態の特徴	手法の特徴	胎士	• 焼成	洲石
7	129 土 師 器 変	G 37— 2 — 5	口 径 (17.1)	口縁部約%残存。 S字状口縁を有する。	胴部に粗い、ハケ目が施される。 口縁部外面は横ナデ。 他は表面摩耗のため不明 瞭。	色調胎土焼成	淡茶の.5 mm 程のかむ。 を含英を含む。 良好	
8	181 土 師 器 甕	G 38—22 —14 a	口 径(17.3)	口縁部約%残存。 S字状口縁を有す。	胴部には粗いハケ目がみられる。 他は表面摩耗のため不明瞭。	胎土	灰白色 色 の の を を る の の を き る の を き き も り と り た り た り た り た り た り た り た り た り た	
9	177 土 師 器 變	G 38-22 - 9	口 径 (14.8)	口縁部~胴上部¼残存。 やや崩れたS字状口縁を 有する。 頸部は「く」の字状に屈 折し口頸部は外反する。	外側口縁部は横ナデ。 胴部には粗いハケ目がみられる。	色調胎土焼成	明 径 0.5 m 程 の 5 を	
10	200 土 師 器 蹇	G 38	口 径 (18.6)	口縁部光残存。 頸部はゆるく「く」の字 状にくびれ、口頸部は直 線的に開く。	外面にハケ目がみられ、 内面の頸部より下にはヘ ラけずりがみられる。	色調胎土焼成	淡内よ淡径の含良赤面り灰40.0砂む好も頭下色㎜5粒。~㎜を	
11	250 土 師 器 壺	G 38—22 —20 c		底部のみ残存。 平底を呈する。 底部から胴部に向かって 大きく開く。	内面に細かいハケ目が施 されている。		淡褐色 径2㎜以 下の砂く含 む。 良好	
12	250 土 師 器 高坏	G 38—22 —20 c	底 径 (5.9)	脚部のみ残存(下半部は ½欠損)。 脚部はゆるく外反して開 いている。	表面摩耗のため不明瞭。	色調胎土焼成	明淡褐色 径1 mm以 下の砂粒 雲母を含 む。 良好	
13	244 土 師 器 高坏	G 38—22 —19 d		脚部のみ¼残存。 円形のすかしがみられる	坏部外面と、脚部内面に ハケ目がみられる。 外面、脚部と坏部の接合	色調胎土	明淡褐色 径1 mm以 下の砂粒	

図 No.	遺物番号器 種	グリッド	計測値(cm) ()は推 定 値	形態の特徴	手 法 の 特 徴	色 調 胎 土 • 焼 成	備考
					部に粘土のはみだしがみられる。	雲母を含 む。 焼成 良好	
14	244 台 伊 蹇	G 38—22 —19 d	底 径 (7.8)	甕の底部、台部のみ約½ 残存。 台部は直線的に開いている。 器壁が薄い。	変の底部から台部の上半 部までハケ目がみられる.	色調 明 径 1 mm砂粒 下の含む。 石 母 を る を 多 ま ま な ま と ま と は た と は た と が ま た と は た が は た か ま か ま か ま か ま か ま か ま か ま か ま か ま か	
15	207 土 師 器 台 付 甕	G38-17	底 径 (9)	台部のみ約場残存。 台部は直線的に開いている。 器壁が薄い。	台部外面にハケ目がみられ、台部と甕の接合部に 粘土のつぎ目の痕がみられる。	色調 明褐色 胎土 径3 mm以 下の砂粒 を多く含 む。 焼成 良好	
16	129 土 師 器 小 形 壺	G 37 — 2 — 5	胴部最大 径 10.5 底 径 5.5	頸部より上欠損。 あげ底である。 胴部のほぼ中位に最大径 を持ち、丸味をおびている。	胴上半部にハケ目がみられる。	色調 白褐色 Hh土 谷1 mm程 の砂粒を 多く含む。 黒色粒子・ 赤色母を含 む。 焼成	
17	259 土 師 器 坩	G 38—22 —25	口 径 12.6	□縁部%残存。 体部は内湾して立ちあがり、□縁部との境でゆる くくびれる。 最大径が□径にある。	表面摩耗のため不明。	色調 明 径 3 mmの多 ら で 会 で 会 で で 会 で が 良 好 成 成 成 成 成 成 成 成 の の の の の の の の の の の	
18	203 土 錘	G38—12	長さ 4 幅 4 穴の径 1.5	一部に剥離がみられるが ほぼ完形品。		色調 明 径 4 mm・ を 4 を 2 を 2 を 2 を 2 を 2 を 2 を 2 を 2 を 2	
19	805 須 惠 器 坏	F 42—13	口径 9. 7 最大径 11. 8 器高 4. 6	完形品。 器高と蓋受けの割合は、 3:1位であり、蓋受け の立ちあがりが高く、内 向している。		色調 暗灰色 胎土 径4~2 mmの砂粒 微砂粒を 多く含む。	

⊠ No.	遺物番号 器 種	グリッド	計測値(cm) () は 推 定 値	形態の特徴	手法の特徴	色 胎 土	調• 焼 成	備考
							長石を多 く含む。 良好	
20	1218 須 惠 器 坏	E 44	口径 10.2 最大径 12.3 器高3.5	完形品。 蓋受けは、立ちあがりが ひくく、内向している。 口径に比して器高が低い。		胎土	灰釉は径度微含色石石良色の黄2の砂む粒英を好の砂色程粒を黒・長む。	
21	1637 須 惠 器 坏	D 44	口径 13.2 器高4.1 底径9.6	高台は低く、高台より底部が下につきでている。 体部下位に稜を有し、体部はほぼ直線的に立ちあがる。	外面底部はヘラけずり、 その他には積ナデがみら れる。	胎土	灰白色 良好 良好	
22	1377 土 師 器 坏		口径 12.8 底径9.4 器高4.9	口縁部場欠損。 器高に比して底径が大きい。 高台は低く、高台の断面 は四角形を呈する。 体部下位に稜を有し、体 部は直線的に立ちあがる	それ以外はナデがみられる。	胎土	黒一色径程をむを良色派 5砂量雲む	
23	1779 山 茶 埦	D 45	口径 10.8 器高 3.85 底径 5.4	口縁及び胴部½弱欠損。 器高も高く、高台もしっ かりしている。 内面に黒色の付着物有り	髙台にはヘラ切りののち	胎土	灰白色 砂粒を含 む。 良好	
24	1390 須 恵 器		口 径 (10.4) 器高3.5	完形品 体部に稜を有し、深めの 器形である。	内面および外面体部は横 ナデ。天井部に自然釉が みられる。	胎土	内面赤褐 色、外面 赤灰色 砂粒を含 む。 良好	
25	1030 須 恵 器 蓋	E 43—23	口径 6.9 最大径 10.6 器高 3.4	れている。	内面から身受けの部分に かけて横ナデがみられる。 外面全体と身受けの一部 に自然釉がみられる。	胎土	灰釉は濃乳径程黒を色の黒緑白0.の色含が色・ ㎜粒子。	

<u> </u>	遺物番号器 種	グリッド	計測値(cm) () は 推 定 値	形態	0	特	徴	手	法	の	特	徴	色胎士	調 .	備考
			上 框										焼成	良好	
26	1077 須 惠 器 高 坏	F 43	底径 9. 6	脚透長(つ段2脚りしのしいだ完は向は先いですし通長、下端る	あか、し方上方部によっている。	上3うな透らく	と同のいいればはに1下が。が	りがみ	+ られ こは相 可面	しる。 サラ ひ朋	デが旅 知部タ	色され	色調胎土焼成	灰は雲色含密を良います。	
27	966 須惠器高 坏	E43—4	口 径 (11.7) 底径 10.2 器高 9	口縁部% 坏部と服4の割合 坏部中位 脚部は下湾する。	部の である に稜	高さ <i>に</i> る。 がみら	れる。	られる	外化				胎土	外灰部褐径 0.砂むを緻良は。面 ㎜㎜を長む。含密好暗坏茶 ~の含石。	
28	1589 須 恵 器 腺	D 43	胴部最大 径 12.5	□唇部欠 胴部はほ その中位 る。 □頸部は □縁部と 面に肥厚	ぼ球形に穿孔 に穿孔 外反し の屈	孔がみ してま 曲点に	*られ *5り、 は、外	みられ 外面脂 が施さ	なる。	お描き	き波りへうり	式文が けずり D上に		暗灰色 砂粒を含 む。 良好	
29	660 須 惠 器 小型短頸 壺	E 42-24	最大径 (8.15) 器高6.9	体部½欠 平底で体 ちあがる 口縁部と がみられ	部は 。 胴部の			内外面別外面胴のが施	下音	30 Z	ケヘラ	うけず	色調胎土焼成	暗灰色 砂粒を含 む。 良好	
30	776 須 恵 器 高 坏	F 42— 7	口径 12.4 最大径 14.2 器高4.8	脚部欠指上 かしが二 がいなさ、内 ので、内	段に見 方向に 受ける	こみら を有す ちあか	れる。 - るも	Į.	られ	1. H	也は桂		色調胎土焼成	暗灰色 石粒を含 む。 良好	
31	536 灰釉陶器 皿	F 41	口径 15.5 底径7.4 器高2.6	口縁部が全体的に高台は角っかりと	つく (高台 ²	りが丁 を呈し	んし	けずり	きナラ 。 こは、	デ、 d 全d	本部に	はヘラ ご釉が		淡灰色。 釉は炎 色。 微砂粒・ 黒色粒子 を少量含	

No.	遺物番号器 種	グリッド	計測値(cm) () は 推 定 値	形態の特徴	手 法 の 特 徴	色 調 備考
						む。 焼成 良好
32	1146 灰釉陶器 坏	D 44	口 径 (14) 器高4.1 底 径 (7.0)	約¼残存。 作りが丁寧であり、体部 はやや丸味をおびる。 高台は角高台を呈す。	体部、高台は横ナデ、底 部に糸切り痕がみられる。 外面および、内面に釉が 施してある。	色調 淡灰色。 釉は淡緑 色 胎土 長石・雲 母を含む。 堅緻。 焼成 良好
33	1371 灰釉陶器 手付小瓶	G 38—22 —19 d II	最大径 7.7 底径 6.6	口頸部欠損。 把手欠損。 平底であり、胴部はゆる やかな曲線を描く。 胴上部から扁平な把手が でている。把手はヘラ切 りによる板粘土を使って いる。		色調 灰は一色 微熱色 一色 微型 や が を か を か を か を か を か を か を か を か を か を
34	1318 こね鉢	D 45	口 径 (15.4) 底径 10.0 器高 15.2	底部は残存、それ以外は 約%残存している。 2本単位の横走する沈線 が4ケ所にみられる。 口縁端部が内外面に肥厚 し、上面がほば平らになっている。	内外面とも底部はナデ。 他は横ナデがみられる。	色調 灰色 胎土 微砂粒・ 雲母・長 石を含む。 焼成 良好
35	1770 須恵器台付壺	D 45	口径 9. 4 器高 15. 5 底径 11. 5	壺は丸味をおびており、	壺の内面底部は未調整、 他は横ナデ。 台部と壺の接合部分(台 部の内面)に黒色の付着 物がみられる。	色調 灰色(釉 は暗緑色)胎土 緻密。黒色粒子を含む。焼成 良好
36	1590 須 恵 器 壺	D 43	胴径 15.7 底径7.8	頸部以上を欠く。 作りの丁寧な高台から胴 部がゆるく内湾しながら 立ちあがる。 肩部は強く張っている。	胴下部ヘラけずり。 それ以外は横ナデがみら れる。	色調 青灰色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好
37	1593 須 惠 器 花 瓶	D 43	口径 8. 4 底径 6. 2 器高 22. 8	口縁部%を欠く。 肩部は直線的に張りだす。 低い高台が付されている。 頸部は外反する。	外面の胴下部にヘラけずり、底部に糸切り痕がみられる。他は横ナデである。 また一部に自然釉がかかっている。 頸部に斜行するしぼりの痕がみられる。	色調 淡灰色 胎土 微砂粒・ 黒色粒子 を含む。 焼成 良好
38	2283 須 恵 器 壺	D45—2	□ 径 (17.5) 最大径34		口頸部内外面とも横ナデ 胴部外面はタタキ目、胴 上部には自然釉がみられ	色調 淡灰色、 釉は暗緑 色

⊠ No.	遺物番号器 種	グリッド	計測値(cm) () は 推 定 値	形態の特徴	手法の特徴	色 胎 土	調・焼成	備考
				口頸部は短く外反し、断 面三角形の口縁部に至る。			微砂粒・ 雲母を含 む。 良好	
39	808	F 42—14	口径 13.3 器高 5 最大径 13.9	完形品 底部は平底に近い。 体部は丸味を持っており 口縁部はやや内湾する。		胎土	外択茶内択暗径の微石色含良側の褐面の黒4砂砂英粒む好はあ色はあ褐㎜粒粒・子。光る。光る色程・・赤を	部 に は 用 に よ る 摩 耗 が み
40	2093 土 師 器 坏	E47—17	□ 径 (14.14) 器高 5.6		口縁部内外面は横ナデで内面にはナデがみられる。底部に木葉痕がある。	胎土	内面明褐 色、外面 炎褐色。 砂粒を含 む。 良好	
41	1769 土 師 器 坏	D 45	口径 9.5 器高 5.6	口縁部一部欠損。 口縁部と体部の境に稜を なし、口縁部は開く。 器高が口径に比して高い	□縁部に横ナデがみられ る。	色調 胎土 焼成	灰褐色 砂粒を含 む。 やや不良	
. 42	169 土 師 器 坏	G 38	口径8.5 最大径 9.5 器高4.9	体部は丸味をおびる。 口縁部は内湾する。	底部に木葉痕、口縁部に 横ナデ、内面にナデ有り。		淡砂む器 を を を を を を を で か と を で か と か と か と か と か と か と か と か と か と か	
43	1291 土 師 器 坏	E 44—22	口径7.6 最大径 8.0 器高4.4	底部は平底に近い。 体部はほぼ直立し、その まま口縁に至る。	口縁部内外面とも横ナデ がみられ、内面はヘラみ がきが施されている。 底部には木葉痕がみられ る。	胎土	明褐色 砂粒を含 む。 良好	
44	1290 土 師 器 坏	E 44—22	最大径	□径に比して器高が高い。 体部は丸味をおびて立ち あがり、直立する□縁部 に至る。		色調胎土焼成	明褐色 砂粒を含 む。 良好	
45	788	F 42—11	口径9.5 器高7.8	体部は丸味をおびている。 口縁部との境に不明瞭な 稜をなし、口縁部はやや	底部に木葉痕がみられる。 外面器壁に指頭圧痕、外	色調胎土	褐色 砂粒を含	

⊠ No.	遺物番号器 種	グリッド	計測値(cm) ()は推 定 値	形態の特徴	手 法 の 特 徴	色 胎 土	調• 焼 成	備考
	小 形 壺			内向する。	面の口縁部に横ナデがみ られる。		む。 良好	
46	1998 土 師 器 坏	D46-20	口径 10.2 器高4.2	口唇部一部欠損。 丸底。 体部は直線的に外向しな がら立ちあがり、そのま ま口縁部に至る。	内外面ともに、口縁部を 横ナデしている。 底部に木葉痕がみられる。	胎土	褐色 径 7 mm以 下の砂粒 を含む。 良好	
47	1768 土 師 器 鉢	D 45	口径 15.8 最大径 18.4 器高 10.8	底部は平底。	口縁部内外面とも横ナデ 内面はナデ。 外面に指頭圧痕がみられる。 底部に木葉痕有り。	胎土	暗褐色 砂粒を含 む。 良好	
48	1111 土 師 器 鉢	F 43—21	口径 14 最大径 14.2 器高 8.4	底部は平底で器壁が厚い。 体部はゆるく内湾して立 ちあがり、口縁部に至っ て直立する。	内面にはヘラみがきがみ	胎土	褐色 砂粒を含 む。 良好	
49	1852 土師器 壺	E 45—25	口径 8. 7 器高 15. 2	体部は球形を呈す。 頸部は強くくびれ、口頸 部は直線的に外向しなが ら立ちあがる。	口縁部、内外面と胴上部には、下から上への縦方向のヘラみがき、胴下部には横方向のヘラみがきが多数施されている。	胎土	灰褐色 砂粒を含 む。 不良	
50	1981 土 師 器 壺	D46—17	口径 11.2 最大径 12.5 器高 12.2			胎土	暗黄褐色 砂粒を含 む(長石 を含む)。 良好	
51	1850 土 師 器 壺	E 45	口径 11.05 最大径 13.35 器高 12.0	口縁部約%欠損。 平底を呈する。 胴部は丸味をおびる。 頸部は「く」の字状にく びれ、口頸部は開く。	口縁部内外面横ナデ、胴 部内面はナデ調整。 外面胴下部にヘラけずり がみられ、底部には木葉 痕がある。	胎土	黄褐色 径 7 mm以 上の砂粒 を含む。 良好	
52	507 土 師 器 器 台	F 41	口径 11.9 器高7.3 底径9.9	□唇部一部欠損。 脚部一部欠損。 坏部、脚部とも直線的に 開く器形である。	口縁部外面に横ナデがみられ、内面にヘラみがきが施されている。 外面、坏部と脚部の接合部分にヘラみがきがあられる。	胎土	褐色 砂粒を含 む。 良好	
53	1082 土 師 器 小 型 壺	F 43	口径 6.17 最大径 8.16 器高7.0	頸部に1ヶ所穿孔がある。 平底で胴部は丸味をおび 頸部はゆるやかにくびれ る。		胎土	褐色 砂粒を含 む。 良好	

No.	遺物番号器 種	グリッド	計測値(cm) () は 推 定 値	形態の特徴	手 法 の 特 黴 ラけずりがされている。 底部には粘土が貼り付け てある。	色 調胎 土 • 焼成	備考
54	1083 土 師 器 小 型 壺	F 43	口径 5.8 最大径 8.5 器高 6.5	口縁部%欠損。 頸部に2ケ所穿孔がみられる。 胴部は丸味をおび、口頸 部は外反する。	頸部外面横ナデ、肩部に ヘラみがきがみられる。	色調 明赤褐色。 一色 明赤褐灰 色 終 0.5 mm を含む。 雲 む。 焼成 良好	
55	1811 土 師 器 小 型 壺	G 38—22 —20 c	器高7.6 最大径 7.1 底径2.1	口頸部%欠損。 口頸部はゆるやかに外傾 し、胴部は丸味をもつ。 底部はいびつだが平底と なる。 頸部に直径 4 mmの孔が 2 つある。 分厚い底を持つ。	胴部にヘラけずり、内側 頸部に指頭圧痕がみられ る。		
56	1310 土 師 器 小 型 壺	E 44—23	口径7.4 最大径 7.6 器高7.3	口縁~頸部一部欠損。 胴部は丸味をおびる。 頸部はゆるやかにくびれ 口頸部は外反している。	底部のみヘラけずりが施してある。 頸部外面横ナデ。 他は摩耗のため詳細不明。	色調灰褐色胎土径1 mm弱の砂粒を 多く含む。 長石、雲 母を含む。 良好	
57	1658 土 師 器 小 型 壺	E 44	口径 5.8 器高 4.6	体部約34欠損。 平底で体部は直立気味に 立ちあがり頸部がややく びれる。	内面及び外面の口縁部は 横ナデ。 底部には木葉痕がみられる。	胎土 径1㎜の	
58	1097 土 師 器 壺	F 43	胴部最大 径 27.2 底径 9.5	口頸部欠損。 胴部は球形を呈す。 底部はあげ底気味の平底 である。	内面と外面の胴下部まで ハケ目がみられる。 底部には木葉痕がある。 胴下部より底部にかけて 外面にススの付着がある。	胎土 径2mm以 下の微砂	
59	286 土 師 器 蹇	Н 38	口径 18.5	胴下半部欠損。 口唇部内面を平らにして いる。口頸部は直線的に 開く。	口頸部は内外面とも横ナ デ、それ以下は内外面と もハケ目がみられる。	色調 暗赤褐色。 内面質部 より下に 暗茶褐色 胎土 径1 mm以 下の砂粒	

⊠ No.	遺物番号器 種	グリッド	計測値(cm) () は 推 定 値	形態の特徴	手 法 の 特 徴	色 調 胎 土・ 焼 成	備考
						を含む。 長石・雲 母を含む。 焼成 良好	
60	1819 土 師 器 小 形 壺	D 45—23	口径 16.9 器高 11.6 最大径 18.4	ぎみにつまんである。	が見られる。 外面胴部中位から底部に かけて、ヘラけずり調整 が見られる。	胎土 砂粒を含 む。	
61	2091 土 師 甑	E 47—16	口 径 (25.2)	□縁部約%欠損。 体部は直線的に開いて□ 縁部に至る。 把手は片方のみ残存して いる。	内外面の口縁部横ナデ。 内面の体部にはハケ目が みられる。	色調 明 径 5 mm 径 5 mm 径 で を 1 mm 後 含 で で 石 母 良 焼成 焼成	
62	118 土 師 器 坏	H 101	口径 13.4 最大径 13.95 器高 6.1	口縁部一部欠損。 口径に比して器高が高い。 口縁部は内湾している。	底部に木葉痕。 内面にヘラみがきがみられ、口縁部外面は横ナデ されている。	色調 内面赤褐 色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	
63	58 土 師 器 坏	G 102	口径 14.4 器高 5	□縁部%欠損。 ほぼ平底であり、体部は やや丸味をもって、立ち あがる。□縁部は強く内 湾する。		色調 褐灰色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	
64	422 土 師 器 坏	G 102	口径 14.8 最大径 15.2 器高4.1	口縁部½欠損。 器高は低く扁平である。 口縁部が内湾している。	口縁部横ナデ。 内面にヘラみがきがみら れる。	色調 褐色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	
65	88 土 師 器 坏	Н 101	口径 13.8 器高3.6	体部約½欠損。 器高が低く扁平である。 体部と口縁部の境に不明 瞭な稜を有する。	口縁部内外面横ナデ。 内面にナデ、外面にヘラ けずりがみられる。	色調 褐色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	
66	36 土 師 器 坏	Н 102	口径 10.8 器高 4	口唇部一部欠損。 小型で口縁部が開く器形 である。	底部に木葉痕がみられる。 口縁部内外面とも横ナデ で、内面はナデ調整して ある。	色調 内面灰黄 色。外面 黄褐色 胎土 径3 mm以	

No.	遺物番号 器 種	グリッド	計測値(cm) () は 推 定 値	形	態	0)	特	徴	手	法	(O)特	徵	色胎力	調:	備考
														焼成	下の砂粒 を含む。 良好	
67	87 須 恵 器 蓋	H 101	口径 14.0 器高 5.1	口縁部 体部に 部はほる。	は移	更を有	育し、		しも外ずの	いる。デ天み天	が 調料 おおお	縁部内になるはいるのでは、	内面おう は、	色調胎土焼成	暗灰色 砂粒を含 む。 良好	
68	145 須 惠 器 坏	H 101	口径 11.9 最大径 14.0 器高3.8	けを有	してがり	いる	るが、	その	横ナラ	デが ヘラ	みら	れ、	部には外面底されて		灰白色 砂粒を含 む。 良好	
69	327 須恵器 坏	G 102	最大径 15.3 器高 4.2		蓋受	けの)立ち	あが		だ、	底部	にへ	外面は ラけず	色調胎土焼成	灰色 微砂粒を 含む。 良好	
70	227 須 恵 器 壺	I 100	口径 9.6 最大径 14.9 器高 10.1	完形品。 は丸味 口頸部	を持	って	こいる	0	ヘラり	ナず	りが	みら	かけて れる。 れてい	胎土	暗灰色 砂粒を含 む。 良好。	
71	1451 須恵器平 瓶	G 102	口 径	はぼ完み一部頸部は的に丸	欠損 細く	lo 、胴	部は	全体					けずり れてい	色調胎土焼成	淡底明色。 淡底明色。 報密・含む を好	

木製品観察表

h	T/ -	Mr. 44- NV -		, L	-tut-	Æ	全長	(加锡结)	7.7 排出	Hat. State	樹種	/:#: _+
名 	称	遺物番号	出	土	地	点 	幅 厚さ、高さ	(欠損値) 〔復元値〕	分類	特徽	木取	備考
人	形	5001	N、I 谷川	旧河川	川内、	旧大	(239.5) 25.0 6.0 頭長(25.5)	(247.5)		頭頂部%欠損、左脚先数 ミリ欠損。 右側面下½が破損。ほぼ 完形。	S	
							頸長 15.0 頸長 147.0 脚長(50.0)			主頭、頭角68° 手は表現されていない。	В	
人	形	5002	N— 谷川	D 43-	-5,	旧大	283.0 28.0 2.5			頭部一部欠損。 圭頭、頭角55° 手は表現されていない。	S	奈
							頭長 41.5 頸長 18.5 胴長116.0 脚長106.0			脚は三角切り欠きをしている。 脚先は外側が削られている。	В	平
人	形	5003	N-:	D 44、	旧犬	(谷川	236.5 27.5 3.5 頭長 30.0 頸長 11.0			両脚が腰部から割れている。 右脚上部~腰部欠損。 頂部水平頭、頭角87° 手は切り欠き、腰の切り	S	奈。
							類長 11.0 胴長 95.5 腰長 9.5 脚長 89.5			込みになっている。 脚は斜めに切り込んで折ってある。	A	平
人	形	5004	不	明			25.5 5.5	(22)		脚部欠損、腰部左側一部 欠損、左頸%欠損、頭部 先端数ミリ欠損。 圭頭、頭角66°		
							頭長(29.5) 頸長 8.0 胴長210.5 腰長 48.0 脚長(96.0)			腰は切り欠いている。	В	
人	形	5005	N一:谷川	D 45-	-25.	旧大	(35.0) 4.5 頭長 30.0	(362.5) (37)		右脚欠損、手、胴の側部 大部分が欠損。 圭頭と円頭の中間。 手は切り込みで表現され ている(左53mm、右79mm)。	S	奈
							頸長 49.0 胴長112.0 腰長 38.0 脚長127.0)	(130.5)		脚は三角切り欠きである。	A	Ψ
人	形	5006	N一 谷川	F 39-	-3,	旧大	(71.0) 21.5 3.0 頭長 14.5 頸長 5.0	(72.0)		左脚欠損、右脚先欠損。 上方が薄く加工されている。 圭頭、頭角145° 腰は切り欠いている。	S	奈 • 平

A Hr	<i>11</i> .	North W. F.			全長幅(欠損値)	△★五	特	樹種	備考
名	称	遺物番号	出土地	点	幅 (欠損値) 厚さ、高さ〔復元値〕	分類	特 徴	木取	VH 4
					腰長 10.0 脚長(13.0) [14.0]		脚は三角切り欠きになっ ており、上部が薄く切り 残っている。	В	
人 形	形	5007	N-D46-19 谷川)、旧大	(380.0) [388.0) 28.0 10.5 頭長 50.0		右脚先端部½欠損、左脚 先端部火損。 圭頭、頭角先端72° 全体55°	S	古
					類長 20.0 胴長 53.0 腰長 27.0 脚長(228.0) [236.0]		腰は切り欠いている。脚 は三角切り欠きをしてあ る。	В	
人 形	形	5008	N-D46-18 谷川	. 旧大	(245.0) 〔不明〕 26.0 6.0 頭長(60.0) 〔62.5〕 頸長 17.0		脚はつけ根を残して欠損 胴部は中央で2つに割れ 周囲がかなり破損してい る。 圭頭、頭角70°	B S F	古
					胴長 76.0 腰長 20.5 脚長(68.0)〔不明〕		腰は切り欠いている。 脚は平行に切り込み、円形に切りとったと思われる。	В	
人	形	5009	N-D46-22 谷川	、旧大	(179.0)〔不明〕 31.0 6.5 頭長 45.0	圭頭、頭角54°	下部欠損、頭右側部欠損 圭頭、頭角54°	S	古
					頸長 16.5 胴長(117.0)〔不明〕			A	
人	形	5010	N-D46-13 谷川	,旧大	276.0 22.0 4.5 頭長 35.0		完形品 圭頭、頭角45° 腰は切り欠いて表現して いる。 脚は平行に切り込み、折	S	古
					頸長 24.0 胴長 67.0 腰長 18.0 脚長131.0		脚は平行に切り込み、がりとっている。 脚先は内側をけずっている。	A	
人	形	5011	N-D46-20 谷川	、旧大	(188.0)〔不明〕 32.5 5.0 頭長 59.0		腰部~脚部欠損 圭頭、頭角65°肩は怒り肩 である。手は、浅い切り 欠けで表現している。	S	古
					頸長 10.0 胴長(118.0)〔不明〕		手の下部を大きく切り欠いて腰を表現している。	В	
人	形	5012	N-D46-13 谷川	、旧大	(380.0)〔不明〕 33.0 3.5		頭部欠損、腰部中央で2 つに割れ、周囲が破損し ている。両脚先欠損。	S	古
				頸長(27.0)〔不明〕			В		

名	称	遺物番号	出土	地	点	全長幅	(欠損値)	分類	特、微	樹種	備考
						厚さ、高さ 胴長102.0 腰長 50.5 脚長(199.5)	〔復元値〕		腰は浅く切り欠いて表現 脚は三角切り欠き、脚先 は内側を削っている。	木取	
人 形	形	5013	N-D46-谷川	 -22 、	旧大	47.0 5.5 頭長 36.0	(257.0)		脚先端が一部欠損、ほぼ 完形品。 圭頭、頭角88° 手は切り込み(両方とも	S	古
						頸長 23.5 胴長110.5 脚長(78.0)	(87.0)		13㎜)。 腰の切り欠けは無。 脚は三角形に尖らせた串 状。左側が少し厚い。	В	
人 形 5014	5014	N-D46-谷川	-22,	旧大	275.0 47.5 6.0 頭長 40.0			左側頭部~頸部一部欠損 左手%欠損、脚部左下方 一部欠損。 圭頭、頭角82°	S	古	
				頸長 21.0 胴長152.0 脚長 63.0			手は切り込みで表現(右20mm、左13mm)。 脚は三角形に尖らせた串 状。左側が少し厚い。	В			
人	形	5015	N — D46,	旧大	(谷川	(255.0) 43.0 11.0 頭長(49.0)	〔不明〕		頭部左¼が欠損、胴部左 下から脚部欠損。 圭頭、頭角61° 腰部より下を欠くが5014	S	古
						頸長 28.5 胴長140.0 腰長(37.5) 脚長 不明	〔不明〕		と同形態と考られる。	В	
人	形	601	MG一H I	101、	旧大	26.5 8.0 頭長 71.0	〔不明〕		右肩の切り欠け~胴部、 右脚欠損、左脚大部分が 欠損。 圭頭の先をさらに削って	B S B S B B	古
						頸長 10.0 胴長(90.0) 脚長(27.0)			円頭に近くさせている。 頭角先端 150°全体62° 目・鼻・口が彫って表現 されている。 手は表現されていない。 脚は、三角切り欠きか?	A	
人	形	602	MG一H:	102,	旧大	22.0 6.0 頭長 46.0.	(281.5)		脚先欠損、手が大部分欠 損。 圭頭、頭角58° 手は左右とも切り込みに よって表現されている		古
						頸長 9.0 胴長 95.0 脚長(118.0)			(右42mm、左44mm)。 脚は三角切り欠き。		
人	形	603	мG—Н	102,	旧大	(258.0)	(260.0)		右側頭部~胴部上方14欠	S	古

h	II	事物采户	, iii	±.	地	点	全 長幅	(欠捐值)	分類	特徵	樹種	備考
名	称	遺物番号	出	工	地		厚さ、高さ	7 437 1111	分類	村 뛿	木取	NH 45
			谷川				29.0 8.0 頭長 44.0 頸長 8.0			損、両手欠損。 圭頭、頭角64° 手は切り込みによって表 現されている(左43㎜、		
							胴長162.0 脚長(44.0)	(46.0)		右44mm)。肩は怒り肩となる。脚は三角形に尖らせた串状	A	
人 形	形	604	MG- 谷川	- G 1	02.	旧大	25.5 5.0 頭長 29.0 頸長 20.5	(231.0)		頭部左%欠損、右脚%欠 損、左脚先欠損、左脚下 方一部欠損。 頂部水平頭、頭角60° 腰は切り欠いて表現して	S	古
							胴長 76.5 腰長 14.0 脚長(88.0)	(91.0)		いる。 脚は平行に切り込み、三 角切り欠きとなっている。 脚先は薄く、細く加工さ れている。	А	
人	人 形 605	605	MG- 谷川	- G 1	02.	旧大	(90.0) 39.5 3.0 頭長 37.0	〔不明〕		下部欠損 圭頭、頭角78° 下部は串状であったと思 われる。	S	古
							頸長 15.5 胴長(37.0)	〔不明〕		5013・5014と同形のものか。	В	
人	形	606	MG- 谷川	- G 1	02、	旧大	(160.0) 30.0 5.5	〔不明〕		上部右%欠損、下部欠損 上部は円頭または半円状 であったと思われる。		古
											В	
人	形	607	MG- 谷川	-G 1	02,	旧大	(52.0) 19.5 4.0	〔不明〕		下部欠損、頭、頸、胴の 上部残存。 頭頂部水平、頭角50°	S	古
							頭長 21.0 頸長 5.0 胴長(26.0)	〔不明〕			В	
斎	串	5094	N一I 谷川	O 46—	23,	旧大	(533.0) 13.5 12.0	(567.0)		上端½欠損、下端¼欠損 上角24°、下角13° 上方が厚く、下方が薄く	S	古
							12.0			なっている。切り込みは無。	В	
人	形	5095	不	明			(587.0) 43.0 10.0 頭長 37.0 頸長 58.0 胴長205.0 腰長 76.5	(592.0)		左腰部一部欠損、右脚側部%欠損、脚先端数ミリ欠損。 主頭、頭角88° 腰は切り欠きで表現。 脚は平行に切り込みさらに三角形に切り欠いてい	S	

名	称	遺物番号	出土	地 点	全長幅	(欠損値)	分類	特 徽	樹種	備考
					厚さ、高さ脚長(212.0			る。 脚先は左が内側、右が外側を斜めに切り落としている。 裏面は丁寧に面調整されている。		
馬(馬	形)	5100	N-E43-谷川	-17、旧大	108. 0 26. 0 5. 5			下辺中央に下から切り込みを入れ、細棒がつけられるようになっている。左下角50°、右下角50°上辺は大きく切り欠き、下辺は2か所切り欠いている。台形型左下角50°、右下角50°		古。奈。平
馬 (非		5100			150.0 6.5 3.5			中央で割れ、折れ曲がっ ている。 下端欠損。 上端は表裏両方から削り 薄くしてある。	S	
馬	形	5101	N-D46, SR-7	旧大谷川	(144.5) 18.5 2.5	[146.0]		側面が全体的に破損している。 上辺は大きく切り欠いていたと思われる。下辺は 2か所切り欠いている。 左は斜めに切り落とし、	S	古
								左は斜めに切り格とし、 右は圭頭状に切っている。 左下角42°、右角101°	В	
馬	形	5102	N-D46-谷川	-22、旧大	119.5 21.0 5.0			右上辺部欠損、下辺中央 部破損。 下辺は左に1、右2か所 計3か所の切り欠きがあ		古
								る。 右は垂直に切り、稜角を 面取りしている。 左上角83°	В	
馬	形	5103	N-D46-谷川	-23、旧大	(119.5) 32.0 7.0	(133.0)		右先端から側面%にかけて破損。 上辺を1か所切り欠き、 下辺も1か所切り欠いて	S	古
								いる。 逆台形型。 左上角38°、右上角27° (推定)	В	
馬	形	5104	N — D 46,	旧大谷川	(161.0) 39.0 6.0	(不明)		右脚部欠損、左先端欠損 上辺は大きく切り欠いて いる。	S	古

<i>t</i> 7	II-	遺物番号	出	土	H	点	全 長幅	(欠損値)	分類	特 徴	樹種	備考
名	称	退物番写	Щ		쁘		厚さ、高さ		JJ KN	10	木取	im · · J
										下辺は2か所切り欠いている。 下辺中央部に細棒を差した跡がある。 台形型 左下角44°、右下角36°	В	
馬	形	5105	N-	D 45、	旧大	(谷川	227. 0 29. 0 4. 0			下辺に2か所の切り欠き 上辺は欠損のため切り欠 いているか不明。 左右とも斜めに切り落と		古・
										左右とも斜めに切り巻と している。 左角47°、右角50° 台形型	В	· 平
馬 形 5106	N一 谷川	D 46-	-22、	旧大	267. 0 27. 0 6. 0			上辺中央一部欠損、下辺 頭部¼欠損、ほぼ完形。 左辺は圭頭状、右辺は斜 めに切り落とし、先端を 面取りしている。 下辺中央部に細棒をさし		古		
									とむ穴がある。 上辺1か所、下辺1か所 の切り欠きがある。 左角83°、右角45°	В		
馬(5	形)	5106					208.0			両端を斜に落し平行四辺 形に加工してある。		
馬	形	5107	N —	D 46.		大谷川	9.0 (171.0) 53.0 12.0	[174.0]		右先端数ミリ欠損、ほぼ 完形。 上辺を1か所切り欠いて いる。 下辺の切り欠きは無。	A	古
								A				
馬	形	5108	N-	D46.	旧力	大谷川	(115.5) 19.0 4.0	〔不明〕		下部欠損。 上辺は大きく切り欠いている。 欠損により下辺の切り欠		古
									きの有無は不明。 等脚台形型であったと思 われる。 左角48°(推定) 右角43°(推定)	В		
馬	形	5109	谷川		-13,	旧大	134.0 30.0 9.0			上辺一部欠損、ほぼ完形下辺は1か所大きく切り欠き、上辺は2か所を小さく切り欠き、その間を削り、2mmほど低くしている。		古

4.	<i></i>	144 W. F.	出土	∔th	点	全長幅	(欠損値)	分類	特 徴	樹種	備え
名	称	遺物番号	出工	地	从	厚さ、高さ		万组	村 (1)	木取	VHIA
									左右は丸味を帯びた斜め 切り落としをしている。 台形型 左角70°、右角60°	В	
馬	形	5110	N-D46 谷川	-23、	旧大	(128.5) 31.0 8.0	(156.0)		右先端%欠損。 下辺を大きく切り欠いている。上辺の切り欠きは無。 平行四辺形型であったと思われる。 左上角39°、右下角32° (推定)	S	古
										A	
馬 形 5111	5111	N — D 46.	, 旧大	(谷川	(135.0) 35.0 5.0	〔不明〕		下部欠損、右側欠損。 上辺は大きく切り欠いている。 下辺は欠損のため切り欠いていたかどうかは不明。 等脚台形型であったと思われる。	S	古	
			下辺中央かりにかけて炭化細棒をつける	下辺中央から表面中央部にかけて炭化しており、 細棒をつけるための切り 込みがあったかどうかは 不明。	В						
馬	形	630	MG-G 谷川	102、	旧大	(117.5) 31.0 6.0	(123.0)		左右両端数ミリ欠損。 左下角50°、右下角65° 上辺中央部に上から切り 込みが入って全体的に曲	S	古
									線的である。 上辺1か所、下辺2か所 切り欠き、 等脚台形型	A	
馬	形	631	MG-G 谷川	102、	旧大	(134.0) 39.0 6.5	(152.0)		右先端%欠損、上辺中央 より左端にかけて%欠損 左辺はわずかに残存。 上辺1か所を切り欠いて	S	古
			無、下 さし込。 左右は: 平行四:	いる。下辺の切り欠きは 無、下辺中央部に細棒を さし込む穴があいている。 左右は斜め切り落としの 平行四辺形型。 右角45°、左角48°							
馬	形	632	MG-G 谷川	102、	旧大	(119.0) 45.0 5.0	〔不明〕		3つに割れている、左下 部欠損、右上部欠損。 左下角54°(推定)、右上角 64°	S	古

名	称	遺物番号	出土	‡#h	占	全 長幅	(欠損値)	分類	特徵	樹種	備考
石	<i>₹</i> //\	退彻份与	Ш	걘	,\	厚さ、高さ		27 738	10 10	木取	, and
									左上方に斜め上方から切り込みがあり、切り口に木片がさしてまれている。切り欠きが直線的。 上辺1か所、下辺2か所切り欠き。 平行四辺形型	В	
不明 木製 品	木品品	5016	N — F 39	、旧プ	大谷川	(67.0) 10.0 7.0	(69.0)		下端数ミリ欠損、ほぼ完 形。 上端に円形穴(3 mm×3 mm)、この穴は裏まで抜けていない。 表面に薄くスジがついている。 下角23°	S	古・奈・平
斎	串	5017	N— E 43	、旧力	大谷川	(110.0) 8.0 5.5	(112.0)		上方が少し厚い。 先端数ミリ欠損、右側上 方¼破損、ほぼ完形品。 上角先端48°、全体25°、 下角31°	S	古・奈
斎	串	5018	N — E 43	、旧ブ	 大谷川	107.0			右側が薄くなっている。 売形品	B S	平古。
						15.0 2.0			下角先端36°、全体25°	В	奈 • 平 古
斎	串	5019	N-E41 谷川	— 2 、	旧大	(219.0) 21.5 7.5	〔不明〕		上部欠損 上角は欠損のため不明、 下角28° 右側上部が少し厚い。	S B	· 奈 · 平
斎	串	5020	N-E43 谷川	−7 ,	旧大	(317.0) 23.0 7.0	(323.0)		両端を数ミリ欠損、ほぼ 完形。 上角32°、下角先端32°、	S	古・奈
									全体26° 下方が厚く、上方が薄い。	В	平
斎	斎 串	5021	N— F 42	、旧フ	大谷川	(341.0) 37.5 11.5	〔不明〕		下方(?)が欠損。 木裏の上端に斜めの面調 整が見られる。	S	古・
								上角62°、下角は欠損により不明。 上の方の幅が少し広い。 上の方が薄く側面と裏面 の間にも面調整が施して ある。	В	奈 • 平	

	Τ'.	way 77 7			ыh	J=	全長	(加坦达)	分類	特 徴	樹種	備考
名	称	遺物番号	出	± 	地	点	幅 厚さ、高さ	(欠損値) 〔復元値〕	分類	符	木取	佣石
										切り込みは無。		
斎	串	5022	N-	E 43.	旧大	:谷川		〔不明〕 〔不明〕		右側欠損 上角48°、下角24°	S	古
							7.0			上方がやや厚く、幅も広い。 切り込みは無。	В	奈 • 平
斎	串	5023	N-	E 43,	旧大	:谷川	(101.0)	(102.5)		先端が数ミリ欠損、ほぼ		古。
							7.5 8.0			完形。中位に抉り込みが みられる。	В	奈 • 平
斎	串	5024	N-	E 43,	旧大	:谷川	(244.0) 20.0 5.0	〔不明〕		下部欠損 上角18°、下角は欠損に より不明。	S	古。奈
										上方が少し厚い。 切り込みは bか?	В	平
斎	串	5025	N一 谷川	E 43-	-4,	旧大	(199.0) 20.0 6.0	(204.0)		下部先端が数ミリ欠損、 ほぼ完形。 上角33°、下角14°	S	古。
										下端は鋭く尖っている。 下部の幅が少し広い。 切り込みはりか?	В	奈 • 平
斎	串	5026	N一 谷川	E 43-	-17、	旧大	(297.0) 14.0 7.5	(310.0)		下端½欠損、右側下部二 カ所欠損。 中央よりもやや上方で二	S	古。
										つに折れる。 上角50°、下角25° 上方が厚い。 切り込みは無。	В	奈 • 平
斎	串	5027		E 43-	-11、	旧大				上部右側%欠損。 上角50°、下角80°	S	古・
			谷川				26.0 4.0			上方の幅がやや広い。 切り込みは無。	В	奈 • 平
斎	串	5028	N一 谷川	E 43-	-23,	旧大	(303.0) 14.5 8.5			上端が数ミリ欠損、ほぼ 完形。 上角15°、下角41°	S	古。
										上方が少し幅が広い。 下方が少し厚い。 切り込みはりか?	В	· 奈 • 平
斎	串	5029	N-	D 45、	旧大	(谷川		〔不明〕		上端欠損、下端部均欠損		古。
							9.0			下角19°、上角9°(推定) 下方が幅広く、薄い。 下方表面に加工痕がのと	В	奈 • 平

,				全長	, L 4E /+ \	/1 k=	44 014	樹種	/± ±.
名	称	遺物番号	出土地点	幅 厚さ、高さ	(欠損値) 〔復元値〕	分類	特徵	木取	備考
							っている。 切り込みは無。		
斎	串	5030	N-D45、旧大谷川	(171.0) 17.0 5.0	(181.0)		右側が下方の一部を残し て欠損。 上角25°、下角26°	S	古・
							上端は少し薄くなっている。 切り込みは無。	В	奈 • 平
斎	串	5031	N ₂ 、旧大谷川	(136.0) 10.5	〔不明〕		上部欠損、残存部中央で 二折。	S	
				3.0			下角45°	A	
斎	串	5032	N-D45、旧大谷川	(125.5) 18.5 5.0	〔不明〕		上部欠損、下端先端欠損 下端は三面より削り尖ら せている。 左側が厚く、右が薄くな	S	古・奈
							っており、三角材状となっている。 下角17°	В	平
斎	串	5033	N-D45、旧大谷川	(93.0) 6.0 6.0	〔不明〕		上部欠損 下角先端32°、全体18° 下端は4方向より削り、	S	t
				0.0			さらに先端を側面から削って尖らせている。	В	奈 • 平
斎	串	5034	N ₂ 、旧大谷川	175.0 20.5 6.0			左側の上部場、下部場が 欠損。 中央部のみわずかに側面 が残存。		
							上角62°、下角54° 下方がやや厚い。 中央が高く三角材のよう になっている。	В	
斎	串	5035	N-D46、旧大谷川	(472.0) 39.0 7.0	[477.0]		両先端が数ミリ破損、ほ ぼ完形。 下方に縦長の隋円形穴	S	古
							(18mm×4.5 mm) 上角27°、下角28° 上の方の幅が少し広い。	В	
斎	串	5036	N-D46、旧大谷川	(330.0)	(334.0)		両端数ミリ欠損 上角67°、下角先端53°、	S	古

4	II	海梅平 只	uu da	地点	全長幅	(欠損値)	分類	特 徴	樹種	備考
名	称	遺物番号	出土	地 点	厚さ、高さ		分類	村 類	木取	加力
					9.0			全体45° 全体的に削りを入れて丁 寧に仕上げてある。 切り込みは無。	В	
斎	串	5037	N — D 46,	旧大谷川	19.0	(259.0)		左側一部欠損、上端数ミリ欠損、ほぼ完形。	S	古
					6.5			下角40°、上角44° 下方が幅広く、厚い。 右側が厚い。 切り込みは無。	В	
斎	串	5038	N — D 46,	旧大谷川	21.0	〔不明〕		上部欠損、下端部%欠損 上方はやや薄くなってい	S	古
					3.5			る。 下角50°	В	
斎	串	5039	N-D46,	旧大谷川	207.0 23.0 6.0			右側部欠損、上部に一部 残存。 下端は裏側から削り、薄 くなっている。	S	古
								下角70° 切り込みは無。 左側が少し厚い。	В	
斎	串	5040	N-D46,	旧大谷川	(148.0) 14.5 6.5	〔不明〕		上部欠損、下端数ミリ欠 損。 下角28°	S	古
					0.0			下方がやや厚い。	В	
斎	串	5041	N-D46,	旧大谷川	183.0 13.5 4.0			下部欠損、右側部½欠損 上角60° 上方が少し厚く左側も少	S	古
					4.0			し厚くなっている。	A	
斎	串	5042	N-D46,	旧大谷川	(152.0) 22.0 8.5	〔不明〕		上部欠損 下角58°、上角 は欠損に より不明。 下方が少し厚い。	S	古
								中央部が厚くなってきている。	A	
斎	串	5043	N — D 46,	旧大谷川	(185.0) 26.0 8.0	[199.0]		両端数ミリ欠損、右側½ 欠損 下角29°、上角33°	S	古
					0.0			左側(長辺)が厚い。 切り込みは無。	В	
斎	串	5044	N-D46.	旧大谷川	(151.0)	[165.0]		両端が一部欠損	S	古

							全 長			411	樹種	:::: +*
名	称	遺物番号	出	土	地	点	融 ち高 、ち具	(欠損値) 〔復元値〕	分類	特徵	木取	備考
							15.5 2.5			上角40°、下角34° 上方の幅が少し広い。	A	
斎	串	5045	N — D	46.	旧大	(谷川	(100.0)	〔不明〕		下部欠損	S	古
							3.0			右側が少し厚い。	A	
斎	串	5046	N — D	46.	旧大	:谷川	18.0	〔不明〕		下部欠損、左半分も欠損大部分欠損のため、全形	S	古
							4.5			不明。	В	
斎	串	5047	N — D	46、	旧大	(谷川	(200.0) 14.0 5.5	(204.0)		先端が一部欠損 下部に円形の穴(2 mm× 2 mm)。	S	古
										下角27°、上角先端60°、 全体37° 上端は念入りに仕上げて いる。 切り込みは無。	В	
斎	串	5048	N — D	46、	旧大	(谷川	(183.0) 15.0	(197.0)		両端数ミリ欠損、中央部 右側面欠損	S	古
							6.0			上角13°、下角17° 上方が中央部より切り細 められている。 切り込みは無。	A	
斎	串	5049	N-I) 46.	旧オ	で谷川	252.0			上部欠損、下方左%欠損	S	古
							29.0 7.5			右側が厚くなっている。 切り込みは見られない。	В	
斎	串	5050	N-I) 46,	旧ナ	大谷川	22.0	〔不明〕		下部欠損	S	古
							3.0			上部の幅が少し広い。	В	
斎	串	5051	N — D	1 46、	旧大	公川	(187.0) 14.0 5.0	(189.0)		上端、下端一部欠損 ほぼ完形 上角34°、下角39°	S	古
										上方が少し厚く、幅が狭い。	A	
斎	串	5052	N — I) 46 、	旧ナ	谷川	(122.0)	〔不明〕		上端数ミリと下方を欠損 上角28°、下角は欠損に	S	古

_	1/	14 44 X7 C		. 1.	1-13-1	上	全長	(万坦店)	分類	特 徽	樹種	備え
名	称	遺物番号	Ш	土	地	点	幅 厚さ、高さ	(欠損値) 〔復元値〕	刀規	付 (図	木取	
							6.0			より不明。 上部の幅が少し狭い。	В	
斎 串	か	5053	N-	D46,	旧大	(谷川	(197.0) 20.5 8.0	〔不明〕		下部欠損、上端も一部 損。 半円材、上方ほど平ら なっている。		古
										下方は右側を削って尖せている。 下端角度7° 切り込みは無。	C ₁	
斎	串	5054	N-	D 46	旧力	(谷川	(153.0) 21.0	〔不明〕		両端欠損 片方のみ、先端の加工	S 部	古
							6.0			分が一部残存。	A	
斎	串	5055	N —	D46,	旧力	、谷川	(79.0) 15.0 4.5	〔不明〕		上部欠損 下部は両側から切り込 を入れて折ったと思わる。	T.	古
										。 下角51°、71° 下部がやや厚く、幅も い。	B	
斎	串	5056	N-	D46,	旧力	大谷川	(259.5) 8.0 9.0	〔不明〕		上端欠損、下方が折れがっている。下端は匹所削り、尖らせている。	カ。	古
										下方が上方にくらべ幅 く、厚くなっている。 下角26°		
 斎	串	5057	N-	D46,	旧力	て谷川	(238.0) 12.0 6.0	〔不明〕		下部欠損 下方は表面がふくらみ 上方は裏面がふくらん	S	古
							0.0			いる。 幅は上方が少し広い。 切り込みは無。 表面下位に切り欠き?	C 2	!
斎	串	5058	N-	D46,	 旧ナ		(214.0) 11.5 4.5	〔不明〕		上端部欠損 下端は薄く平らにされ いる。		古
										上部は少し幅が狭くなっている。	C 3	
斎	串	5059	N-	D46,		ス谷川	(277.0) 11.0 2.0	[295.0]		上端数ミリ欠損、下端 欠損。 中央部が湾曲している		古
										上角40°、下角21°	A	

4-	fl -	·电4-亚口		全長	(知根は)	/\ser	44 22	樹種	
名	称	遺物番号	出 土 地 点	幅 厚さ、高さ	(欠損値) 〔復元値〕	分類	特徵	木取	備考
斎	串	5060	N-D46、旧大谷川	216.0 8.0 3.0			完形品 下角30° 左側が少し厚い。	S	古
				0.0			切り込みは無。		
斎	串	5061	N-D46、旧大谷川	108.0 8.5 4.5			上部欠損、下端先端%欠 損 下角20°	S	古
							下方はやや幅が広い。	A	
斎	串	5062	N-D46、旧大谷川	(128.0) 12.0	〔不明〕		上部欠損 下角先端35°、全体27°	S	古
				3.5				В	
斎	串	5063	N-D46-20、旧大 谷川	(251.0) 10.5	〔不明〕		上部、下部欠損、全体的に欠損が多く、形が不明。	S	古
				9.0			切り掛け、切り欠きは無。 	A	
斎	串	5064	N-D46-22、旧大 谷川	(144.0) 18.0	〔不明〕		上部欠損 上角は欠損により不明、	S	古
				3.0			下角25°	В	
允	}	5065	N-D46-18、旧大 谷川	(117.0) 17.0	〔不明〕		上部欠損 下角19°、上角40°	S	古
			-11711	9.0			切り込みは無。	В	
斎	#	5066	N-D46-22、旧大 谷川	(142.0) 19.0 5.0	〔不明〕		上部欠損 下角26° 上方が少し厚くなってい	S	古
							る。	В	
斎	串	5067	N-D46-22、旧大 谷川	(156.0)	〔不明〕		上部欠損、下端数ミリ欠損	S	古
				5.5			下角32°、上角は不明 左側が厚い。	В	l
斎	串	5068	N-D46-22、旧大 谷川	(157.0)	(163.0) (19.0)		左側%欠損、下端欠損 下角11°、上角17°	S	古
			台川	3.0	(19.0)		下州11、工州11	В	
斎	串	5069	N-D46-22、旧大 谷川	(61.0) (11.5)			左部欠損、全形が不明。 上角28°、下角26°	S	古
			- ш-7/1	4.0	(11.01)		左側が少し厚い。	A	
斎	串	5070	N-D46-21、旧大 谷川	(314.0) 11.0 4.0	[不明]		上部欠損? 残存部のつけ根に表裏と も切り込みが入っている ためあるいは切り残った ものか?。	S	古

<i>L</i> -	T.L.	111.H- II.	LLI	L 1	lsl1	点	全長幅	(万坦唐)	∠\ 樂香	特徵	樹種	備考
名	称	遺物番号	出 =	上步	地	从	厚さ、高さ	(欠損値) 〔復元値〕	分類	特徵	木取	洲方
										下角29° 右側が少し厚い。 面と平行に切り込みあり	В	
斎	串	5071	N-D	46—2	22,	旧大	(249.0) 30.0	〔不明〕		上部欠損 下角29°	S	古
			谷川				6.0			表面は丸味を帯びている。	В	
斎	串	5072	N — D	46—2	22,	旧大	209.0 16.0			上端一部欠損、ほぼ完形 上角39°、下角39°	S	古
			谷川				6.0			1月39 切り込みは a か?	A	
斎	串	5073	N-Da	46-2	23,	旧大	(325.0) 28.0 6.5	〔不明〕		上部欠損 下角62° 下部を薄くしている。	S	古
							0.3			下方の幅が少し広い。	В	
斎	串	5074	N一D4 谷川	46—2	23、	旧大	(332.0)	[不明]		両端欠損 斎串あるいは馬形などの 細棒であったと思われる。	S	古
							5.0			和倅であったこぶれね。	В	
斎	串	5075	N-D	462	23,	旧大	(438.0) 7.5	〔不明〕		両端欠損 両側より交互に切り込み	S	古
			40川				7.0			aがみられる。	A	
斎	串	5076	N一D4 谷川	16—2	22,	旧大	(115.5) 7.5 5.0	(118.0)		両端が数ミリ欠損、ほぼ 完形 表面にはかなり凹凸がある。	S	古
										両端は四面削りだが、削り方が異なる。 上角41°、下角44°	A	
斎	串	5077	N-D4	46—2	23,	旧大	(139.0) 17.5	〔不明〕		上部欠損 下方に方形の小穴(2 ㎜	S	古
							7.0			× 2 mm)。 下角49° 上方の幅がわずかに広い。	A	
斎	串	5078	N-D4	16 — 2	23,	旧大	(102.0) 29.0 7.0	〔不明〕		上部欠損、下端一部欠損 下方中央に逆三角形穴 (5 mm×2 mm)がある。	S	古
										下角先端28°、全体40° 側部を両側から削って薄	В	

						L-	全 長	() . (0 /4)	al alon	ALC.	樹種	/++ -
名	称	遺物番号	出	土	地	点	幅 厚さ、高さ	(欠損値) 〔復元値〕	分類	特 徽	木取	備え
										くしている。		
斎	串	5079	N-D 谷川) 46—	-23、	旧大	(77.0) 18.0	〔不明〕		両端欠損 下方がわずかに幅が狭い。	S	
							7.5			()] N-4) 9 N-10 HB N-10(V C	В	古
斎	串	5080	N-D 谷川) 46—	-23,	旧大	(89.0) 9.5 7.0	〔不明〕		上部炭化欠損、下端一部 欠損 下端は裏面から削りが入	S	古
										れられている。 側面から見た下角17° 右側が少し厚い。 切り込みは無。	A	
斎	串	5081	N-D 谷川	1 46	23,	旧大	(216.0) 11.0	〔不明〕		上部欠損、下端21mm欠損 下角8°	S	古
							6.0			下方の幅が狭く、尖っている。	В	
斎	串	5082	N一D 谷川) 46—	-23,	旧大	(235.0) 25.0	[不明]		上部欠損 下角33°	S	古
			4711				6.0			右側が厚い。	A	
斎	串	5083	N-D 谷川	1 46—	23,	旧大	(215.0)	〔不明〕		両端欠損 上方はやや厚くなってい	S	古
							8.0			3 。	В	
斎	串	5084	N-D 谷川	1 46—	23、	旧大	(255.0) 18.5	(257.0)		上端一部欠損 上角19°、下角28°	S	古
							7.5			下部の幅が広い。	A	
—— 斎	串	5085	N一D 谷川) 46—	-23、	旧大	(236.0) 20.0 7.0	[248.0]		下端場欠損、ほぼ完形 下端は炭化している。 焼いてから削った? 上角18°、下角先端23°、	S	古
										上角16 、下角元端23 、 全体33° 切り込み b。	A	
斎	串	5086	N-E 谷川	346-	12.	旧大	253.5 41.0			完形品 上角31°、下角59°	S	古
							4.5			左側が厚い。 右側は薄くなるよう面調 整されている。	A	
斎	串	5087	N-D	46—	23、	旧大	(139.0)	〔不明〕		両端欠損	S	古

名称 減物需号 出土地点 「時本、高さ(復元曲) 分類 特別 本限 標準 不成 標準 (次月報) 分類 特別 本限 標準 不成 標準 (次月報) 本限 情報 (次月報) 分類 (2000) 公園 (2000) 上海 (2000) 公園 (2000)		T1	'## A D	I 106 E	全長	(八平石	#±	inty.	樹種	備考
意 串 5088 N-D46-23、旧大 谷川 10.5 3.6 (139,0) (不明) 10.5 3.6 時端失報 5 5 5 6 8 意 串 5089 N-E46、旧大谷川 16.0 4.0 (174,0) (186,0) 16.0 16.0 16.0 16.0 16.0 16.0 16.0 16.0	名	称	夏彻 香亏				分類	45	1致	木取	加有
帝川 10.5 3.0				谷川						В	
高 車 5089 N-E46、旧大谷川 (174,0) (186,0) 16.0 4.0 両端数ミリ欠根 石側上部一部欠相 (248,0) 24.0 S 古 (248,0) 24.0 B 高 車 5090 N-E46、旧大谷川 (164,0) (195,0) 14.0 7.5 上端外欠租 上端外欠租 上端外欠租 上端外欠租 上角25°、下角26° 石側がやや厚い。 S 古 上角21° (194,0) 25.0 7.5 B 高 車 5091 N-E46 旧大谷川 (157,0) (不明) 25.0 7.5 上端火租、下部欠租 上角22°、下角26° 石側がやや厚い。 S 上角21° (194,0) 25.0 7.5 B 高 車 610 MG-G 102、旧大 谷川 (209,0) (213,0) 18.0 5.0 両端数ミリ欠根、ほぼ完	斎	串	5088			〔不明〕		両端欠損		S	古
16.0				10-711						В	
斎 串 5090 NーE 46、旧大谷川 (164.0) (195.0) 下端数ミリ欠担上場が欠担と場所をでした。 S 古地場が欠担と場所をでした。 B 斎 串 5091 NーE 46 旧大谷川 (157.0) (不明) 25.0 不明) 25.0 不明。 1.924° 切り込みは b か? 上海26°、下角36° 左側がやや厚い。 S 上角24° 切り込みは b か? B 斎 串 610 MGーG 102、旧大 谷川 (209.0) (213.0) 18.0 5.0	斎	串	5089	N-E46、旧大谷川	16.0	(186.0)		右側上部一部欠損		S	古
新 串 5091 N-E46 旧大谷川 (157.0) [不明] (25.0) [不明] (25.0) (7.5 上端欠損、下部欠損。 (25.0) (7.5 S 上角24° (70) 以みは bか? (7.5) (4.0			全体18°	4m 21 ,	В	
斎 串 5091 N-E46 旧大谷川 (157.0) (不明) 25.0 7.5 上端欠損、下部欠損。上角24° 切り込みは bか? S 上角24° 切り込みは bか? B 斎 串 610 MG-G 102、旧大谷川 (209.0) (213.0) 18.0 5.0 両端数ミリ欠損、ほぼ完 形上角53°、下角49° 切り込みは無。 S 形上角53°、下角49° 切り込みは無。 A 斎 串 611 MG-G 102、旧大谷川 (228.0) (不明) 15.0 6.0 上部欠損、下端部欠損 下角20° 左側が厚い。 S 下角50° 左側が厚い。 B 斎 串 612 MG-G 102、旧大谷川 (191.0) (不明) 17.0 2.5 石側欠損、上部欠損 S 下角50° B 古 内先端欠損 上角57°、下角45° 切り込みは a・1 対。 B 斎 串 614 MG-H 101、旧大谷川 (238.0) (不明) (不明) 7.0 2.0 上部欠損、左下部~下端欠損 下角30°前後と思われる。 B	斎	串	5090	N-E46、旧大谷川	14.0	(195.0)		上端%欠損 上角25°、下角26°)		古
高 串 610 MG-G 102、旧大 谷川 (209.0) (213.0) 18.0 18.0 5.0 両端数ミリ欠損、ほぼ完 形 上角53°、下角49° 切り込みは無。 古 斎 串 611 MG-G 102、旧大 谷川 (228.0) (不明) 15.0 6.0 上部欠損、下端部欠損 下角20° 左側が厚い。 S 古 斎 串 612 MG-G 102、旧大 谷川 (191.0) (不明) 17.0 2.5 右側欠損、上部欠損 S 下角50° 19.0 万角50° 19.0										В	
斎 串 610 MG-G 102、旧大 谷川 (209.0) (213.0) 18.0 18.0 18.0 18.0 18.0 18.0 19.0 19.0 19.0 14.0 18.0 19.0 19.0 14.0 19.0 19.0 14.0 19.0 19.0 19.0 14.0 19.0 19.0 19.0 14.0 19.0 19.0 19.0 19.0 19.0 19.0 19.0 19	斎	串	5091	N-E46 旧大谷川		〔不明〕				S	古
					l .					В	
斎 串 611 MG-G 102、旧大 谷川 (228.0) [不明] 15.0 6.0 上部欠損、下端部欠損 下角20° 左側が厚い。 B 斎 串 612 MG-G 102、旧大 谷川 (191.0) [不明] 17.0 2.5 右側欠損、上部欠損 S 下角50° B 斎 串 613 MG-G 102、旧大 谷川 (222.0) [224.0] 23.0 5.0 両先端欠損 上角57°、下角45° 切り込みはa・1 対。 B 斎 串 614 MG-H 101、旧大 谷川 (238.0) [不明] 17.0 2.0 上部欠損、左下部~下端 欠損 下角30°前後と思われる。 古	斎	串	610		18.0	(213.0)		形 上角53°、下角49°		S	古
斎 串 612 MG-G 102、旧大谷川 (191.0) 〔不明〕 右側欠損、上部欠損 下角50° S 古 B 斎 串 613 MG-G 102、旧大谷川 (222.0) [224.0] 上角57°、下角45° 切り込みはa・1対。 S 古 B 斎 串 614 MG-H 101、旧大谷川 (238.0) 〔不明〕 上部欠損、左下部~下端欠損 上角57°、下角45° 切り込みはa・1対。 S 古 欠損、左下部~下端欠損 下角30°前後と思われる。								93.9 2.97 18.1110		A	
斎 串 612 MG-G 102、旧大谷川 (191.0) [不明] 右側欠損、上部欠損 S 下角50° 古 B 斎 串 613 MG-G 102、旧大谷川 (222.0) [224.0] 上角57°、下角45° 切り込みはa・1対。 S 日本名の 日本のより、日本谷川 17.0 日本のより、日本谷川 日本のより、下角45° 切り込みはa・1対。 B 日本のより、下角45° 切り込みはa・1対。 日本のより、下角45° 内別のよりにある。 日本のより、下角45° 内別のよりにある。 日本のより、下角45° 内別のよりにある。 日本のよりにより、日本のよりによりによりによりによりによりによりによりによりによりによりによりによりによ	斎	串	611			〔不明〕			7欠損	S	古
斎 串 613 MG-G 102、旧大 谷川 (222.0) (224.0) 両先端欠損 上角57°、下角45° 切り込みはa・1対。 S 古 名別 斎 串 614 MG-H 101、旧大 谷川 (238.0) (不明) 大 仅担 下角30°前後と思われる。 上部欠損、左下部~下端 欠損 下角30°前後と思われる。 古 下角30°前後と思われる。								左側が厚い。		В	
斎 串 613 MG-G 102、旧大谷川 (222.0) (224.0) 両先端欠損 上角57°、下角45° 切り込みはa・1対。 S 古 内 5.0 斎 串 614 MG-H 101、旧大谷川 (238.0) (不明) 大谷川 上部欠損、左下部~下端欠損 下角30°前後と思われる。 古 下角30°前後と思われる。	斎	串	612			〔不明〕			X 損	S	古
斎 串 614 MG-H 101、旧大 谷川 (238.0)〔不明〕 上部欠損、左下部~下端 久損 下角30°前後と思われる。 上部欠損、左下部~下端 久損 下角30°前後と思われる。				台 川 				1,)4,00		В	
5.0 切り込みはa・1対。 B 斎 串 614 MG-H 101、旧大 谷川 17.0 公別 2.0 上部欠損、左下部~下端 欠損 下角30°前後と思われる。	斎	串	613			(224.0)		The state of the s	0	S	古
谷川 17.0 欠損 2.0 下角30°前後と思われる。				谷川						В	
	斎	串	614		17.0	〔不明〕		欠損		S	古
					2.0					В	

名	称	遺物番号	Ш	土	地	点	全長幅	(欠損値)	分類	特 徴	樹種	備考
斎	串	615	M.G.	— — Н	101,	旧大	厚さ、高さ (243.0)	〔復元値〕		上部欠損	木取 S	古
<i>191</i> 4		010	谷川	**	101,		22.0 9.5			下角45° 下方の幅が広い。	В	
斎	串	616	MG- 谷川	– Н	101,	旧大	(62.5) 14.0	〔不明〕		上部、下部とも欠損 残存部上方は削って薄く	S	古
			谷川				2.5			してある。	В	
斎	串	617	MG- 谷川	— G	102,	旧大	(144.0) 19.5 5.5	〔不明〕		上部欠損 表面に斜めのスジが5本 ついている。	S	古
							0.0			下角75°	В	
斎	串	618		– G	102,	旧大		〔不明〕		上部欠損 下角15°	S	古
			谷川				3.0			下端部が曲っている。	A	
斎	串	619	MG- 谷川	– G	102,	旧大	104.5 19.0 5.0			完形品 下角48° 上端は三角形切り欠きで	S	古
							5.0			ある。 左側が厚い。 切り込みは無。	В	
斎	#	620	MG- 谷川	— Н	101,	旧大	129.0 15.5 3.0			上端部右½欠損 上部%で割れ、周囲がか なり破損している。	S	古
							5.0			上角84°、下角65° 切り込みは無。	A	
斎	串	621	M G - 谷川	— H	102,	旧大	(124.0) 12.0 4.0	〔不明〕		上部欠損、下端2 mm欠損 残存部の上方、中央に1 つ、下方に2つ穴があい	S	古
							4.0			ている。 下角35°	A	
斎	串	622	MG- 谷川	— Н	102,	旧大	(100.0)			上部欠損、下端右⅔を欠 損	S	古
							3.5			下角29°	В	
斎	串	623		– Н	102,	旧大	(166.0)	〔不明〕		上部欠損、左側面大部分 を欠損。	S	古
			谷川				4.0			下角27°	В	

第V章〔特論〕土層について

第1節 静岡市神明原・元宮川遺跡断面の土層について (第48図)

静岡県立教育研修所 高 橋 豊

静岡市神明原・元宮川遺跡の西大谷と宮川地区での遺跡発掘断面の地質柱状図は、第48図のA、Bのとおりである。第48図の標高 + 400 cm前後の青灰色粘土層に挟まれる植物繊維のみからなる茶褐色腐植層「腐植土A」と、その下にみられ、青灰色粘土と腐植が細かく互層する「腐植土B」の2枚1組の腐植土は、よく連続する。また、これらの上にくる、茶褐色~黒褐色腐植混り粘土や、標高 + 200~300 cmの層準にみられる黒色砂層もよく連続し、対比に有効である。

調査地域の海抜高度 + 200 cm以浅の地層は、北から南へゆるやかに傾斜し、南北 1 km たらずの距離に対して、30~40 cm 前後の高度差をみる。

遺跡発掘断面にみる土層の層序は、次のとおりである。表層より、茶褐色粘土層(田の土を含む) - 灰白色粘土層 - (元宮川地区では灰白色粘土の薄層をみる砂層を挟んで) - 茶褐色 ~ 黒褐色腐植混り粘土層 - 青灰色粘土(「腐植土 A」、「腐植土 B」を挟む。乾いた露頭では暗褐色にみえることもある) - 灰色 ~ 暗灰色粘土層 - 黒色砂礫層 - 紫灰色シルト混り粘土層の順に堆積し、海抜高度 0 mに達している。

(1) 弥生後期の"登呂遺物包含層"の層準の確認

調査地点の土層断面には、次の2つの課題がみられる。

調査地域の弥生後期の"登呂遺物包含層"の層準を火山灰層を用いて、確認する必要がある。登呂遺跡の土層断面では"登呂軽石層"と呼ばれる天城火山カワゴ平起源の"カワゴ平軽石(Kgp)"が確認されている。このカワゴ平軽石と富士火山起源の"大沢スコリア(Os)"など、西方に降灰がみられた火山灰で、しかも降灰時期が弥生後期に最も近い値を示す火山灰を用いて、"登呂遺物包含層"で代表される弥生後期の土層の層準がどこにくるかを確かめる必要がある。ちなみに、大沢スコリア(Os)とカワゴ平軽石(Kgp)の降灰年代については、前者は2.800 Y. B. P. 、後者は2.900 Y. B. P. 前後と考えられている。

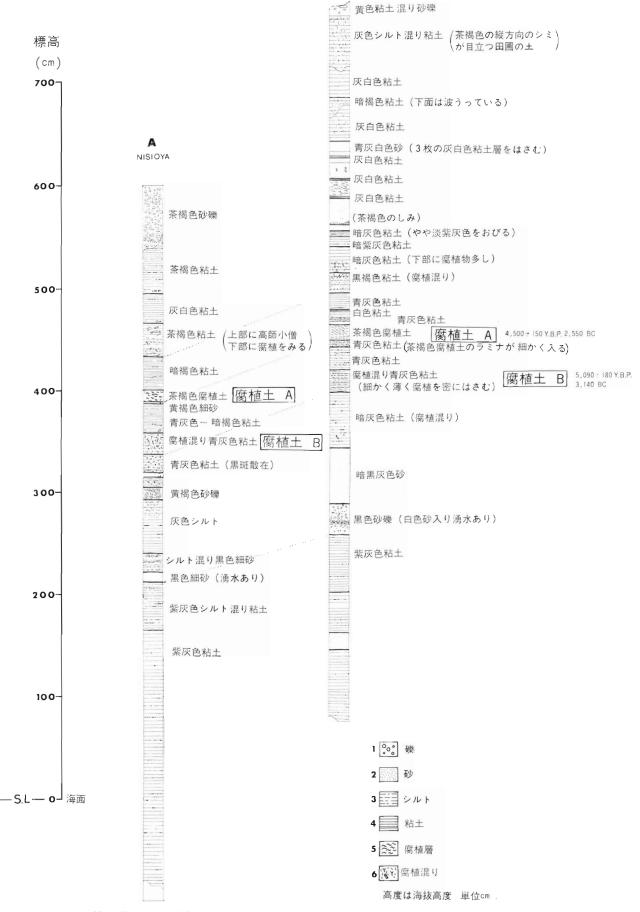
(2) 遺跡が立地した自然環境の解明

調査地点付近の5m等高線の湾曲は、安倍川-東大谷を結ぶ海岸砂丘背後の調査地点付近に、干潟や後背湿地が広がってたことを示している。古文書では、この地域に"弁忍田池"があったとしている。

調査地点に近い登呂遺跡の遺物包含層は"腐植質遊泥層"と呼ばれている。調査地点で見られる これに相当する腐植混り泥層は腐植混り青灰色粘土から、暗褐色ないし、茶褐色粘土に移り変わる 層準に挟まれて存在するとされる。これら腐植を挟む粘土は、静岡平野の沖積層を堪積した縄文海 進にはじまる海水準の昇降にかかわるもので、弥生期の海水準の変動をも反映しているものと考え る。そこで、海水、汽水、淡水からなる水域で群集組成を変える珪藻化石に注目し、土層中の珪藻

В

MOTOMIYAGAWA



第48図 静岡市神明原・元宮川遺跡断面の地層柱状図(高橋付図)

化石分析をおこない、調査地域の、遺物包含層堆積前後の古環境を調査することによって、遺跡の立地 条件を明らかにする必要がある。

第2節 神明原・元宮川遺跡宮川2区の火山灰層について _{静岡大学農学部 加 藤 芳 朗}

遺跡の遺物包含層の下、数cmないし10cmの位置に、厚さ 0.5~1 cmの淡褐色の火山灰層が、発掘担当者によって発見された。ルーペで拡大して見ると、直径 0.5 mm以下のコークス状を呈する褐色粒子と白色粒子とが混在している。層は、水平方向に断続し、上から見ると不規則な輪郭をもつまだら模様とな

原状のままの試料を実体顕微鏡で見ると粒径のよく揃った暗褐色、白色粒子からなる。

って産出する。

この試料を音波処理して細土粒子を破壊し、 $0.045 \, \mathrm{rm}$ のふるいで水中節別し、残留分を乾かし、さらに、 $0.2 \, \mathrm{rm}$ のふるいで乾式篩別した。 $0.2 \, \mathrm{rm}$ より粗い画分は黒色粒子を主とし、その $\frac{1}{4}$ 程度の赤色粒子と $\frac{1}{5}$ 程度の白色粒子を混える。実体顕微鏡下では、黒色、赤色粒子は小気泡にとみ、火山噴出のスコリアに特有な性質を示す。 $0.2 \, \mathrm{rm}$ より細かい画分は、カナダバルサムによってスライドガラス上に封じ鉱物顕微鏡で観察した。肉眼で黒色に見えた粒子は火山岩特有の石基構造を呈し、スコリアと判定された。約 $\frac{1}{4}$ 程度の白色粒子はカルシウムに富む斜長石である。

以上の観察事項から、これらの粒子がスコリア質で、富士火山の噴出物に酷似することがわかった。 静岡・清水平野において、この程度の深さから出現する同火山の噴出物は大沢スコリアしかないので、 問題の火山灰は大沢スコリアと推定される。

大沢スコリア層は静岡市富士見小遺跡で初めて発見された。その後、清水市下野 I 遺跡でも砂層に挟まれて見出された。今回は 3 度目の発見である。富士山麓では南西側に広く分布し、その南西限は由比町舟場であった。富士山麓での遺物との上下関係は、(1)関谷塚遺跡で、縄文晩期の大洞A式土器が本層よりわずかに上に重なる砂沢スコリア層の上位から産し、(2)天間沢、滝戸遺跡では縄文後期堀之内式土器が大沢スコリア層の下位から出ることがわかっている。従って大沢スコリア層は縄文後期から晩期にかけてのある時点で噴出されたものと思われる。放射性炭素の年代資料からは約 2,700年前と推定されている。

静岡・清水平野では、大沢スコリア層の下位にくるカワゴ平軽石層(約2,900年前、天城側火山より噴出)の産出例の方が多い(登呂、汐入、富士見小、有東、下野 I 遺跡)。 富士見小遺跡では、約7㎝の厚さの白色粘土をへだてて、上位に大沢スコリア層が、下位にカワゴ平軽石層が並ぶ。下野 I 遺跡でも、同様な上下関係で砂層中に共存する。本遺跡でも問題の火山灰層の下位に当然、カワゴ平軽石層があってもよいのであるが、現場では未発見である。ここより北東側の水田では表面下約60㎝の位置に確認されている。

第 VI 章 ま と め

I この遺跡は静岡平野の南東部の低地を流れる大谷川流域に位置している。海抜5~8 m付近に広が がる低湿地遺跡で、その範囲は南北約1 km、東西約500 mと静岡市内では最大級の面積を確認している。 周辺には北西の安倍川扇状地に立地する有東遺跡や登呂遺跡、東の有度山丘陵裾には縄文時代以降各時 代を通じた遺跡の密集地域があり、本遺跡はこれらのほぼ中央に位置している。

本遺跡のほぼ中央部に、現在の大谷川が貫流しており、蛇行する旧大谷川と交錯している。河川改修工事は、現在の河川幅を広げるとともに深く掘り下げて、コンクリート擁壁を造る(第2図)工事であり、右岸・左岸の提防下から水田の一部を調査対象としたもので、本年度は幅員 $10\sim20\,m$ 、延長約 $30\sim170\,m$ という狭い幅の調査区が設定された。(第6・17図)

昭和58年度の大谷川発掘調査の内容は大きく次の2つに分けることができる。

- (1) 旧大谷川内の古墳時代~奈良・平安時代の祭祀遺物調査。
- (2) 微高地及び微高地末端傾斜面上の古墳時代初頭と奈良・平安~中世の遺構の調査。

この遺跡の最大の特徴は「旧大谷川」の流路跡の発見にはじまる。旧大谷川の流路は現在の景観と異なり、大きく蛇行の跡をみせている他、川幅が100 mあまり、深さ4 mあまりに達する箇所もみられる。この旧大谷川の堆積土層からは古墳時代後期から奈良・平安に至る多量の祭祀遺物が発見され、古代における大規模な「水辺での祭り」が行なわれていたことが確認されたのである。

旧大谷川の両岸に広がる微高地上には弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世にかけての竪 穴住居址、掘立柱建物跡、井戸跡、溝、土坑、柵列跡、粘土採掘跡など長期間にわたる生活の痕跡が発 見された。

Ⅲ 旧大谷川の流路跡から出土した古墳時代~奈良・平安時代の祭祀遺物の出土量は膨大であり、その種類も多種多様である。静岡平野でこのような祭祀遺物を出土する遺跡は初めてであり、静岡県内で水辺での祭りが行なわれた類例を求めると伊場遺跡(文献 29・30・33・35)の大溝の祭祀遺物群が著名である。他に奈良県稗田遺跡(文献 28)で奈良時代の埋没河川から、木製の人形、斎串、刀形や土馬、人面土器が発見されている例や、長野県箕輪遺跡(文献 11)で、杭列の周辺の砂礫層から斎串・人形・馬形の木製品が発見されている例などが参考となる。

西大谷地区では延長約 120 mにわたって旧大谷川が確認された。ここでの流路の主軸は北東→南西へ向かい、右岸側を強く攻撃したうえ左カーブを描き、北西→南東の方向へ大きく屈曲している地点であった。(第8図) 流路内にはところどころに淵状の窪地がみられ遺物が集中していたり、中州や岸辺の部分に古墳時代だけの遺物が残存している部分がみられた。これ以外の場所では奈良~平安時代の流れによって、古墳時代の堆積物が流されてしまった箇所が大半で奈良・平安期の遺物に古墳時代の遺物がほぼ等量混在している状態であった。一方宮川地区(2区)での旧大谷川流路は、右岸側の川岸が発見され、ここでの古墳時代の流路は北西→南東→南へという方向がみられる。(第18・25・26・27図)この宮川2区の古墳時代の流路からは6世紀後半~7世紀前半の土器が主体となって発見されると共

に多量の祭祀遺物が伴なって出土した。ここでは古墳時代遺物包含層の上層に中世の包含層が存在し、 古墳時代遺物包含層に他の時期の遺物の混在はみられなかった。旧大谷川内からの遺物の出土状態は以 上のように奈良・平安~中世の流路に破壊された部分もあるが、古墳時代後期の遺物包含層が良好に残 存している部分があり、特に注目される祭祀遺物としては、ト骨・人形木製品・馬形木製品・斎串・獣 形土製品(馬・牛)・人 形土製品・獣骨類などが伴出したのである。これらの祭祀遺物群のうち人形・ 馬形木製品の起源は従来7世紀末藤原宮造営直前の大溝より出土したものが最古とされていた(文献 34)のであるが、本遺跡出土のものが年代巾はあるものの最古の例となった。

人形土製品の出土例は県内で浜松市の中津坂上遺跡と阿弥陀遺跡の例が知られているが、全国的にもまれである。今回の調査では古墳時代~平安時代に至る時期のものが出土しているが、時期によってその形態は大きく異なり、他遺跡の出土品にも類似例がみられない。このような点は、人形土製品の型式設定が可能であるか、又、それによる編年が可能であるか、といった問題や、人形土製品の地域性の問題を提起するであろう。又、人形木製品と人形土製品の併存がどのような意味を持つのかということも一つの問題であろう。

人形木製品と人形土製品との関係同様、馬形木製品、馬形土製品の関係も興味深い。材質の違うこれら2種の形代と、獣骨に含まれる馬の骨とのかかわりも問題であろう。又、馬形土製品はその作成技法・形態上の特徴が人形土製品との対応関係を持ちセット関係を形成するようである。獣形の土製品としてはこの他に牛形の土製品が古墳時代の流路より出土している。大谷川では牛形土製品は今のところ1点のみであり全国的にもごく少数の例があるのみであろう。この牛形土製品と馬形土製品との関連も1つの問題である。土製形代類は今回の報告では取り上げなかったが次回に詳しく記載する予定であり、上記の問題点もその時点で考察してみたい。

斎串は古墳時代後期(鬼高期)~平安時代にかけてのものであるが、多くは古墳時代に含まれ、人形 同様初現期のものである。大谷川出土の斎串の特徴としては、やはり、その形態の多様さが上げられよう。発生当初より多くの形態があるということは、斎串の用途が形態には大きく左右されないか、あるいは用途により形態(種類)が細分化されていると考えることができる。又、一般的に斎串の特徴として側辺の切り掛けが上げられるが、大谷川出土のもので切り掛けのあるものはごくわずかで例外的といってよい。したがって、斎串にとって切り掛けは必須の要素ではなく、時期が下って派生的に発生したものが、最終的に主要な要素になったとも考えられる。今後の検討が必要となろう。

大谷川の祭祀の一端をうかがわせる遺物としてト骨が3点出土している。このト骨を用いた祭祀を考えた時、祭祀の中で占いの役割や目的、占いの主体者の社会的地位といったことが問題として生まれてくるであろう。

 この木簡は海岸にほど近いこの地が物資の集散地、あるいは消費地であった可能性をも示している。 墨書土器の中で注目されるものは「田人」の文字の書かれたものである。この文字の例は現在いくつ か知られているが農耕祭祀に関するものとも考えられている。

昭和58年度 神明原•元宮川遺跡遺構一覧表

西大谷地区

	遺構	1 🗵	2 🗵	合 計
	溝状遺構	8	9	1 7
中	土坑状遺構 (小穴・柱穴を含む)	2	1 7	1 9
7	掘立柱建物址		1	1
世	柵列状遺構		1	1
	粘土採掘跡		3	3
	護岸杭列	1		1
古	溝状遺構	7		7
墳	土坑状遺構	5		5
時	炉址=焼土	4		4
代	集石遺構	1		1
古垣	告時代~近世 旧 大 谷 川	有	有	有
	合計	28	3 1	5 9

宮川地区

	遺構	1 🗵	2 🗵	合 計
奈	溝状遺構	3		3
良	土坑状遺構(小穴・柱穴を含む)	2 3		23
\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	掘立柱建物址	2		2
中	柵列状遺構	1		1
世世	井 戸	4		4
IF.	護岸杭列		1	1
近世	道路状遺構	1		1
古墳	音時代~近世 旧 大 谷 川	有	なし	
	合 計	3 4	1	3 5

総合計 94

Ⅲ 微高地上の調査については、河川改修に伴う調査であるため、調査区が南北に細長く東西の幅がごくせまい上、包含層が浅く、遺構面上面まで耕作の影響を受けている部分が随所にみられ、さらに古墳時代~中世の遺構が複雑に切り合い、古い遺構が破壊されている部分が多いといった悪条件が重なり、遺跡の全体像を明確につかむことは困難であった。そのようななかでも、西大谷地区南半部で発見された溝(SD15)からは、古墳時代初頭の土器の一括資料を得て、静岡平野の当該期のセット関係を知ることができた(第29図)。

粘土採掘跡は、中世以降のものであり、目的とする粘土を層理に合せて採掘しており、中世の産業史を考える上で重要な資料となる。

Ⅳ 他に断片的な資料ではあるが、縄文時代の遺物が若干出土している。晩期の清水天王山式の土器片や磨石・凹石・黒曜石砕片であるが、静岡平野の低湿地から発見されたのは初めてである。本遺跡の東、有度山丘陵(通称「日本平」)の東側、清水市の沖積平野に面する有度山の扇状地には、縄文時代後期~晩期・弥生中期の住居址などが発見された清水天王山遺跡がある。

今回の資料は断片的であり、縄文遺跡の中心部からは、はずれていると考えられるが、遺跡のあり方 を知る上で興味ある資料となった。

以上が今年調査の成果のおよそのまとめであるが、旧大谷川が古代において重要な祭祀の場であった ことを明らかにしたことが最大の成果であったといえよう。今回は十分な考察ができず、問題提起のみ で終ってしまったが、調査は今後も継続して行われる予定であり、その成果をふまえて提起した問題を 考察することとしたい。

参考文献

1. 静 岡 県 1930 : 「有渡山西麓の遺跡」『静岡県史』第1巻

静 岡 市 1931 : 「原始時代の遺跡」『静岡市史』第1巻 P30~31第2節

3. 静岡郷土研究協会 1935 : 「有渡山の地形に就いて」『静岡県郷土研究』第5輯

4. 1935 : 「有渡山塊の考古学的調査」『静岡県郷土研究』第5輯

5. 加藤明秀・芹沢長介 1938 : 「静岡市有東杉畷馬拾場彌生式遺跡――特に石器に就いて――」 考古学

9 - 9

6. 日本考古学協会編 1949 : 登 呂

7. 杉 原 荘 介 1951 : 「静岡市有東第1遺跡」日本考古学年報1

8. 静岡市教育委員会 1953 : 後藤守一・斎藤忠『静岡賎機山古墳』

9. 日本考古学協会編 1954 : 『登呂本編』

10. 杉 原 荘 介 1954 : 「静岡県静岡市曲金遺跡」日本考古学年報 2

11. 藤 沢 宗 平 1955 : 「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」信濃 第7巻2号

12. 清水市郷土研究会 1960 : 和島誠一•市原寿文他『清水天王山遺跡』

13. 庵原村教育委員会 1961 : 内藤晃・大塚初重『三池平古墳』

14. 静岡市教育委員会 1962 : 望月董弘•手島四郎『駿河丸山古墳』

15. // 1963 : 望月董弘「駿河伊庄谷橫穴墳」静岡考古館研究報告 第二集

17. 『静岡県の古代文化』 静岡県文化財調査報告書第2集

18. " 1966 : 『片山廃寺跡第 3 次発掘調査報告書』

19. ″ 1966 : 『駿河片山廃寺調査略報 東名高速道路建設に伴う発掘調査』

20. 望 月 董 弘 1967 : 『駿河掘ノ内山古墳群』静岡考古館

21. 浜松市教育委員会 1971 : 『伊場 第四次調査月報』4、6

22. 望 月 董 弘 1973 : 「神明原遺跡出土の土器」『土師式土器集成本編』3 P68~70、PL 111

東京堂出版

23. 嵳 月 車 峃 1973 : 『駿河 池田山古墳』静岡英和女学院

24. 静岡市登呂博物館 1975 : 『駿河宮川遺跡(第1次概報)』

25. 辰 巳 和 弘 1975 : 『有度山北麓の古墳』静岡県立焼津中央高校郷土研究部

26. 黒 崎 直 1976 : 「斎串考」古代研究10 P23~34

27. 神 沢 勇 一 1976 : 「弥生時代、古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について」駿台史学38

28. 梠原考古学研究所 1977: 「稗田遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報―― 1976 年度 —―』

29. 浜松市教育委員会 1977 : 『伊場遺跡 遺構編』30. 浜松市教育委員会 1978 : 『伊場遺跡 遺物編1』

31. 静岡市立登呂 1979 : 『駿河井庄段古培』静岡市教育委員会

32. 静岡県 考古学会 1979 : 『須恵器――古代陶質土器――の編年』静岡県考古学シンポジューム 2

33. 浜松市教育委員会 1979 : 『伊場遺跡出土品解説目録』

34. 金 子 裕 之 1980 : 「古代の木製模造品」研究論集VI 奈良国立文化財研究所学報38 P11~20

奈良国立文化財研究所

35. 浜松市教育委員会 1980 : 『伊場遺跡遺物編2』

36. 静岡市教育委員会 1982 : 『駿河 豊田遺跡 静岡市外局建設用地内遺跡発掘調査の報告』

37. 静岡県教育委員会 1983 : 『伊庄谷横穴群』

38. 辰 巳 和 弘 1983 : 「静岡県中部における群集墳の一形態――谷田古墳群第8支群――」

地方史静岡 第8号 静岡県立中央図書館

39. 通産省工業技術院 地質調査所 1956 : 「静岡県安倍川水系工業用水水源地域調査報告」地質調査所月報(第7巻 12号)

(第3図 安倍川、巴川流域の基盤地質および自墳帯の水理図)

40. 静岡県教育委員会 1979 : 『静岡県遺跡地図』

『静岡県遺跡地名表』

41. 東 野 治 之 1977 : 「藤原宮木簡の書風について」ミュージアム 314号

42. 静岡県河川課 1982 : 『大谷川史』

図 版



1. 神明原・元宮川遺跡 航空写真一南より



2. 神明原・元宮川遺跡 航空写真一南より



1. 西大谷地区を上空より望む-北より



2. 西大谷地区を上空よ り望む一西より



1. 西大谷地区発掘全風 景―南より

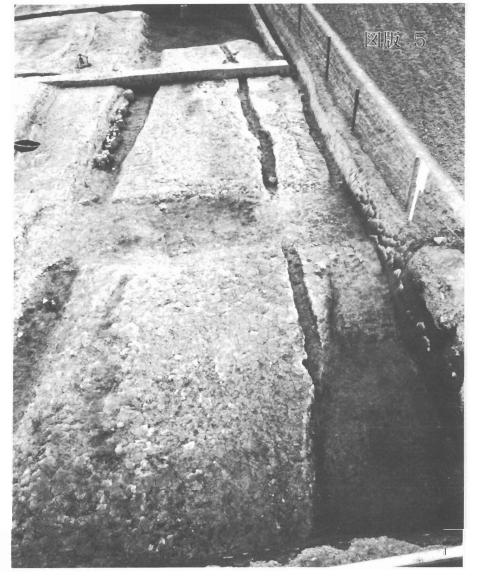


2. 西大谷地区表土除去 開始一南より



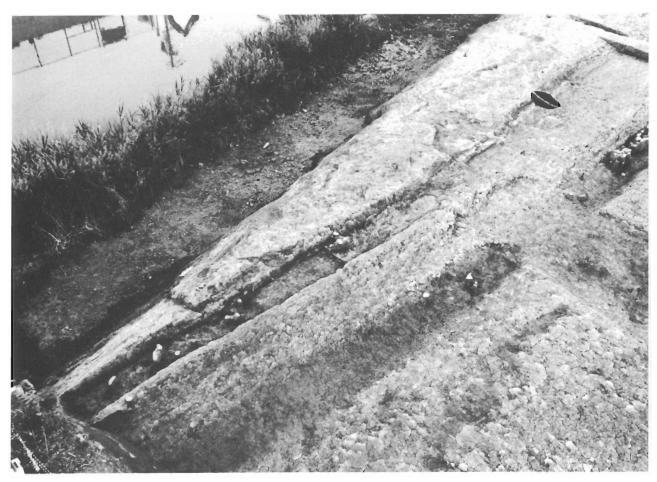
1、34列~39列 中世遺 橋面精査開始-北よ 1) (西大谷地区)





 SD5,SD6,SD12 満状 遺構一南より (西大谷地区)





I. SD9 薄状遺構―南より (西大谷地区)



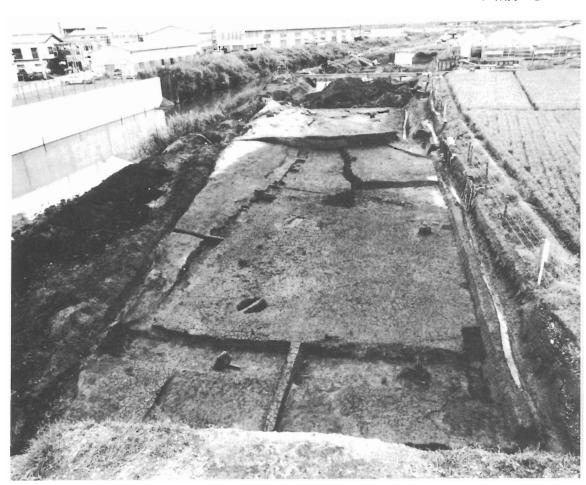
2. SD9 薄状遺構とそ の断面一北より (西大谷地区)



I. SD6 溝状遺構一南 より (西大谷地区)



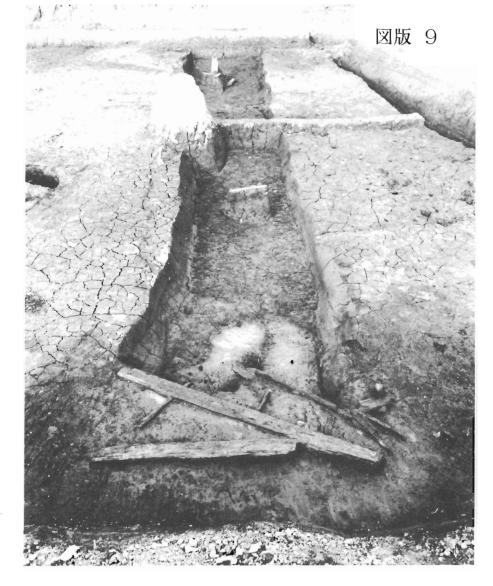
2. SD2 溝状遺構一北 より (西大谷地区)



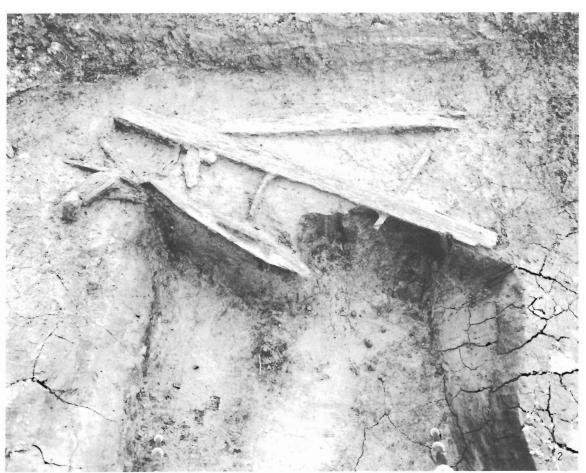
1. 34列〜38列 古墳時 代遺構面―南より (西大谷地区)



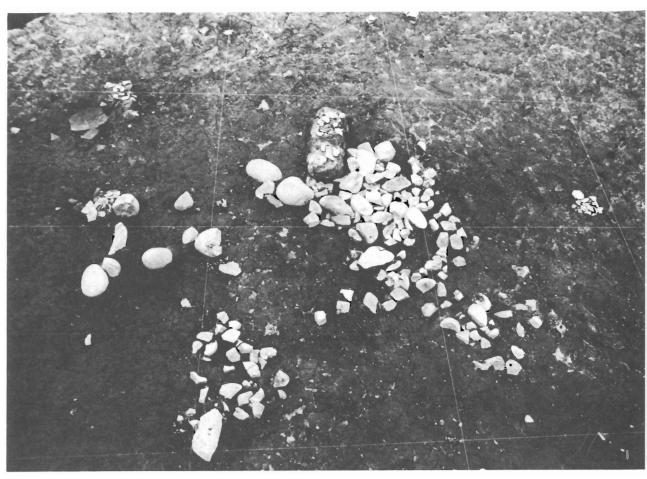
2. 34 列~38 列 古 墳 時 代遺構面 一北より (西大谷地区)



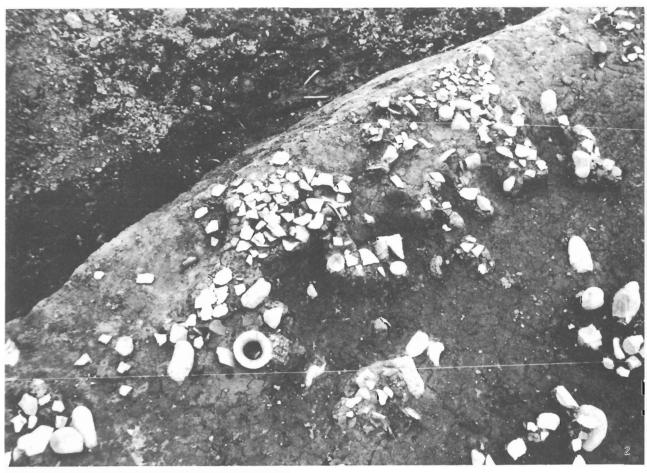
I. SD24 溝状遺構-西から (西大谷地区)



2. SD24内 木製遺物出 土状態 (西大谷地区)



I. S×60 集石状遺構―東から135グリッド (西大谷地区)



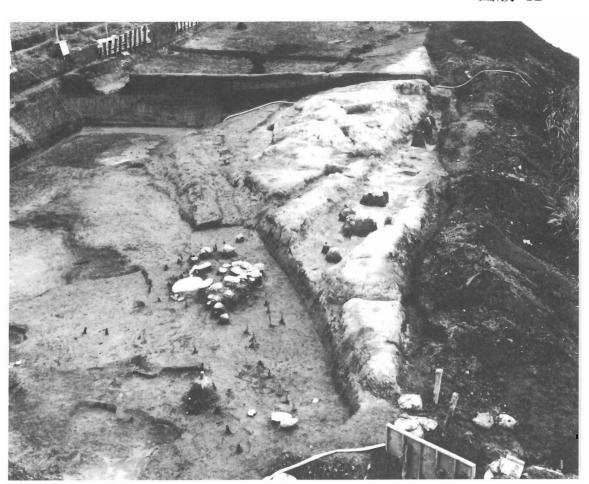
2. 古墳時代初頭の土器分布状態(34グリッド (西大谷地区)



1. 古墳時代初頭土器及 び礫分布状態 - 135 グリッド (西大谷地区)



2. 古墳時代初頭土器及 び礫分布状態-J35 グリッド (西大谷地区)



1. G37・G38グリッド付 近 古墳時代遺構面 一北より (西大谷地区)



 G37グリッド付近 古墳時代遺構面―東 より (西大谷地区)



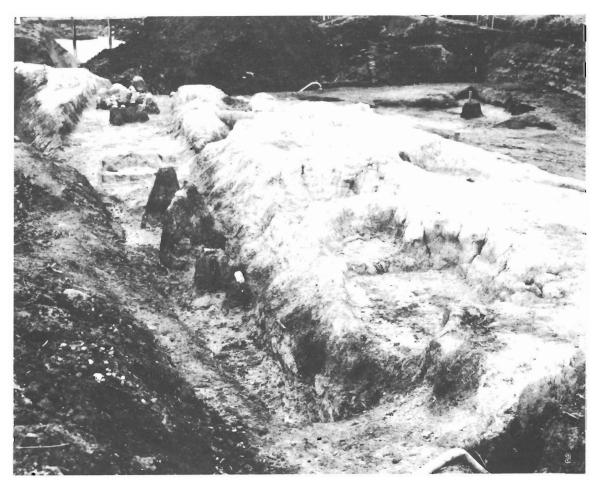
1. G36・G37グリッド付 近 古墳時代遺構面 一北より (西大谷地区)



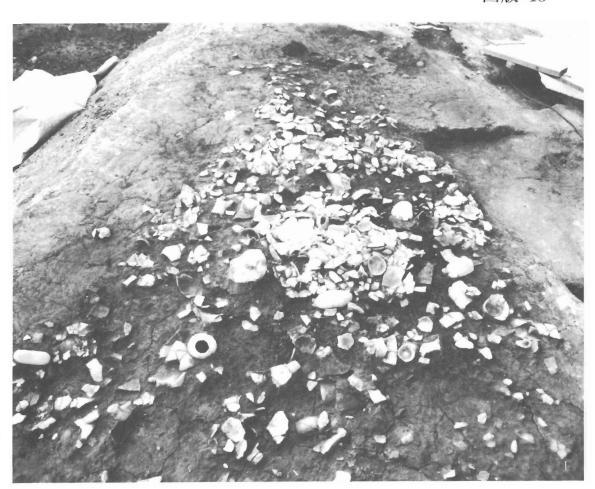
2. 手前よりSFI・SF4 SF3 土坑状遺構ー 北より (西大谷地区)



1. SD15 溝状遺構一北 より (西大谷地区)



2. SD15 瀟状遺構一南 より (西:大谷地[区)



1. SD15 溝状遺構埋土 上層土器出土状態 (西大谷地区)



2. SDI5 溝状遺構埋土 上層土器出土状態 〔西大谷地区〕



1. 39列~44列 旧大谷 川河床面-北より (西大谷地区)



 39列~44列 脚大谷 川河麻面一南より (西大谷地区)



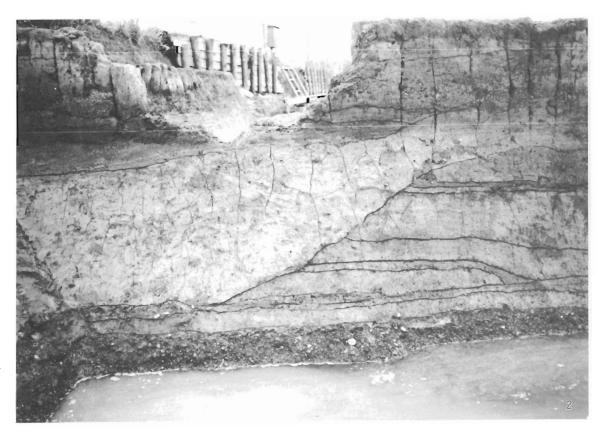
1. SL21 護岸状遺構一 西より (西大谷地区)



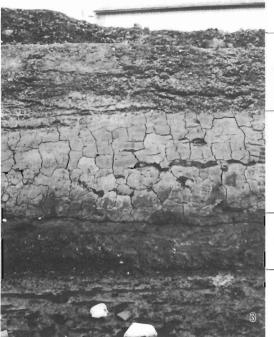
2. SL21 護岸状遺構-南より (西大谷地区)



1. 第4トレンチ 断面 -北より (西大谷地区)



2. 第4トレンチ 断面 旧大谷川内堆積状態 一北より (西大谷地区)



近世~現代の堆積砂礫

中世の堆積粘土

奈良・平安時代の堆積粘土・砂礫

3. 発掘区西壁 旧大谷 川内堆積状態一東より (西大谷地区)



1. F40.41.42, G40.41. グリッド付近 旧大 谷川内河底礫堆積状 態ー南から (西大谷地区)



2. F4Iグリッド付近 旧大谷川奈良時代以 降流路一南より (西大谷地区)



1. F42.43グリッド付近 旧大谷川古墳時代後 期流路一北より (西大谷地区)



2. F42グリッド付近 旧大谷川古墳時代後 期流路一南より (西大谷地区)



 E42.F43グリッド付近 断面に見られる 近 断面に見られる 旧大谷川流路変遷状態ー南より (西大谷地区)



2. F43グリッド杭付近 古壙時代流路堆積土 (西大谷地区)



1. H38.39グリッド 遺 物出土状態 - 東から (西大谷地区)



2. H39グリッド 遺物 出土状態 - 東から (西大谷地区)



1. 第 | トレンチ内 牛形土製品出土状態-G4|グリッド (西大谷地区)



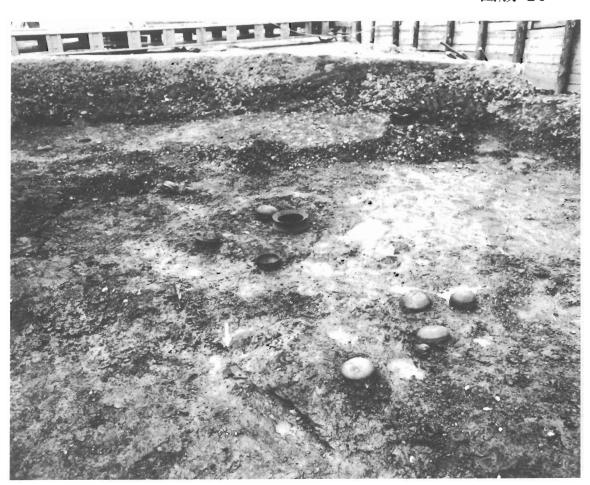
2. 馬形土製品出土状態-E42-20グリッド (西大谷地区)



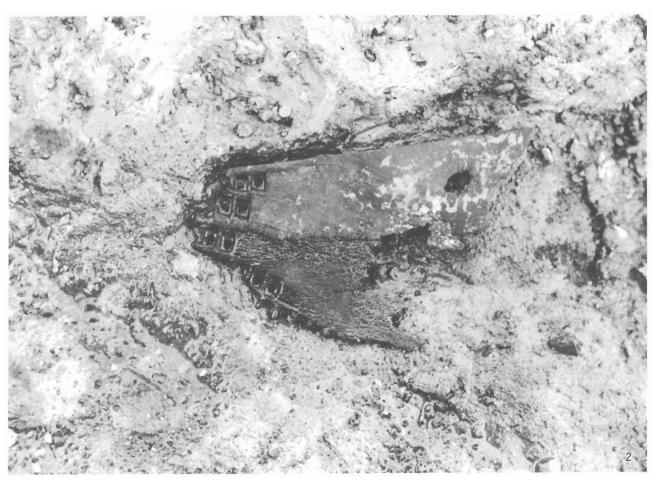
3. 人形土製品出土状態-E41-9グリッド (西大谷地区)



4. 木簡出土状態―E43·I4グリッド (西大谷地区)



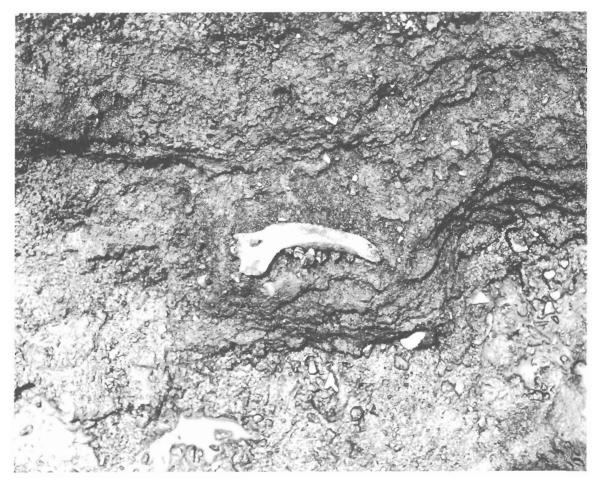
1. ト骨と伴出土器出土 状態 F42グリッド (西大谷地区)



2. ト骨出土状態 F42グリッド (西大谷地区)



1. 獣骨出土状態 E41-9グリッド (西大谷地区)

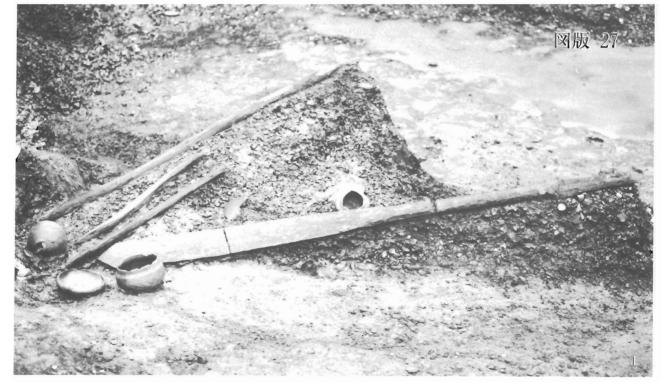




1. F42グリッド付近 遺物出土状態 (西大谷地区)



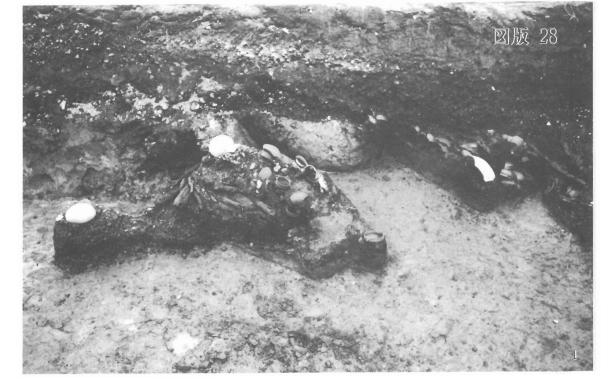
2. 重なって出土した土 師器+本と壺-F42グ リッド (西大谷地区)



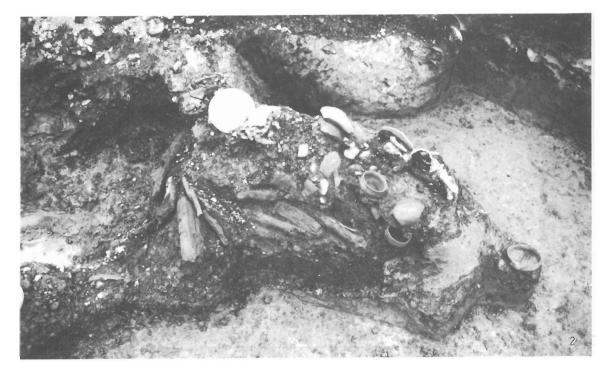
- 1. 鉾形木製品・木製模 造刀出土状態-F42-2, F43-22グリッド (西大谷地区)
- 9. 舟形木製品出土状態 E43グリッド (西大谷地区)
- 3. 敏の柄出土状態 F 43-9グリッド (西大谷地区)







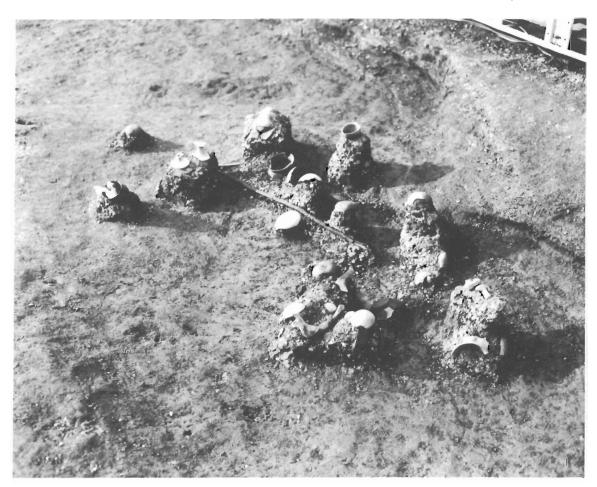
1. E42~D43土手付近 遺物出土状態 (西大谷地区)



2. E43~D43土手付近 遺物出土状態 (西大谷地区)



3. E43~D43土手付近 遺物出土状態 (西大谷地区)



I. 土器出土状態-E43 グリッド (西大谷地区)



 2. 須惠器高坏出土状態 E43グリッド (西大谷地区)



1. 土器出土状態-D45 グリッド (西大谷地区)



2. 須惠器:大形壺田土:状 態 — D45-2グリッド (西大谷地区)



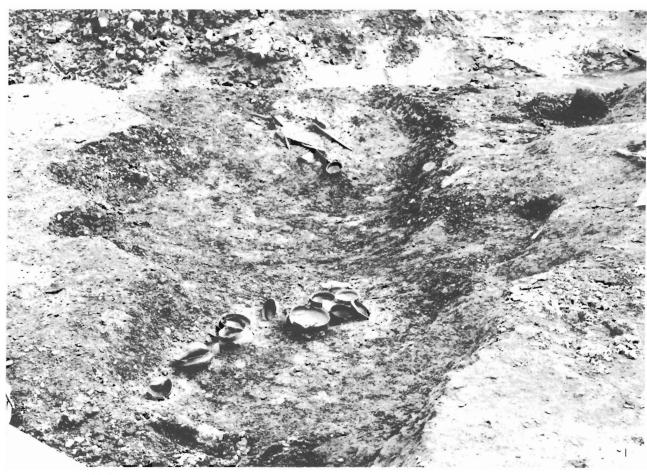
1. D46. E46グリッド付 近 旧大谷川右岸部 一南東より (西大谷地区)



2. D46グリッド付近 旧大谷川右岸部堆積 土一E47杭〜E48杭断 面 (西大谷地区)



3. D46. E46グリッド付 近 旧大谷川右岸部 一西より (西大谷地区)



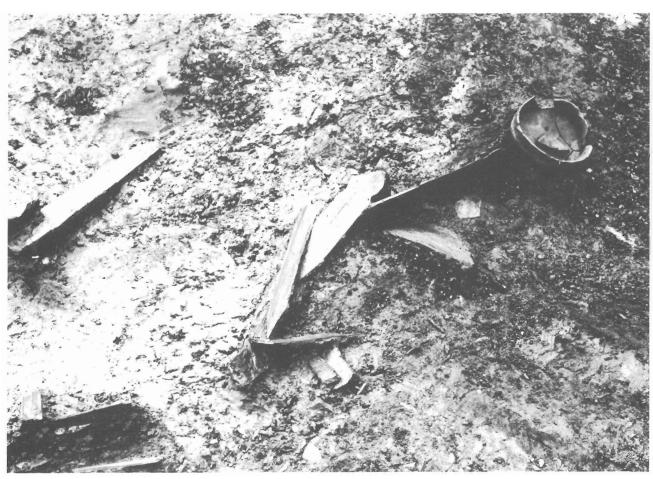
1. 旧大谷川右岸部遺物出土状態-北より D46グリッド (西大谷地区)



2. 個大谷川右岸部主器 出土状態—東より D46グリッド (西大谷地区)



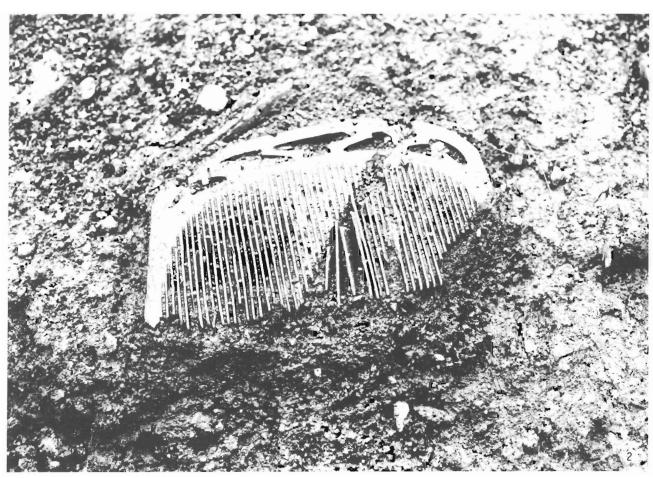
1. 斎串出土状態-D46グリッド (西大谷地区)



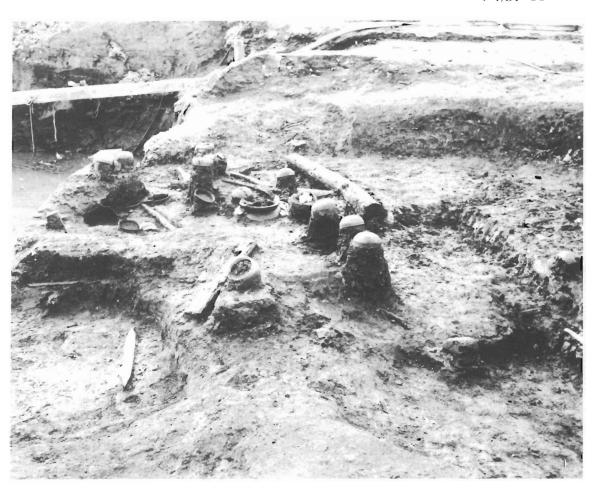
2. 人形・斎串出土状態-D46グリッド (西大谷地区)



1. 斎串等木製品出土状態-D46グリッド(西大谷地区)



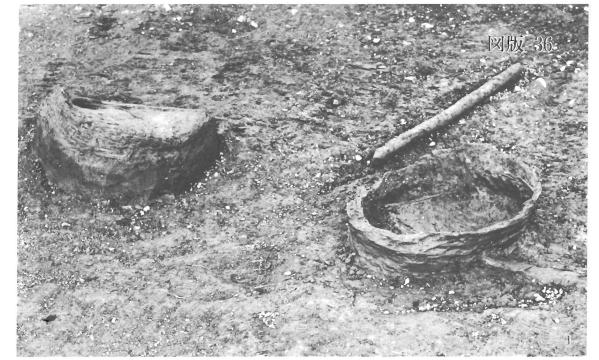
2. 横櫛出土状態-D46グリッド(西大谷地区)



I. 旧大谷川右岸部遺物 出土状態一東より D46グリッド (西大谷地区)



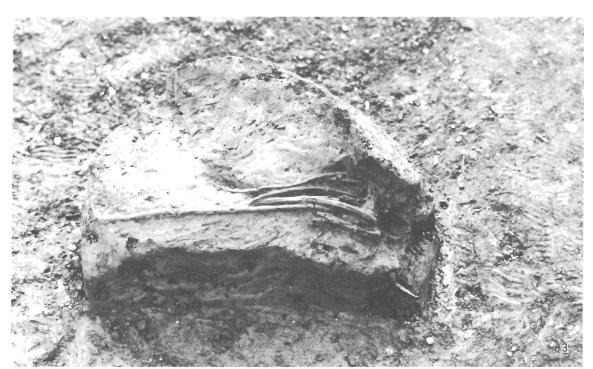
2. 旧大谷川右岸部遺物 出土状態―北西より D46グリッド (西大谷地区)



1. D46グリッド 籠出 土状態 (西大谷地区)



2. D46グリッド 籠出 土状態 (西大谷地区)



3. D46グリッド 籠削 り掛け様木製品出土 状態 (西大谷地区)



I. D46グリッド 籠出 土状態 (西大谷地区)



2. D46グリッド 曲物 容器出土状態 (西大谷地区)



1. 46列〜50列の中世遺 構面-南より (西大谷地区)



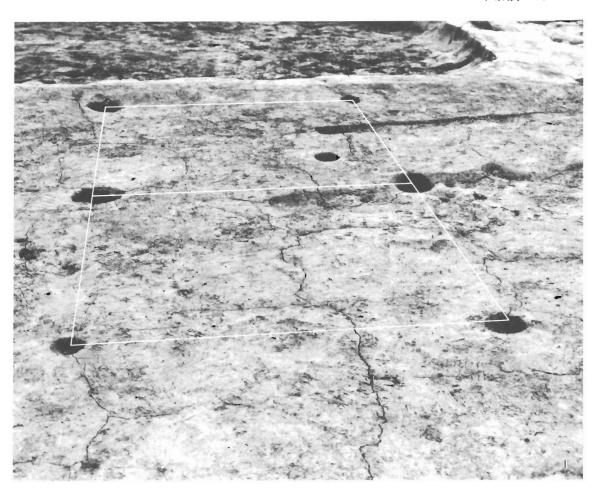
2. 46列〜50列の中世遺 構面一北より (西大谷地区)



1. SD28溝状遺構一北 より (西大谷地区)



2. SD29薄状遺構一南 より (西大谷地區)



I. SH39 掘立柱建物址 一北より (西大谷地区)



2. SP32 土坑状遺構―南より (西大谷地区)



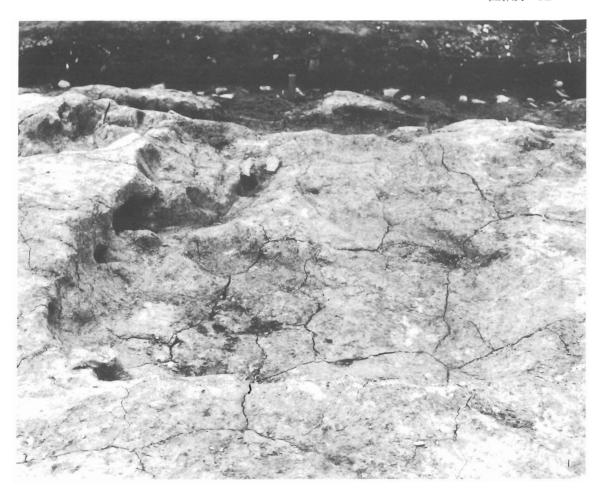
3. SP38 柱穴状遺構-北より(西大谷地区)



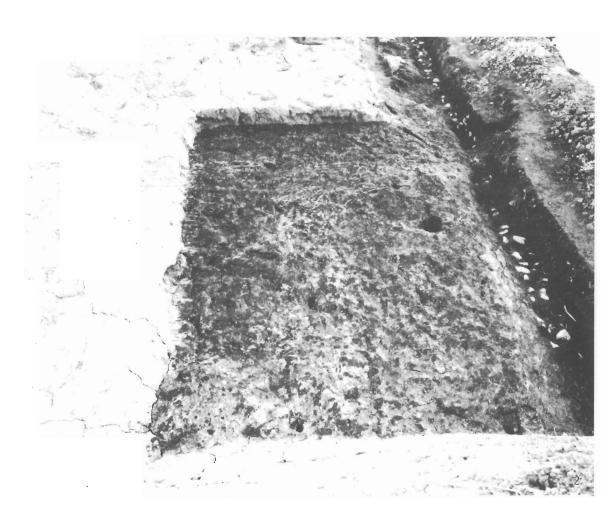
I. SX25 粘土採取跡 (西大谷地区)



2. SX25 壁面状態 (西大谷地区)



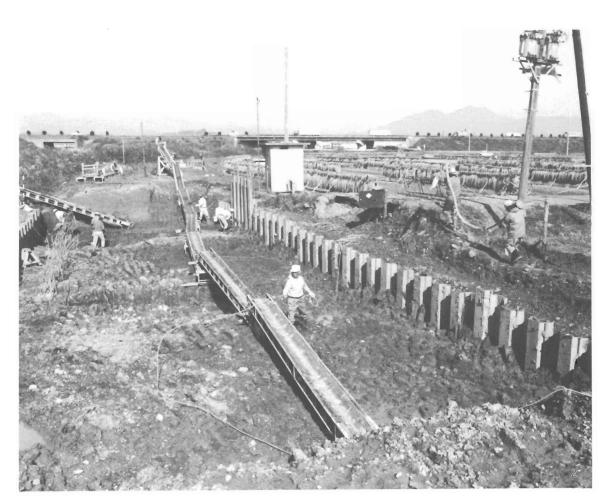
1. SX34 粘土採取跡 (西大谷地区)



2. SX36 粘土採取跡 (西大谷地区)



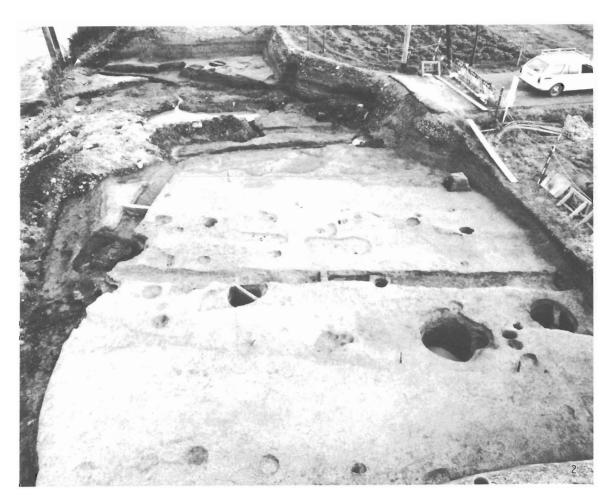
Ⅰ. 宮川 | 区調査開始一東より



2. 宮川 2 区調査開始 一南より



宮川 | 区奈良・平安 時代遺構面全景 一南より



2. 宮川 | 区奈良・平安 時代遺構面全景 --北より

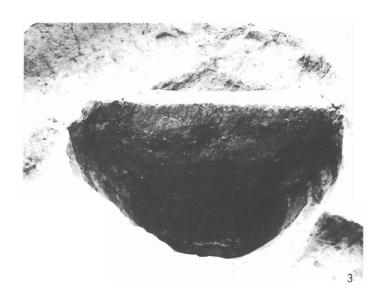
図版 45



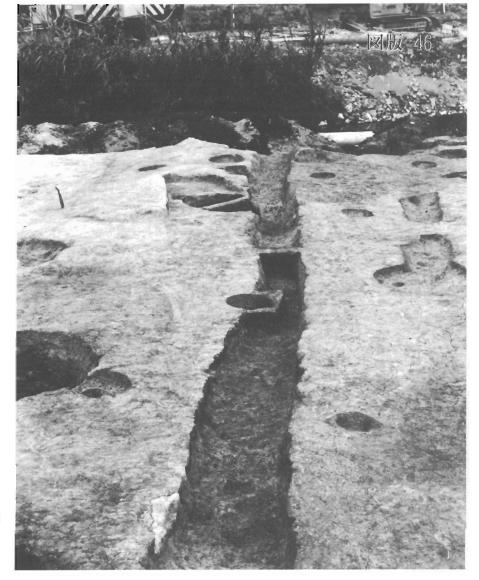




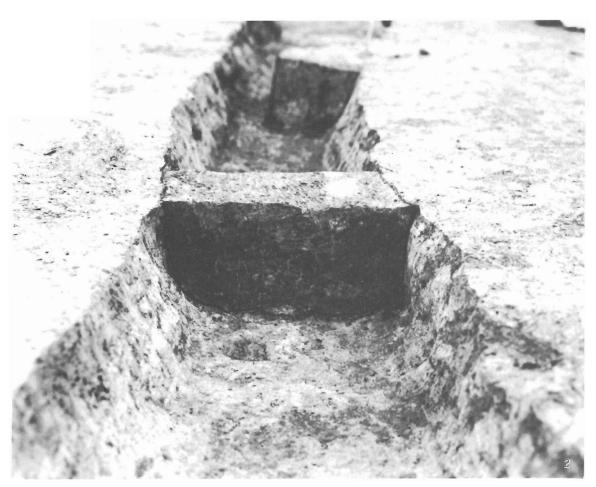




1. SE1 井戸状遺構-東より (宮川)区) 2. SE2 井戸状遺構-東より (宮川)区) 3. SE3 井戸状遺構-北より (宮川)区) 4. SPII 土坑状遺構-北より (宮川)区) 5. SPI3 土坑状遺構-北より (宮川)区)



1. SD4 溝状遺構 一西から (宮川1区)



2. SD4 講状遺構断面 一東から (宮川I区)



1. SD5 溝状遺構一南 より (宮川1区)



2. SD5 溝状遺構断面 -南より (宮川I区)



1. SE 6 井戸一西より (宮川 I 区)



2. SE 6 井戸―北より (宮川 I 区)



3. SE 6 井戸―南より (宮川 I 区)



4. SE 6 井戸一内部 (宮川 I 区)



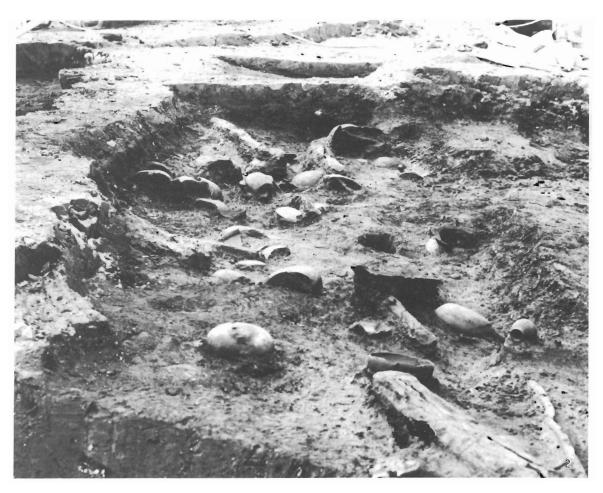
1. 調査完了状態一南より (宮川2区)



2. 調査完了状態-北より (宮川 2区)



1. 中世杭列―南東より (宮川2区)



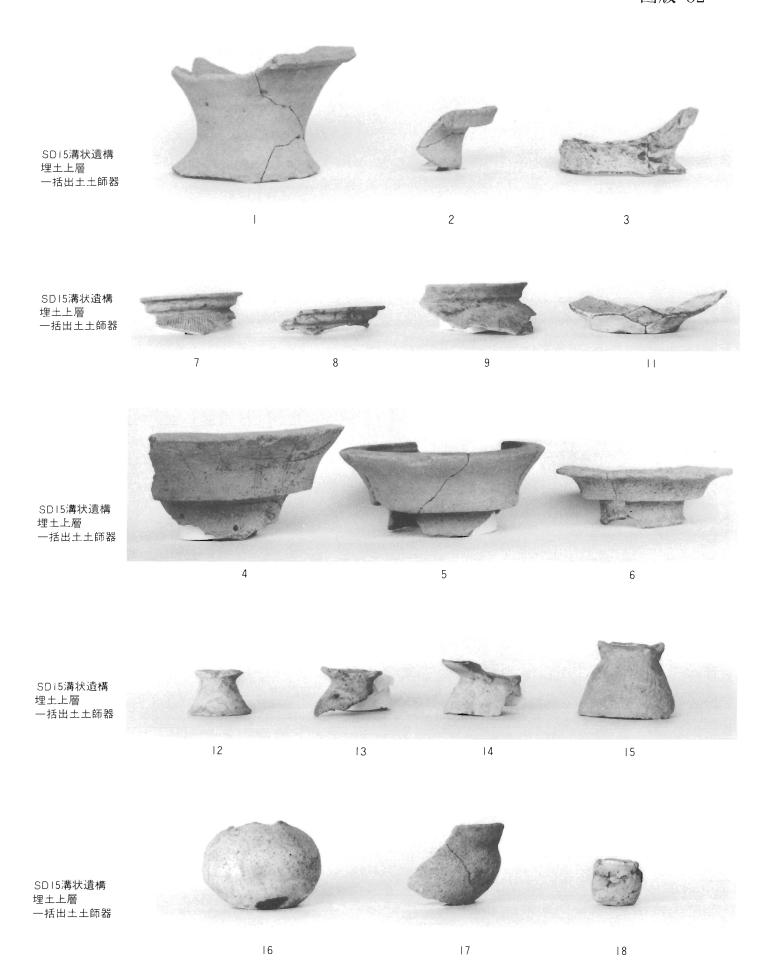
2. 旧大谷川内 堆積粘 土中遺物出土状態 (宮川2区)



1. 遺物出土状態 - 南より (宮川2区)



2. 木製品出土状態 (宮川2区)







西大谷地区 旧大谷川内 出土須恵器

38

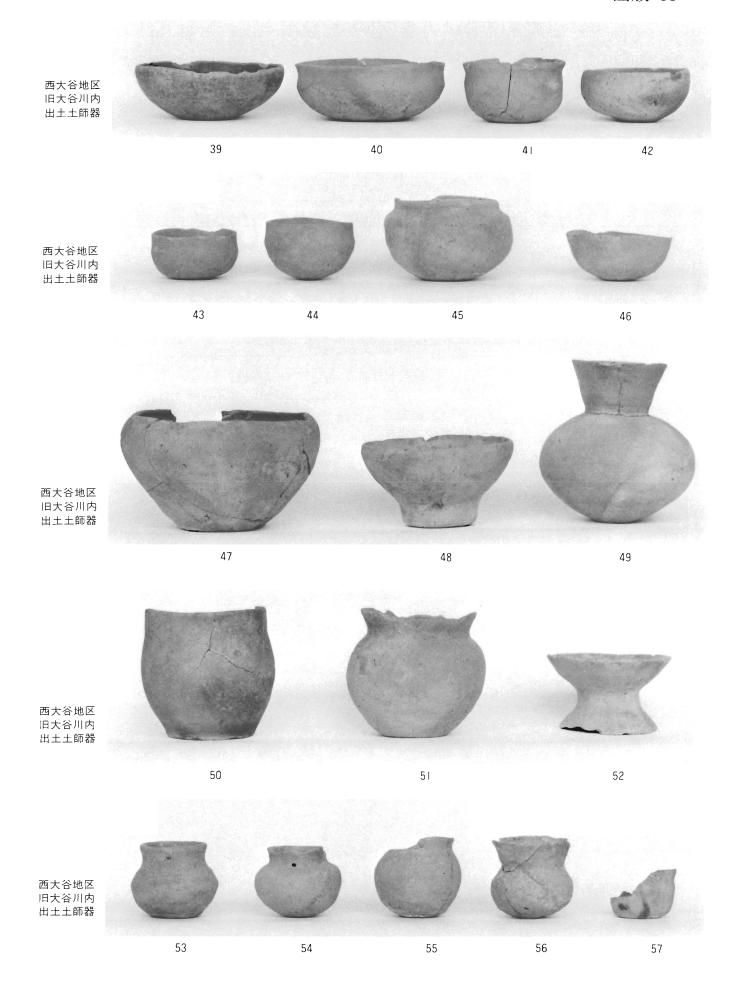


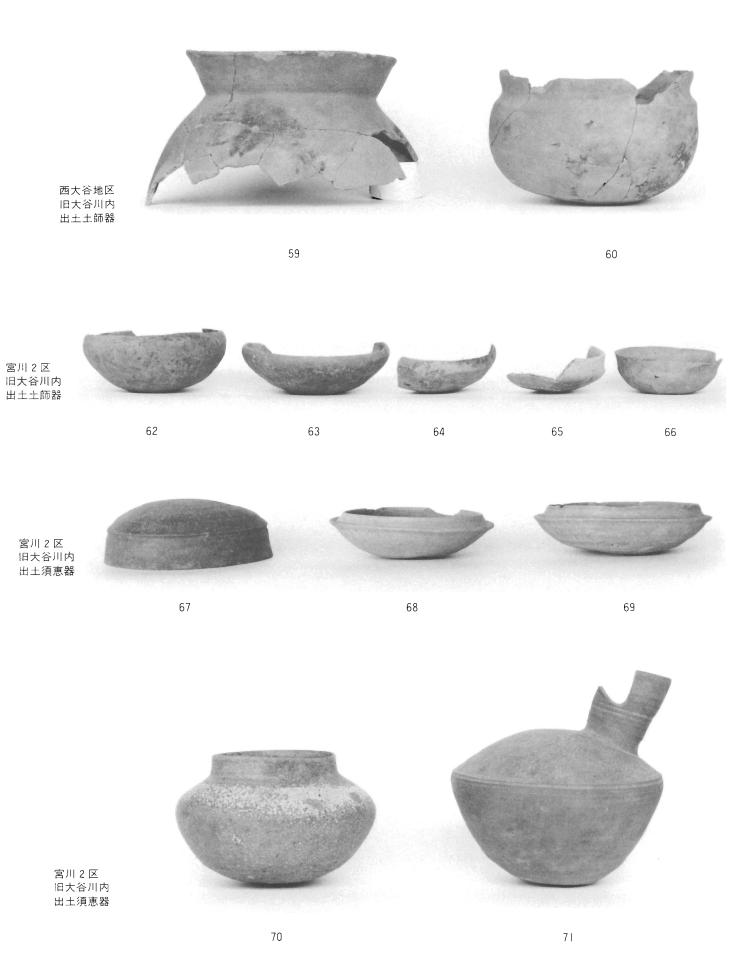
西大谷地区 旧大谷川内 出土灰紬陶器

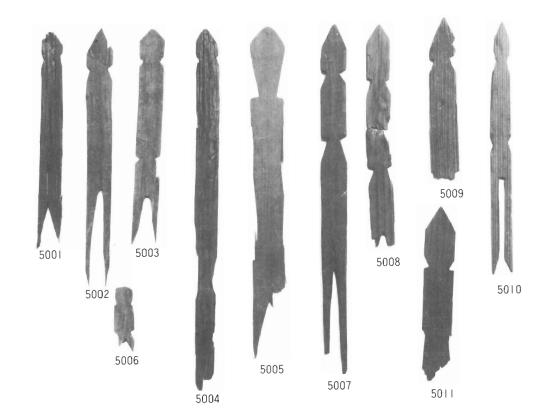
> 西大谷地区 旧大谷川内 出土土師器

37

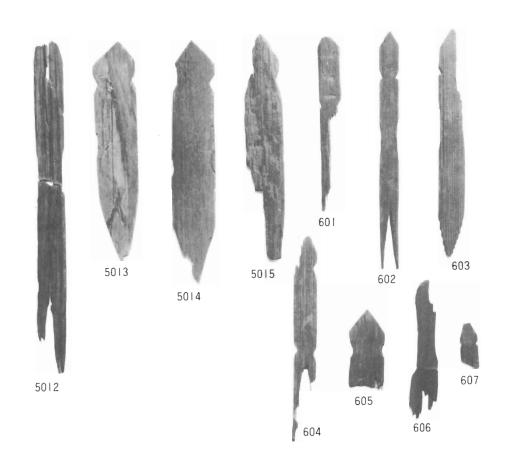
58



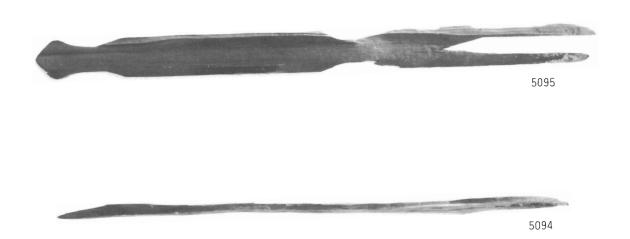




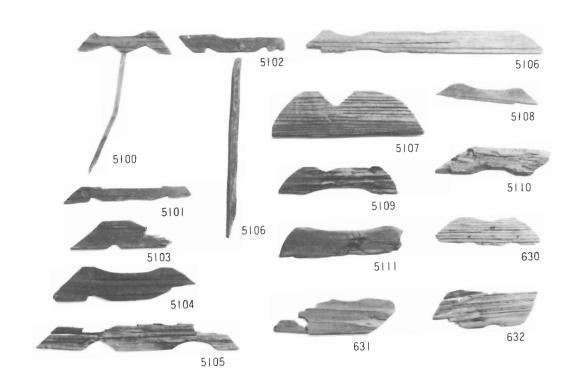
西大谷地区 F39・D43~D46 グリッド出土 人形



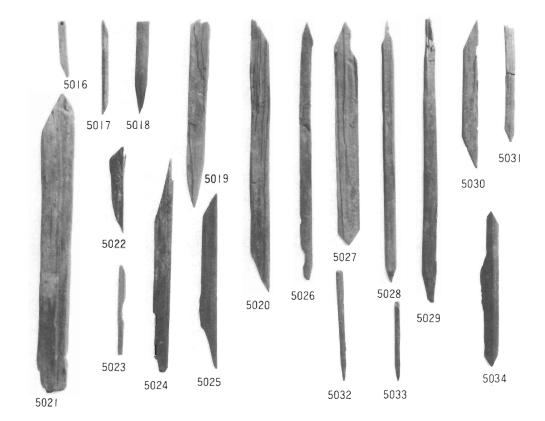
西大谷地区 D46グリッド 宮川 2 区 出土人形



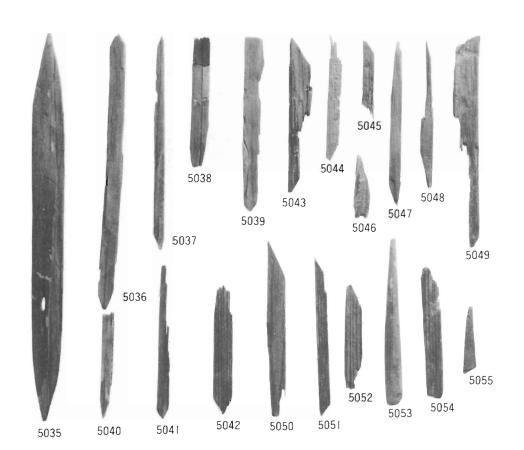
西大谷地区 旧大谷川内出土 大形人形・斎串



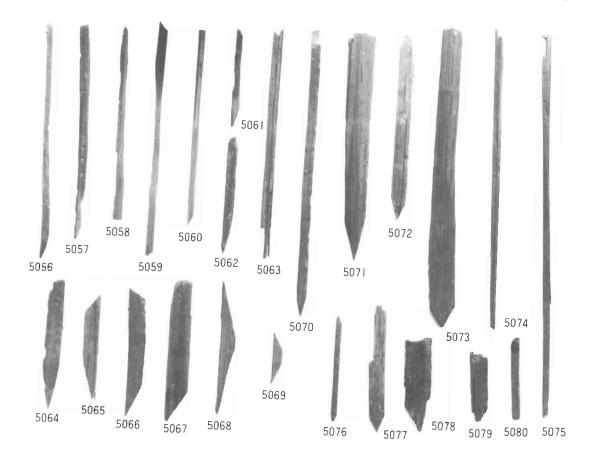
西大谷地区 宮川地区 旧大谷川内 出土馬形木製品



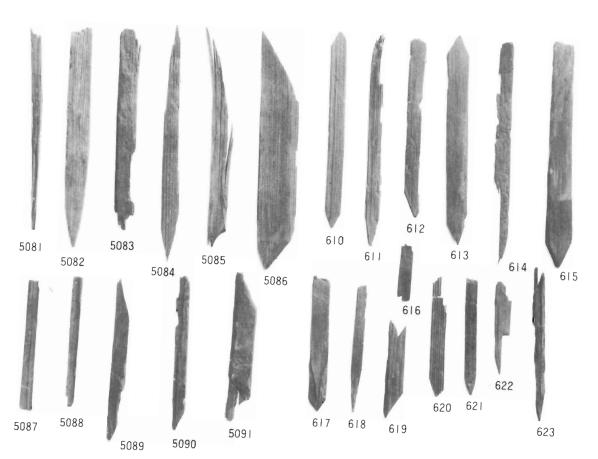
西大谷地区 F39~D45 グリッド出土 斎串



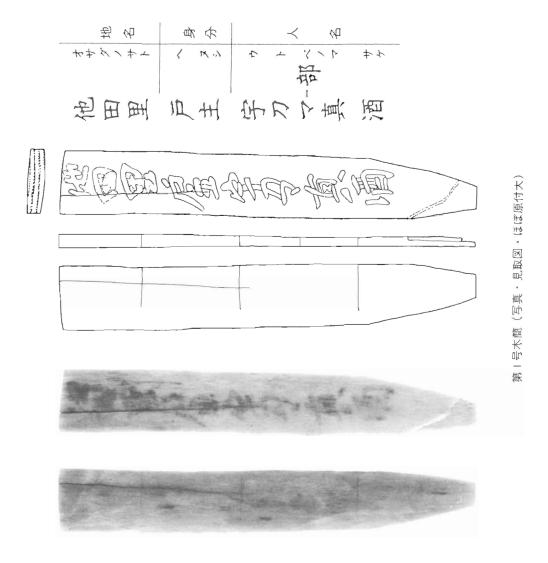
西大谷地区 D46 グリッド出土 斎串



西大谷地区 D46-22・23 グリッド出土 斎串



西大谷地区 E46グリッド 宮川 2 区 出土斎串



大 谷 川 I

昭和58年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業 埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原·元宮川遺跡)

昭和59年3月28日

編集発行 財団法人駿府博物館付属

静岡埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 三 創

静岡市中村町 166 番地の1 TEL (0542) 82 - 4031